［自由回答］

（注）調査自体に対する意見や、個人名に関するもの、その他不適切と思われる表現を除いて、大学別にまとめた。第２部第６章も参照のこと。

東北大学

- 地域社会と大学との交流について、現在何が行われ窓口がどこにあるのか不明な点が多い。公開講座、セミナーや地域の検診の宣伝ばかりでなく「地域社会と大学との交流」をテーマに、どのような検討が現在なされているか情報をリアルタイムに知らせて欲しいと思う。大学では学部が異なると、極めて情報が希薄になる点も問題と考える。さらに地域社会からの要望・希望についての情報もあまり流れて来ないと思われます。（センター等）
- 地域から新しい産業を発祥させるようなことには大いに貢献したいが、そのような視点の調査とは多少異なるような印象を持ちました。日本の風土思想がベンチャー企業を活性化する体質ではなく保守的であることは事実であり、地域においてこのようなことが改善されていく突破口となることを期待したい。（情報科学研究科）
- 大学は多様性を重視すべきであり、一つの評価方法、または狭い観点で業績や貢献度を評価すべきではない。今、不必要であってもいつかは必要になる可能性あり。研究のすそ野を拡げることが重要であると思う。（センター等）
- 専門分野においてはフィールド調査を行う場合などの協力が不可欠である。（特に政策研究）（経済学部）
- サマースクール、大学院講座、各種セミナー等を開催し市民にも開放し、もっと市民が大学に来ることができるようにすべきと思う。（医学部）
- 部門により地域社会との交流は異なる。自分の分野では専門細分化した研究が主流となっているので、地域との関係は疎かになっている。（医学部）
- 地域社会に開かれた大学であることは必要。しかし、地域社会が大学を利用しうるレベルに向上することも必要である。一方大学は、機会を作って地域に大学の内容、研究の内容を知らせるよう努力が必要である。（工学研究科）
- 東北大学の場合、地域との関係が必ずしも良くないと思う。地域社会が、世界に誇れる大学を持っていることを誇りに思うような関係作りが不足している。色々な活動を通して、交流して市民や経済人に親しまれるようにしないと地域の支援が得られない。地場産業への成果還元は容易ではない。東北大学での研究は国家的・世界的なものであり、地場産業は他の地域のように高度には発展していない。両者にあまりにもギャップがありすぎる。米と魚のとれる宮城にはハングリー精神がない。高校の教育程度もひどいものである。東北大学だけが突出していて、いろいろな意味での受け皿がない。不幸なことである。（科学計測研究所）
- 地域社会との交流が重要な分野も存在するでしょうけど、それほど多いとは思えないし、もし地域社会との交流がそんなに大切ならば、地域の立てた大学に移られては如何かと存じます。少なくとも、何かあれば引き返せる退路を準備した上での高見から見下すような地域交流ならばやめた方が良いし、本業（研究）が疎かになっている人の言い逃れの道を増やすだけではないでしょうか。出身大学と比べても或いは海外での勤務地に比べても何かあると「地域」が出てくるのが東北大学ですが、その分まじめに本業に精を出している方が少ないのではないでしょうか。「地域」に貢献したい方はポスト・予算毎に県立大学に移っていただいて、（むろん病院も昔の「宮城病院」として県立移管してかまわない）今の１／１０程度（或いはそれ以下）の地域貢献とあまり関わらない部門を集めた大学として再発足、県立大学と機能分担をすればいいのではないでしょうか。せっかく県立大学ができたのですから、地域はそちらにまかせましょう。それに、次から次に押し寄せる雑用をこなしながら、研究と教育のデューティを果たすと、時間的に考えて「健康で文化的な最低限の生活」を営むゆとりなんて存在しません。時間にゆとりのあるお方だけが地域交流でも何でもやって下さい。でもそんな人はあまり大学に所属する必要がないような（少なくとも実験系では）高校、大学の学生相手に２ヶ月くらいのサマーステューデントコースができるくらいの人手があるとよろしいのでしょうけど。（医学部）
- 地域への地方サービスは地方大学の使命の一つと考えるが、だだ実際に赴任して感じることは、地元の自治体は大学教師に対し、地元に貢献するのが当然とばかりに仕事を押しつけてくる傾向があり、それに応じるのが果たして真の地域への貢献になるのかという疑念である。現在の大学は本務をこなすだけでかなり多忙の上、地元の行政からは本務を無視したスケジュールで仕事を強制されているので、自身の研究時間があまりとれないでいる。行政自身は文化面での施策に力を入れず、大学教師に事業を請け負わせ、ろくろく報酬も出さずだだ追い立てるだけという姿勢が強い。こうした現状下で大学教師に地域への奉仕を無条件に押しつけたならば、本来の研究教育に支障をきたす恐れがある。（文学部）
- 大学の存在は地域社会との関係を無くしては成り立たないと考える。真に根源的な問題は身近にあり、独自の解決を目指すことは広く国際的にも評価されることと考える。地域の国際化のために大学も大いに力とならなければならないと考えます。（医学部）
- 大学が地域との交流を積極的に行うことは必要であり、地域も大学を活用すべく大学へアプローチすべきだと思う。しかしその為に学生の入学に際して一定の地域枠等を設けるようなことはすべきではない。大学の教育は全国的または国際的な視野に立って行うべきものである。（医学部）
- 地域社会はもっと地域の大学を活用すべきである。大学は敷居が高いと思わせないような対応が必要である。

（工学研究科）

- 東北大学は日本の中でというより世界で通用する人材育成を本務にすべきと考えています。もちろん地域の支援無くしては維持できない面が多々あると思います。世界で最高水準の研究が東北地方の仙台にあるという形を作っていくことだと思っています。社会とのつながり意識的なつながりを重視して、良識ある人間形成に努力すべきだと思っております。学生意識が社会に近づくようボランティア・インターンというものも重要かもしれません。（工学研究科）
- 色々な地域での交流の具体例、成功例をニュース的に知らせてもらうと参考になる。具体性のない情報はあまり意味がない。（センター等）
- 具体的な調査、委員会、協力の内容に踏み込んだ分析が必要と考える。たとえば国や地方公共団体からの依頼であっても、地域開発構想などの専門的な調査ではなく、あまり参加したくない。むしろ自分の専門の蓄積になるような協力、ひとえに経済モデルの開発などには積極的に参加する。（情報科学研究科）
- ［東北大学が］高度な研究を目指すのは当然ですが、その資金は科研費と企業からのものです。地域の企業は全くそれに対する指向がないのか、東京などの関東圏と関西圏の企業に依存しています。研究生、卒業生もそちらからの方面に出ていってしまい、とにかく地元が我々を生かしきれてないと感じます。仙台に過ぎたもの２つあり。昔、伊達政宗、今、東北大学。この現実は重く、大学の根そのものが危険となりつつあります。臨床系は地域に受け入れられることはありますが。（医学部）
- 地域社会に大学が行っている研究内容を公開する機会が必要である。また地域社会では現在問題となっている課題を関連分野の大学研究者に知らせ、協力させる機会があれば良いと考えます。（農学部）
- 大学が研究のフィールドとして地域社会を利用する場合、その地域のニーズを熟知し、それに答える用意を大学側が持っていなければならないのだが、その辺が不足しているために、その後の交流が発展的につながらないという場合が少なからずあるように思う。（医学部）
- 教育大学及び小規模の大学は地域社会（例えば県立大学など）が運営できる形態に移行すべきである。（流体科学研究所）
- 地域との交流は大切だと思うが、両者に閉鎖的なところがみられる。（理学研究科）
- 本年４月に赴任したばかりですので、大学の地域社会との交流の実態を良く理解しておりません。印象のレベルで言うと、地域との交流はかなり積極的に行っているように思います。しかし大学院の重点化が進行する中で、スタッフの不足や設備の老朽化等の現状では、教員のエネルギーのかなりの部分が教育に占められ、余裕を持って社会的活動や地域への貢献ができないのではないかと思います。国立大学の地域社会との交流という問題を検討するのであれば、それが余裕を持って行える物質的、人的、制度的条件を整える必要があろう。そうでなければ最後は教育や研究のレベル低下を招くように思います。（農学部）
- ただ一つ、国立大学はすべての国民に機会が均等でなければならない。（入学すべてにおいて）（理学研究科）
- 大学と市民社会（地域社会）に開放していくことは重要である。しかし例えば開放講座を開いても市民の参加は必ずしも良くない。大学をより市民に近いものとするには、宣伝をより多くしなければならないように思える。大学内部の保守性が存在し、それが市民との距離を大きくしている一つの原因であるように思う。また大学に経済的なゆとりがないことも教官の研究や活動を大きく制限している理由のように思われる。（薬学部）
- 国立大学の形態が悪いと思います。すべての都道府県に設置しているのは無理があるのではないでしょうか。地域社会との交流は非常に重要なこととは思いますが、本来それは、地域社会の高等教育機関が行うべきものであり、具体的には地方自治体が運営する大学が行うべきものと考えます。国立大学は地域ではなく世界を目指すべきものであり、そうした観点より、私見ですが、国立大学はせいぜい全国で１０校位とし、他の大学は地方自治体に運営移管するのがベストだと思います。こうすることで、地域社会側の必要とする研究、教育がよりダイレクトに大学側に伝わることでしょうし、研究資金面での援助もし易くなるはずです。また大学側でも地域社会の必要とする、地域に独自の人材を提供することも可能だと思います。一方国立大学として残るところは、地域社会とは無関係（失礼）に、世界を相手にすべき研究、教育を現在より、より効率的に行えるはずです。最後に仙台地区周辺に、もう一つ総合的な（つまり専門学校的でない）公立大学が必要と感じます。特に仙台地区では地域社会と連携する大学が少ないと感じます。（薬学部）
- 地域の範囲（県レベル、市町村レベル）で性格が異なり、かつ、地方（北海道、東北、関東…）でもかなり違っていると思われるので、それぞれの地域の特質との関連で大学の役割をみていく必要があるのではないか。（情報科学研究科）
- 大学の人間も地域からサービスをうけているのだから、できる範囲で地域にサービスすべきである。教育面では色々とできる面がたくさんあると思う。また大学の施設等も可能な範囲で地域の人の利用を許すべきであろう。研究については、仙台というのは世界の中心とはゆかないから、地域のことのみ考えているとレベル・ダウンにつながる可能性がある。学生も全国から受け入れた方が良い。大学の設置形態については、大学は基礎研究を行い社会の文化的、科学技術的基盤を作っていくという性格から、あまり採算性を考えすぎるのは良くないと思う。長期的視野で考えるべきである。但し、現在の本務構成にはずいぶん無駄があるのでその点は直すべきである。（理学研究科）
- 本調査の調査項目は文科系に偏っているようである。分野ごとのデータ分析がどうなされているか知りたい

ところである。いわゆる旧帝大と呼ばれる国立大学と、各県１大学として設置された国立大学、あるいは教員養成大学とでは「地域」の捉え方が全く異なる。この調査は主に後者対応と考えられる。前者の優位性などを言っているのではないが、前者では国単位での普遍性と流動性が求められるのに対し、後者での地域（県）との関係はもっと密であり、さらに密であることが望まれる。地域ごとの国際化というのは不思議な発想である。外国人労働者を多く受け入れている地域での文化交流、言語交流に地方国立大学が貢献せよとの意味にしかとれない。国際的という意味をもっと厳密に定義しなければならない。（センター等）

- 医療系学部と他の例えば工学、理学などの学部とでは、地域社会との関わりは自ずと違ってくると思われます。他の分野では教養的意義、産業的意義が重さをなしますが、医療系では「治療」というものがぶら下がり、少々難しい点があると思います。なお高等教育は収支を考えて行うべきものではないと思います。また１０年・２０年、いや５０年・１００年先を計った国の方針を期待します。（歯学部）
- 私自身、地域社会と大学との関係とか交流については、あまり熱心に考えたことはありませんでしたが、現在の工学部に移って以来（平成４年頃）ここでは市民との交流、地域との交流を拡げて大学を一般公開する雰囲気が大きいことが実感されました。（工学研究科）
- 地域社会との交流を深めると共に、国際的視野に立った教育と研究を行うべきである。（理学研究科）
- 大学がもっと地域社会に情報発信が必要。ほとんどの人が大学のことを知らなすぎる。これは学内でも同じ。大学内の教官の活動を発信できるチャネルを用意し、提供していけば地域からの要望や聞こえてくる何に対し、大学は何を地域に開かねばならないか見えてくるのではないだろうか。（電気通信研究所）
- 本来の大学のファンクションはもちろん研究、教育にあるわけです。地域貢献活動や地域との共生関係の維持が研究、教育と別次元でとらえられる場合と、かなりオーバーラップしてくる場合とが社会科学領域では存在すると思われます。研究、教育のファンクションを犠牲にするような交流には、私は反対です。地域貢献交流の具体的なあり方議論と並んで、フィロソフィーの究明が必要であるように感じます。（経済学部）
- 市民のボランタリーな動きに関心がある。ＮＰＯなどの住民運動に対し、専門的な情報の提供や調査による分析などがこれから必要になるだろう。（教育学部）
- 急務としては大学図書館を一般人にも開放すること、一例としてはスイスバーゼル大学図書館を調査されたい。またその為には全国ネットで（あるいは諸外国の図書館も含め）国、公、私立大学、市町村を問わずに文献収集のためには、もっと便宜を図る必要がある。また法令改正をして図書館専門職には語学系なら語学系、音楽（学）系なら音楽（学）系の高度な知識を持つ、（できるならば）米国やヨーロッパ諸国の大学図書館のように「博士号取得者」を採用し、あらゆる質問に関してもそれ相応の答えが出せる状態にすべきである。大学図書館を一般人に開放することは、地域社会との交流の第一歩であろう。（国際文化研究科）
- ここで特に申しあげる意見を持っておりませんが、強いて述べさせていただくならば、流動的なアカデミックポジションの確保が２１世紀の研究を実りあるものにする上に必要不可欠かと考えます。また大学の向かうべき姿について教職員のみならず学生をも含めて論議すべきかと考えます。（薬学部）
- 地域社会との交流、協力は必要だが、大学の持つべき大きな観点、すなわち世界または人類に貢献する研究教育（研究者の育成）をないがしろにすべき（こちらがより大切）ではない。（反応科学研究所）
- 地域社会（企業や学校、団体等）との交流の窓口が大学側に設置されていない（されていても機能していない）ことが問題だと思う。（教官や事務官）（病院）
- 地域社会との積極的な交流ができない件、互いに必要としていない、あるいは一方的に必要としている場合と必要とする場合が明確になっていないことが、平均的に交流が少ないと評価されている理由と思います。（所属部局不明）
- 地域社会と大学の交流は一口に言って極めて少ない。これは大学そのものの強度の閉鎖性にあると思われる。特に国立大学においてその感が強い。地域との交流云々も大切であるが、まず第一に大学間の交流を活発にすることが必要ではないか。人事、運営、予算、カリキュラム、学生の移動など、大幅な大学間交流を進めるための仕組みを作ることが望ましい。個別の大学ごとの閉鎖性が強い限り、大学の発展も教育の充実もあり得ないことと考える。（農学研究科）
- 専門が防災とか環境面のものであり、企業を対象とした地域協力はあまり考えられない。行政面での技術的提言、助言等は現在も大いにやっている。これらの分野では地域、全国、全世界に対する貢献は、すべて平行して可能である。（工学研究科）
- 上記のような交流は非常に重要である。しかし双方とも忙しすぎる。社会の価値観が効率主義、競争主義、成果第一主義から抜け出さない限り、制度を考えても中味がついてゆかない。学生の虚無主義もこの辺に根ざしていると思う。（工学研究科）
- 理系の場合、大学の研究が目指すものと地域の目指す（欲しい）ものが必ずしも一致していないと思うので、交流はなかなか難しいと思います。（流体科学研究所）
- 東北大学の近辺に卒業生が就職したいような企業がほとんどないことが一番の問題であると思います。東北地方の優秀な高校生を教育して中央に送るだけという図式が固定化しているようです。（工学研究科）
- 両者の交流は、国立大学の存在意義から考えて重要なことだと思います。しかし現在の状態では地域の大学に対する要求を肌身で感じることは出来ませんし、また地域側とてそれほど強い交流の必要性を感じていないように見受けられます。つまり単に交流といってもお互いに何をしたらよいのか、皆目見当がつかないと言うのが本当のところですし、また面倒なことをしてまで交流する必要性を互いに認めていないように見受

けられます。「地域〜大学の交流」という言葉を口にする以上、具体的にどのような形態の交流を持ち、そしてお互いにどういうメリットがあるのか、その辺を交通整理するオーガナイザーが現れない限り、現状を改革できないように思います。（科学計測研究所）

- 大学が大衆化してくると思いますが、その際、各大学はそれぞれ特徴を持ち、役割分担（棲み分け）をすべきと考えます。（工学研究科）
- 大学が地域の要望に応えられる機関であることが望ましいと思うが、教員の役割は研究教育にある。従って教員が専門分野の研究成果を公開講座などを通じて地域住民に公開したり、また専門的知識を必要とする場面で協力する形が無理のない交流かと思う。社会、人文科学分野の研究者に限って言えば、地域社会が研究あるいは観察の対象になるだけに、積極的に大学が所在する地方、県、市を対象にした研究、発言が期待されている。現にその期待に多くの教育が応えているが、その中で様々な形で地域と関わっている。その種の交流が今後一層活発化すると、大学が地域にとって今以上に身近な存在になるでしょう。（理学研究科）
- 現在国立大学の予算は、非常に不十分なものである。基本的に明治期の国立大学の理念は、現在のものと異なる。旧帝大系国立大学は、文部省を離れた法人化等を考えるのも行政改革、２１世紀のあり方として必要なことと考える。その自由度がない現状で、地域社会との交流を考えても無理なシステムになるのではないかと恐れる。（加齢医学研究所）
- 地域社会との交流は大いに推進させるべき。互いに得ることは多いと思う。アンケートで得られた情報を公開し、要望の多いものは是非実現させるよう導いて欲しい。（農学部）
- 今まで専門の研究では地域社会とは特に関係なくきましたが、これからは本調査の設問を参考にして、研究、教育において地域への貢献を意識していきたいと思います。（経済学部）
- 東北大学の使命としては全国的レベルでの思想が必要であるが、地域社会と密着した大学の存在も必要である。東北大学として両者を目指すのは無理がある。東北地区全体の問題として農漁業以外の産業や大企業も乏しいことから、理工系の地域社会とのつながりはあまり望めない。（加齢医学研究所）
- 大学と地域または地域行政との接点が学長や個人であるために、パイプが細いのではないかと思います。制度的に両者が定期的に話し合える場の設置が必要と考えます。高等教育との接点すらない現状では、これからの大学、大学院教育を考えていく上で大きな問題が出てきているような気がしています。（理学研究科）
- 大学は地域・社会の要請に応える部分と、専門領域での尖鋭化を目指す部分が並立しなければならないと考えます。またこれまでの社会・研究の経験や、これに基づく外部に視点をむけた活動と専門知識に基づく独自の展開を推進する場が大学であると感じています。（素材工学研究所）
- 何らかの形での調査結果（のまとめ）の公表・配布を希望します。個人的には大学は社会と積極的に交流すべきだと考えます。特に学問的成果を人類共有の知識（知的財産）として社会に伝えていく義務は大切だと思います。実際に伝えていく場は各大学が所属する地域になるはずで、そういう交流が私の考える大学・地域交流の第一の形態です。（理学研究科）
- 私の専門が地域社会との関連が全くないので、一般的な意見としてしか応えられませんでした。分野によっては、この問題「地域社会との関係」は意味を持たないと思います。（情報科学研究科）
- 国立大学は教育面における国民、住民へのサービスを担っている機関である。またを私の所属する歯学部（医学系）では医療面での住民サービス（地域住民へ直接、あるいは歯科医への教育、情報の提供、２次医療）を担っている。これらの観点が現在の教官層には希薄であるように思われる。大学内での自己意識の改革が必要である。（歯学部）
- 大学の自立自主性を地域なり企業なり（国なり）に譲り（売り）渡せば存在価値がなくなる。しかし人的交流が閉鎖的であっては、活動研究そのものにも支障を生ずる。地球規模の関心と、地域との架け橋に大学はなるべきであろう。（医学部）
- 大学院大学は、研究・教育を中心に行う役割を持つが、大学によっては地域社会との交流を持つと負担が大きくなる場合があるように思われる。医学部の場合、医師を地域に派遣すると研究スタッフが減少するという問題もある。このように国立大学の中にも役割の相違があってもよいと思う。（医学部）
- 大学での研究と日常の業務に忙殺される毎日ですが、地域あるいは大学以外の教育・研究機関との連携を密にし、交流を深めることは自分の行っている研究の意義を再認識し、互いに意識を活性化させる上でとっても重要だと思います。本学では学部毎に行っているオープンハウス以外にも東北地方の高等学校への出前授業も実施しており、今後機会を見つけて参加したいと考えています。（理学部）
- 国立大学は本来、公共のためにあるものであり、国の予算で支えられているものであるから、内部で得られた結果は大いに社会に還元されるべきものである。企業などと共同研究を進めようなどとすると、“それはアルバイトであろう”、“大学の仕事ではない”などという見方をする教員が多いのは残念なことである。（工学部）
- 研究業績として評価をされる内容でないと［地域交流は］盛んにならないと思われます。特に本学は大学院大学として世界一の情報の発信源になることが期待されているので。（医学部）
- 我々は主にレベルの高い企業との交流が主となっている。それは交流のある企業は未来技術を大学から得ようとするためと考える。地方の企業にとっては、そのような未来よりも現在が重要であり、そのような観点で物事を考える我々とは当然議論が合わない。地域社会との関係は大学教育への理解を求め、将来の人材養成に貢献することであると思う。やはり研究面での交

流は、余裕のない企業とは難しい。（工学研究科）

- 大学は本来地域とのつながりを強くもちながら発展していく必要があります。近年多くの大学が都市の中心街から周辺地域に移転するのが多く（ほとんどが財政的な問題のため）非常に問題であると考えます。私どもの大学（東北大学）でも郊外の山の上に移転（すでに大部分は移っているが、さらに本格的）する計画であり、地域の住民との交流という点からすると後退であると考えています。バブルがはじけた今になっても、バブル期のものの考え方が支配しているような気がしてなりません。その意味から本調査が大学と地域社会との結びつきを強める方向での、よい刺激剤となることを切に願っております。これは学術的なアンケート調査であると思いますが、出来れば社会的にも発表していただき、大学人以外の人たちに内容が知られるようになることを希望いたします。（歯学部）
- 地域への協力と地域の研究は、大学独自の理念と対立する関係ではなく、むしろ相補的な関係にある。生きた現場から研究テーマの創造をしていくにあたり、両者を対立物として措定する組立はよくない。私自身は地域と年間３０～５０回の交流（研究、意見交換、相談にのる、講義をする、学習会に望む、会議で意見を述べる、政策素案作りをする）を行っており、これと大学人であることは統一された課題と考えている。（歯学部）
- 国立大学といっても多様で、その多様性をより有効に配置すべきである。その為には人事の移動、交流、公募（真の意味での）、公開が必要である。その人がより力を発揮し易い場所に人を配置し、それぞれの多様な能力をランクづけせず、尊重できるようにする。その為には偏差値によるランクづけを無意味化する工夫が必要である。いつでも自分の学びたい先生のところへ（現実の制約が許せば）行けるような流動的な大学院の制度にすべきである。各分野を（このアンケートのように）ならして論ずるのではなく、個々のディスィプリンのあり方を尊重してきめの細かい議論をすべきである。具体的には人文科学の基礎問題、それも世代を継いで蓄積されていく情報と技術、それを担っていく者の養成は主要な国立大学に税金の負担を以て委託すべきである。いわば、そうして学問的現場は一般の学習者（地域の聴衆）にとっても大切な学習の場となるので、閉鎖的であってはならない。（文学部）
- 具体例として（大学は地域社会に貢献していない）なぜ、日本の住民（子供や成人）だけが国際的に虫歯が多いのか。このテーマ一つとっても、大学は地域社会の保健に無力であることの証拠である。住民の保健のサポートは大学だけの役割でないにしても、その責務は大きいと考える。諸事情があるにせよ、このような大学（この場合学部）は税金の無駄遣いと考えよ。皆様方の調査の意図とは離れた意見ではあるかもしれないが、国立大学と地域社会の交流に国民はあまり期待していないと思いますよ。（歯学部）
- 学問や教育のユニバーサル、不変な追求姿勢から言うと、地域は一つの事実の発生場所と考える。そのことと地域支援の意味は、若干異なるのではないか。大学が必ずしも地域支援に全力を注ぐ必要はないように思う。しかし人類の問題発生場所、現象の発生の場所としてのある地域との交流関係は重要であり、不可欠であろう。（教育学部）
- 民間との交流を妨げている規制や複雑な手続きの廃止が要求される。「社会の奉仕者として、国家公務員としての義務」という考えをやめて、交流に参加することのインセンティブをしっかり与えるべきである。（経済学部）
- 理学系で地域の産業内容と結びつかない研究をしているためもあり、最近の大学組織の改編で教育の見直しが急務であり、大学内部の教育への対応に追われて全般的に消極的な回答になったことかと思います。アンケートの中で私自身の質問であっても、大学に勤める公務員としての立場と自分の所属する地域（家庭の属する地域で職場を離れた場合の）における個人としての立場では回答の仕方が変わってくると思われます。職場を離れた立場からは、体力の許す限り積極的に関わりたいという意欲はあります。勤めている間は時間的にも余裕はありません。（理学研究科）
- 地域交流の定義がいまひとつはっきりとしないが、特に教育間での交流は必しも業務としてとらえる必要はなく、余暇を利用した趣味の一環とするやり方もあると思う。（情報科学研究科）
- 教職員の任期制を廃止すべき。教職員の公務員としての身分を保障しなければならない。（反応科学研究所）
- 市民公開（共催）の後援会やワークショップ等をもっと開催するような努力が必要である。市や県など種々の企画に大学人は単に評論のために参加するのではなく、実際の企画の中の一員として参加するような努力が必要である。（センター等）
- 研究費が国から支給される現状では大学教官はぬるま湯に浸かっているのと同じであり、真の基礎研究ではなく新技術創生に関する研究でもなく中途半端な研究に終始してしまい、単に職業能力を養成するだけの役割しか果たしていない。プロの社会ですぐに役立つ者の養成は明確な教授ビジョンの下に行う必要があり、研究に対する姿勢を学べるように産学共同センターの充実を図り、それをてこにして社会へ貢献する道を検討するべきだ。（所属部局不明）
- 地域社会への貢献はどのような大学においても重要なことであるが、日本全国、あるいは世界への貢献も重要であることは言うまでもない。大学によってその重点の置き方が異なると思う。地方重視型、世界貢献型など多様な大学の在り方が求められているのではないだろうか。（電気通信研究所）
- 専門分野によって質問の意味の取り方が違う部分があるように思われました。（医学部）
- 一週間６．５日学校で働いています。雑用は一日平均すると夕方６時位まで続き、自分の研究時間もなく、とても地域社会との交流云々と言うところまでゆとりがありません。交流した方がいいことがわかっていても現状は無理ですから。（理学研究科）

- 本学はかつて地域との交流が密接であったのですが、所在地の大都市化によって次第に地域と離れていったように感じます。（病院）
- 積極的に地域社会と交流しつつ、世界に目を向けた大学として飛躍を続けて欲しい。（医学部）
- 地域との交流を重視しない大学は地域に存立する意味がない。大学・高校が中心となって形成される町は若者がおり、活気ある良い街となり得る。大学人はこのことをもっと強く意識するべきだ。そして積極的に地域に出ていくことが大切だ。このような開かれた大学が日本各地に作られ、制度化され、その活動が正当に評価される体制を整える必要がある。多忙、孤立化する大学人がふえている。難しいことも多いが地域に、高校に、中学に出ていって果たす役割はたくさんある。本調査で意図する内容は極めて大切だ。（素材工学研究所）
- 私自身は地域の人たちが大学に対してどのように感じているか詳しく知りたいという希望はあります。例えば大学生に対して、大学教官に対して（教授とは、助教授、助手、技官）、大学事務に対して（組織といった方がよいかもしれません）、理工学系、文科系に対して、一般の人はどう考えているかがわかれば（全然知らないと言う答えでも良い）こちらの対応もやり易くなります。（工学研究科）
- 学問には所詮人間の普遍的問題を対象とするものと、具体的個別的問題を対象とするものがあることは言うまでもないが、地域社会を強く意識するものは後者である。この後者を持って学問全体に対して、どう対処するつもりかと問われても答えに窮する。回答に苦慮した次第である。（文学部）
- 研究者の養成には長い時間がかかる。社会への貢献形態はニーズに応じては約対応すべきだが、これを評価対象として根無し草のような研究者を多数作ると大学は基盤を失う。地域は大学の特質を「うまく利用する」ことを考えて欲しい。大学は自分で断えざる評価を行い公開すべき。（所属部局不明）
- 地域社会と大学との関係と、これらのニーズとの関係で検討することが本調査の一つの視点なのだと思います。この相互利益（ベネフィット）は、これからの大学創の大切な項目だと思います。一方、地域社会が自らの利益とは全く関係のない“花”を創りたいという思いもあると思います。それだけに経済的地盤のある地域もあると思います。私はこの何の足しにもならない“花”をサイエンスとして創り出すことが大学の役割の一つでもあると思います。しかし自然科学者の中に自らの研究活動・成果を文化としてとらえる視点が非常に薄いように感じられます。それぞれの地域社会と共に“花”のある自然科学を、それぞれの大学が創っていただきたいと思います。（理学研究科）
- 地域に大規模産業がなかったことが本学のこれまでの研究・教育の姿勢に影響していますが、今後、世界的に見ても東北地方に高度技術産業が育つことは自然なことです。このために本学の知的資源が活用され、また本学が刺激を受けて学問的発展を促すという構図は現実的だと考えております。（工学研究科）
- 興味があったのは大学の将来に関する質問です。特に事務組織の効率的な運用は達成できたらすばらしい。（工学研究科）
- 地域社会と大学との交流に関してはその地域の特質（具体的には工業地帯とか研究所が多いなど）に依存すると考えられる。従って、大学は地域社会に対していつも開かれた状態でなければならないが、交流に関するイニシアチブは社会にあると考えている。その意味で地域社会からのアンケートをとる必要があります。（薬学部）
- 社会が大学の教官に何を期待しているのか明らかにして欲しい。現状の大学教官の中には、社会的に対応できるような人も多いように思われる。その意味では積極的に社会と交流していくための第一歩として、まず地域社会に開かれた大学である必要がある。しかしながら現状を見ると、教育・研究・社会への貢献など教官に課せられた期待は過大であり、全体としてのサポート体制の充実や事務の効率化が進まなければ無理である。（工学研究科）
- 理工系学分野に限定すれば、その地域に関連産業がない限り自分の研究を直接的に生かすことは無理であろう。地域の人々の教養を高めるといったことへの協力が出来る程度であろう。研究室に配属される学生を見ても大学所在県出身者は一人もおらず、また地元（大学所在県）への就職もない。地元への就職は地元への企業研究所の誘致を数多くしない限り、増えることは期待できない。国立大学と地域社会の交流を今以上に求めるのであれば、大学の所管を県や市とし、お金の出所をその地域からのものにして、その地域に役立つ教育・研究を行うしかないのではないか。もちろん、すべての国立大学が県立・市立になる必要はなく、資金の得にくい分野や国が力を入れて推進しようとする研究分野については国立大学を存置し、教育・研究にあたるべきである。（反応科学研究所）
- 社会人の研究ということと共に、高齢者などを含む生涯学習という観点からも大学を地域へ開放すべきであると考えている。また、行政を含めた地域の各団体との交流は学生の教育、やがて地域に貢献する学生を育成するという面からも重要であると思う。（歯学部）
- 私どもの学科でも地域に開く設計教育と題して「ワークショップ」という課題を３年前から行っています。大変ですが評価はまずまずのようです。しかし、地域社会はいうが易し行うは難し、すさまじい大衆性との戦いでもあると感じています。（工学研究科）
- 大学でもさらに実用的研究をやることが重要。（情報科学研究科）
- 地域社会との交流は重要だが、あまりその点にとらわれると大学の自主・独立性が失われると思う。大学は文部省からも地方自治体からも独立していなければならない。（工学研究科）
- 大学は地域に限らず社会に対して開かれるべきだと思います。従って、地域への貢献を特別に扱うこと自体変な感じがします。地域とか全国とか世界的とかは

個々の研究者レベルの問題であり、自然と交流が必要に応じてなされるべきものと思います。但し、組織としての情報の公開は現状では不充分と思います。（工学研究科）

- 日本自体がアジア・世界の地域なので府県レベルの地域交流との視点は、あまりにも狭視的立場ではないか。国立大学（新制）の果たした役割を見たとき、この10年間は色々雑多な国立大学は出来たが、旧来の体制は維持すべきであり、むしろ新しい名称を付けた新設大学、機関の存在価値を見直し、新制大学といわれる国立大学へ予算を多く回す必要があるのではないか。国際交流を含めて、以前より実施している人や部局はしている。「国際交流」「地域交流」という看板が表に出てきたころから表面的な＜さわぎと祭り＞でゆがめられてしまったような気がする。もう＜地域交流＞などという言葉は死語に近いのではないか。必要であれば実施済みの事項なので。（センター等）
- 県（宮城県）市（仙台市）（地方自治体）ならびに地元の民間企業において、大学での研究に対する重要度、必要性に対する認識が不足している。この点はむしろ中央（大都市）における自治体、民間企業のトップあるいは技術者のそれは極めて熱心である。ニーズは地方にも大いにあり、むしろ発掘する側の努力が問われているように思う。もちろん大学側の努力も必要。両者の相互理解とコーディネーター的役割がポイントであろう。（素材工学研究所）
- 本学医学部は宮城県唯一の医学教育・研究機関であるため、同時に地域のリーダーとして責務もあり、積極的に地域社会と交流していくことが必要である。さらに先端的科学研究のリーダーでもある必要がある。これが他の旧制帝大系の医学部にはない特色であり、この特色を生かしていくことが肝心である。（医学系研究科）
- 大学教員は雑用の多い職です。例えば学位審査、各種委員会、学会関係等々。しかし、これらはやらなければならないことで、その上で研究業績が問われる時代です。教員の評価が論文という形でアウトプットされなければゼロとなる昨今で地域サービスもせよというのは理想と現実とのギャップが大きすぎるように思いますがいかがでしょうか。（医学部）
- 地域社会との交流の重要性は、大学や分野によって異なってよいと思う。（農学部）
- 地域社会と交流することを阻むものではないが、しかし大学は地域社会を超越して、もっと広い範囲の将来を問題にしても良いと考えている。世界がこうあるべきだ、こうなるべきだという考えがあって、それに照らせば地域社会にはこのような努力が必要となるので、その役に立つような交流を図る、そうであれば問題はない。しかしそ域社会だけが先に進むような動きに、大学が関与する必要はない。世界がどうなるべきかなどという問題は原則として個人の自由な発想に基づいて検討されるべきものであり、地域社会や国から独立した立場で検討することが大学の中の個人に許されると考える。（工学研究科）
- 大学によって地域社会定着型とそうでないグローバルなものと役割分担があると思いますので、本アンケートのようにすべてをまとめて論議するのは危険です。悪平等は絶対避けた方がいいと思います。本アンケートがどのように利用されるか少し不安です。（工学研究科）
- 東北大学はこれまでも研究優先の教育形態をとっており、地方や地域に限定されない人材育成・教育をその責としてきたと考えている。（国際性のある人材育成優先）だだし大学内で蓄積してきた知的財産に関しては地方や地域へ還元するべきものと考えているが、これまでの大学機構の中でその任を果たせる部局はなかった。これは地方自治体が備えるべき組織であると考えるが、地方や地域のこれまでの経済活動の形態の違いもあったが工学的ではない背景にあり、行政的な対応が立ち遅れてきたのが事実である。（今もって地方行政が大学の求めている研究交流と同位相にあるとは思えない。県工業技術センターの行う業務の研究指向性が低い）（工学研究科）
- 平成１０年４月より本格的な産学共同の未来科学技術共同研究センターが設置される予定になっており、その目的の一つが地域社会や大学との新産業創出にあり今後の成果を見守りたい。この調査のデータの解析・解釈は難しく、どのように扱うかが問題である。（工学研究科）
- 大学は全国的・国際的に通用する人材の養成と研究を行うことを使命としていると思う。その一方で研究活動の公開、公開講座、技術のアドバイス、小、中、高校生を対象とした理科教育、社会人学生の受入等を通じて地域社会と交流し、これを大学の教育と研究に反映させることも重要である。しかし現実には国立大学のスタッフ不足、地域に大学の研究を活用できる企業がないなどの理由で、必ずしもうまく交流が出来ていない。我々は上記アンダーラインの活動を実施しているが、これらの活動がどのような効果をもたらしているのかについても調査する必要がある。（工学研究科）
- 大学は世界的なレベル（他国研究機構との共同研究など）の研究を目指すものであり、それによって得た知見を地域社会に広めているのが役割なのでは？やみくもに地域中心の配慮をしていると世の中の進展に追いつけないし、色々な人間的感情に基づく弊害が生じる。（工学研究科）
- 私は理系基礎専攻ですので地域社会との関わりは入試とか限られたものになるかと思います。研究者養成も含めて一流大学の教官の任務は教育にあると考えています。研究も大いにやるべきですが、それが大学教育（できれば低学年）に還元すべきだと思うのです。（自分の研究室に還元するだけでなく）それが確定されたあとに学会活動や地域社会との関わりを模索してはどうかと思っています。ですがこれは私の意見で社会学、技術開発の専攻の方々にはあてはまらないことと承知しております。キャンパス内で研究費いくらとってきただの、金の話は大きな声でしないでいただきたい。環境・資源・心の科学（宗教も含め）・ボランティア・

財政危機・金融不安・アジアの危機・情報公開…優れて今日的な課題に現在の日本の大学教育は殆ど無関心・無能力なのではないでしょうか。（情報科学研究科）

- 研究・教育を支援する人材の確保が何よりも重要。これが地域社会との交流の必要条件。（情報科学研究科）
- 地域に開かれた大学とすること。（図書館や研究施設等の面でも）社会人の受入のために地域との努力をはかること。大学で進められている研究を地域のみならず誰にでも公表し周知させること。（国際文化研究科）
- 設問の意味を良く理解することができない点があり、答えになっているか疑問が残ります。本人は地域に貢献したいと考え求めに応じてきました。地域の方々はどのように大学の教官を活用し得るのか知らないかもしれません。（農学研究科）
- 基礎科学の分野で仕事をしており地域社会との関係は殆ど考えたことがなく、はっきりした意見は持っておりません。（理学研究科）
- 東北インテリジェントコスモスの委員会に参加しているが行政側の対応が消極的で、何度会議を開いても大きな進展がないことを残念に思う。大学側には地域に貢献しようとする人材が多数いるにも関わらず行政側の硬直した組織のためにその人材が全く生かされてない。インテリジェントコスモスなども企業の方ばかりに目を向けるのではなく、市民が大学に何を期待しているかを充分に調査し、できることからすぐ始めることが大事。大学側としても市や県だけを頼りにするのではなく、市民との直接的な交流の機会をどのように組織的に作り上げていくべきか充分に研究する必要がある。学生の教育の面からも地域との交流は不可欠であり、その機会を積極的にアレンジしていくべきだと思う。（理学研究科）
- 国立大学の教育・研究環境（実験研究棟の老朽化、狭隘化、危険性）は現在世界最悪に近いと思います。この点についてむしろ早急な調査と改善のための施策が必要です。（理学研究科）
- 自分で一から考える暇がないので理念や具体的成功例についての情報が欲しい。（理学研究科）
- 国立大学は資金援助の受けにくい分野の研究を推進する義務があります。しかしそのことは同時にその研究成果を一般の、特に地域の人々にわかりやすく説明する義務を伴うと思います。これまでそのような交流がなかったのは①大学側にその意識がなかった、②市民の側にその意識がなかった、③接点に位置する機関がなかった、ことによると思います。（電気通信研究所）
- 大学も地域も広く高い視点からそのあり方を考えるべきと思っております。従いまして国際社会や全国規模の議論からあるべき姿を原則的には独立に考えていき、その目標に向かった接点での結びつきが実りある関係をもたらすと思っております。（電気通信研究所）
- 本調査は地域により大きく意味が異なると思われる。例えば首都圏、京阪神地区では大学数も多くまた企業の数も多い。従って特に地域と密接な関係を持たなくとも自然と地元への就職等も多くなると考えられる。また地元意識も薄い。一方地方大学では地域との密接性も高くなる。しかし雇用機会が乏しく地元就職は少ない。よってアンケートの結果を集計する上でもその点を考慮されたい。（所属部局不明）
- 地域が何を指すのか明瞭でないため答えにくい質問もありました。情報ネットワークの中で大学の在り方も大きく変化する可能性があります。（医学部）
- 国立大学の内部組織は硬直化したタテ割りとなっており、社会のニーズからかけ離れている。研究は個人的趣味と化し、学生の教育、卒後教育は二の次となっている。エージェンシー化も含めて設置形態の変更を考えるべきである。（医学部）
- 産学共同、地域・文化との交流など大学は積極的に地域社会に門戸を開くべきである。（医学部）
- 地域とは何かの定義はないのでお答えしづらい面がありました。全般的に大学の門戸はあらゆる人に開放すべきですが大学の成果は地域の特性に基づいて還元されるべきだし、地域の問題定義に基づいて研究となすべきものと考えます。（医学部）
- 大学の運営に対する（地域）行政の参加は自由な研究を妨げる。教育の機会は均等にすべきで、地域にかたよらせるべきではない。（医学部）
- 大学の運営は独自で行うべきだが地域の教育研究・保健、産学との関わりを自治体と共に構築していくべきと考えます。（歯学部）
- すべての議論は全国区で行うべきである。地域を特定の意味で分ける理由がわかりにくい設問が多かった。県や東北地方も全国区の中の一部であり特別地域を向いたことを考える必要はないと思う。あくまで県や地方も全国区で見て大学を対象に（ギブアンドテイクで）協力しあるようでなければ無理に体制を作っても失敗する。動機がないのだから、そこがしっかりしていればどんな体制でも（今のままでも）十分やれると思う。（工学研究科）
- 地域のスポーツ振興に協力している。個人的なものであるが時間的に余裕があって協力できるのは大学人のメリットである。企業人では自由がきかず大学人のようにはゆかない。（センター等）
- 大学での研究、教育が広い意味で人間社会の知的向上をもたらすこと、同時に実際面での、例えば経済的に直接的効果を上げることを常に目標とすべきである。その中で一つの具体化として地域との交流、例えば新たな産業の発生などに貢献すべきである。（金属材料研究所）
- 大学が地域社会に直接の影響を及ぼすことを「貢献」というポジティブな言葉で括ることは抵抗を覚える。タウンとガウンが反目し合うことが中世以来の伝統であったことは弊害ももたらしただろうが、大学の存在意義を維持するのに役立つことは否定できないと思う。現在の日本社会では一般に市民の文化水準・社会意識・政治意識などは相当に高まっており（従ってこの点で大学が市民の啓蒙に努める必要性はあまりない）一方地域社会のエスタブリッシュメント（地元企業や行政など）の文化水準の低さ、視野の狭さはひどいも

のだと思う。そして大学が行政や地元企業から期待されるものは短期的利益やせまい地域的利益につながるものが殆どで、大学がそれに応じなくて地域社会（実際には地元有力者）と緊張関係が生じるのはむしろ望ましいことで、地域への貢献の名の下に安易に応じるべきではないと思う。（法学部）

- 一般社会から見ると大学人は暇人であると見られがちですが、特に理系の教職員は忙しすぎると思います。従って余分な時間は１分もありませんので、地域と交流を行うための時間はとれそうにありません。やはり地域と交流を行う目的の大学が１県に１つあればよいと思っています。それは地方自治体立大学が担当すればよいと思います。（農学部）
- 大学は真理探求の場であり、その環境の中で学生を教育する場である。探求される真理とは人間にとって普遍的なものであり、その時々の社会とか地域に影響されるものではない。（理想として）しかしその一面で社会・地域への貢献も必要であり重要と考える。すなわち大学は現実には関係なく未来の人間社会の理想に向かって真理の探求を行う一方で、現実の社会そして地域にも対応しなくてはならない多様な機会を合わせて持っている。（農学部）
- 東北大学の場合学部によって、学部の学科によって、学科内の研究室によって、地域社会との関係の程度は異なっています。また地域との関係は大学が地元にあるという点で関係は深いのですが卒業生は全国に散在していますので、いろいろのつながりは地元とは限りません。東北大学の場合東北地方、全国、国際的な交流が要請されますので県単位であまり考えない傾向にあります。（農学部）
- 研究内容の発展の観点から積極的に推進したい。内容からして直接市民と接触する機会は少ない。（医学系研究科）
- 地域の定義をしっかりとしておかないと調査にならないのでははないか。私は本調査の地域概念に混乱があると感じているので回答も曖昧である他はなかったと感じている。（所属部局不明）
- 日本の国益・社会的発展を考えると先端的科学技術の研究開発とテクノロジー・トランスファーが極めて重要である。しかも地域社会における産業の育成は現在の日本において最も重要な課題で、地域に根づいた新産業の創出は、地域活性化ひいては日本の発展につながるものと思われる。（医学系研究科）
- 大学と一口にいわれても研究所は特別です。学生（大学院生も）は形式的には所属していない訳で例えば学生食堂を建てることはできません。やはり教育施設とは別に考える方がよいのかもしれません。（金属材料研究所）
- 地域社会の問題と将来は日本全体あるいは地球全体のそれと一貫して考えるべきである。交流を有効に使うには時間とお金の裏付けが必要である。近年交流が叫ばれているが一般的に研究者は時間に追われていて本当に必要な交流か否かの評価がなされていない。（金属材料研究所）
- 地域社会と大学との交流は大いに結構である。しかしそれだけが大学の主務ではない。いろいろな活動と研究があって良い。社会的ニーズに対して地域交流センターが各大学にできてきているが一律であってはいけない。日本の大学は文部省の方針に左右されすぎる。国立大学の設置形態についてもいろいろな形があって良い。テストケースとしていろいろやって見ればよい。ほとんどの大学が同じ方向に走るのは危険である。例えば教養部の廃止がほとんどの大学で行われていたが、その結果はどうなのかその評価を行うべきである。（反応科学研究所）
- 大学と地域社会との関係や交流は大学によりまた学部や研究の内容により事情は違ってくると思う。（加齢医学研究所）
- 「地域」を強調しすぎるとすべてがローカルなものとなり、普遍性を損なう危険がある。「社会」に対して「非大学人」に対してどれだけ開かれているかという観点から考える必要がある。大学とは何かという根本にたちかえって議論すべきである。はやりの「地域」というキーワードを持ち出せばよいというものではない。理念が重要。大学の理念（本務）とその還元は別の次元である。（加齢医学研究所）
- 東北大学では地域との交流は互いの置かれている状況のため隔絶しているのはやむを得ないが、ある部分では交流も可能なところがあると思うが、地方紙を自分の研究成果の宣伝に使っている人々がかえって大学の人間に反発を引き起こしている。また全国のジャーナリズムもあまり研究教官を正しく扱っていないように思う。底の薄い流行に便乗する研究が国境を失ってしまうことも困ったものである。研究行政家のなせるわざかも知れない。研究の成果の評価が流行っているが、なんとご都合主義であることか。これを文部省がまともにとって行政を行う悪弊も避けねばならない。（金属材料研究所）
- 国立大学は地域社会との関係を強くする必要はない。その地域に自分の研究と関連する企業があり、それと研究面資金の面で関係したとしても、それはその企業が偶然に大学の近くにあっただけの話。地域との関係を強く望むなら県立大学、市立大学と関係を作ればよい。その意味からは国立大学はあまりにも多すぎる。地域（東北、関東等）に１～２校あれば良く他の国立大学は県立大学に変えてもよいと思う。何が何でも一県に一つの国立大学というのは全く意味がない。（素材工学研究所）
- 地域一般に文化の企画能力がたいそう乏しいように思われる。市町村、教育界はそのための人材育成を考えるべきだろう。（センター等）
- 大学には研究と教育と技術の普及（理科系）を行う役目がある。この為には地域との関わりは重要であるが、学問の真理を探求するためにはグローバルな見方が重要である。研究の発展において地域から世界へまたがることが望ましく、基盤としての地域の重要性が大きい。東北大学には多くの優秀な研究者、教育者がおられるので一定の人に偏ることなく地域も大学も情報を

収集し、これらの知的財産を大いに活用すべきである。（センター等）

- 大学と地域との研究交流は重要なことと考えますが、その運用形態は個々の先生の考え方が主として反映されたものが望ましいように思います。できれば最終結果（報告）をお教え下さい。学部の重点化により大学附置研の立場が以前より不明確になっております。研究所が地域の企業と共同研究を進めるのも今後検討すべき課題なのかも知れません。（反応科学研究所）
- 地域社会と大学は文化的共有を積極的に計るべきである。現在大学ではユニバンティ・ミュージアム（総合学術博物館）の設置の計画がある。その場所として市の高校が立ち退くので、そこを代替地とするのがベストである。すると県の美術館・大学の博物館・市の博物館が近距離に建ち並び文化施設ゾーンが形作られる。市の計画もあるが大学の考えも視野に入れてもらえば地域住民の利益にも結びつくと考える。これは一例である。（文学部）
- 今後地域と密着する方向に進むのがいい大学と、より広域をカバーするあるいは全国区で活動するのがいい大学とがあるだろうから。地域への貢献は本学部として今後生き残るためにも必要なことで私自身も心がけているが、人材を送り出すといった成果には未だ至っていない。このような調査を継続して５年後１０年後どうなっているかを見ていただきたい。（文学部）
- 地域社会が大学に期待し利用することは当然あってしかるべきと考えるが、大学が社会のためにその内容を変えることは賛成できない。大学の研究・教育は大学独自の理念で実施されるべきである。特に理学研究は現在の地域の需要に適さないことが多く、しかし学問の進展の段階としては大切なものである。（理学部）
- 自分の働いている分野が基礎医学、かつ研究所勤務であるので、地域との交流というアンケート自体が、どうもピンときませんでした。ただ国立大学の設置形態については、もっと国立大・教員自身が議論を深めなければならないようには感じています。（加齢医学研究所）
- 大学の方ではなく地域社会の方に大いに問題が有ると思う。すでに業績の確立した大企業の工場や支店の誘置にのみ目を向けていて、大学での成果を利用して地域特有の企業に育てる意欲と努力が（制度の改善を含めて）欠如している。行政機関や産業界の上層部に技術の価値を判断できる理系の人材が居ないこと、失敗を恐れるために新しいことを育てるより、大企業誘致に走るのであろう。（農学部）
- 永続的な右上りの発展と輝かしい未来が幻想、ひょっとすると罪悪かもしれないということを考えると、地域振興だの地域の発展だのと気楽に語る気がしないというのが本心である。もちろんそのあり方を熟考中であるので、ある意味タイムリーなアンケートであった。大学の地域社会への開放は重大な課題であるが、一方で東北大学は宮城県のものでもないし、東北６県のものでもない。あえて言えば国民全体のものである。大学の閉鎖性ばかりがとりあげられるが、ここ宮城県内で本学の卒業生を雇用し、そこで働くことに生きがいを与えられる場所は多くない。中央官庁や大企業がそれを与えるわけではけっしてないが、地域企業の努力なしにはこの問題は解決しない。地域の発信するニーズから学問をつくり出すのが大学の役割だと思う。大学のもつ研究成果を「ばくる」だけの地域社会ならつきあう必要はない。（工学研究科）
- 大学と地域社会との交流については、専門分野によってその度合いに違いがあると思います。このような交流の意義や有用性を否定はしませんが、実際には日々対している学生の教育と自分の研究だけでも精一杯のところがあり、時間やわずかの余力があっても、少数の社会人に何か話をすることよりは自分の学生の教育に力を注ぐべきであると考えております。（センター等）
- 大学の先生は、ほとんどが地域社会との交流あるいは自治体の施策に関心を持ち、また協力したいと考えている。しかし率直に云って“声がかからない”現状にある。（センター等）
- 日本は米国のような合衆国ではないから、あらゆる点で中央集権的な社会になっている。地方分権、地方の文化的経済的独自性が社会基盤として成立していない現在にあって、国立大学が地域社会と交流するには自ずから（期待するところ、効果等々）限界がある。例えば地域の子弟を優先入学させるなどということは社会的な公平さに欠けるし、就職先として地域社会にこだわるのも同様に発展性のある考えとはいえない。地域社会（行政、企業とも）が米国の州の如き独自の文化を築くことに目覚めるのならば、大学は大いに協力（協同活動）をすることができよう。教育研究費の導入、子弟の優先受入れ、地域社会への人材育成（社会人教育も含めて）、大学運営への地域社会人の参画等々が論議の対象にに登るのは、それからのことである。地域の独自性がないということは、地域社会が存在してないことに外ならない。単に「全国の一部」にすぎないのが現状であろう。（農学研究科）
- 旧帝国大学系と旧新制大学系で、地域との関係が異なっていると自身の経験から感じられる。アンケートの結果の整理もこの点を配慮されると明確な差が出るのではと感じられる。（理学研究科）
- 「地域」という言葉の外延が明確ではないような気がしました。特に情報化の速度がすさまじい時代に生きておりますと、一方で狭い地域が研究や教育の面で意味を失ってしまうことになりかねず、地方大学に関わっている者にとっては、本調査で念頭においておられるらしい地域よりはもっと狭かったり、もっと特殊化したような生活圏のようなものが実質的な意味を持ってくるようになるとも思われます。（情報科学研究科）
- 地域社会が大学に対して望むものを明確にしたうえで、関係や交流を持った方がよい。東北地方のように研究機能を持たない企業の製造工場が多い地域では、基礎研究に対する地域社会のニーズはほとんどない。他の地域との較差はほとんどゼロと無限大程異なる。地域社会の側に学ぶ姿勢がなければ、いくら大学から関係

や交流を提案しても実りは少ないと思われる。地域社会の積極性は県の単位で異なっていると考えられる。県の姿勢は知事と県当局の方針によって県毎に大いに異なる。安易に迎合して大学の独自色を薄める必要はない。（理学研究科）

- 現在、地方自治体が行政上の問題を解決するために委員会等に地元大学の教授を入れることがあるが、自治体側からの具体的な提案とかの働きかけが見えない場合が多い。自治体にこのような形ではなく、具体的に行政上の問題を clear にするための research を大学に委託すべきである。現在の地方自治体はこの能力に欠ける。今後は自治体の行政官と大学の研究者の人事交流を活発にすることが必要と思われる。（医学部）
- 問１３でも書いたようにすべての大学は地域とどうあるべきかと云った単一の考え方ではなく、学問・研究分野や大学によって、様々の対応の仕方があって良いと思う。（金属材料研究所）
- 地域社会との交流もある程度は必要だが、国立大学の研究のレベルは世界を意識して進める必要がある。（農学部）
- 地域側からの医学への approach、つまり後援会等はここ２～３年増加してきていると思うが、大学側に大学としての vision も窓口もなく、また閉鎖的であり、改善が必要であると思う。（医学部）
- 地域社会との交流は大切だが、大都市では「地域社会」、「地元」を実感しにくいのではないか。（所属部局不明）
- 大学は知的財産の生産の場であり、その社会還元を積極的に推進することで、社会の付託に応えるという認識が希薄。研究論文の発表がその具体的行動という人も居るがそれでは不十分。次代の人材養成と次代の富と福祉の源泉という視点の確立が重要と考える。（所属部局不明）
- 私の国立大学の将来像は例えば東北地方（宮城県仙台市には必ずしも帰属しない）の特色を生かした地域性の高いものにすべきだとは考えていますが、その時必らず地域の利益の為にという狭い領域での利害関係に止まる必要はないと思っております。それよりも国立大学であっても「大学」の存在が表に出るように、もっと勝手なことを云わせて頂ければ「大学」が地方を動かす積極性と「大学」のもつ国際性を地域の文化の発信機関の要因と見なす位の大きな変革がなければ、日本の大学の存在は無くなるのではないかと心配しております。（理学研究科）
- 旧帝大と地方大学との関係、及びこれからのこの二種の大学の地方社会への役割などを、もっと明確に尋ねるような質問を設けてみた方が良い。（工学研究科）
- 地域社会と大学という場合、その接点がなかなかみつからない。時間的な面でも難しいところがある。インターネットのホームページのようなものを活用できるようになると、その点で継がりが作れるようになるとも期待できそうにも思います。（短期大学部）

山形大学

- 地域交流自体はよいことだと思います。ただこれが国立大学の予算削減・地域の肩替わり（県立大学化・私立大学化）へ進むことにならないかと懸念します。（医学部）
- 特に国際交流について地域社会との連携が必要である。（教育学部）
- 組織として関係や交流を持つ場合、多少とも運営上の任務が発生し、時間的な拘束を受けることになります。個別的、個人的レベルの協力関係を深め、大学の組織としてはそれらの報告を集めること、地域に対して供給可能な情報を提供する程度で我慢すべきだと思います。（医学部）
- 大学、特に一県一医大構想のもとに生み出された本学のような地方大学の医学部は、学部・講座とは名ばかりの、地域医療のための“人足寄場”的な教室が存在する。また中央社会では崩壊しつつある“白い巨塔”的な、地元病院と医学部の関係が今なお色濃く存在する。大学病院での医療を放り出し、地域への貢献との名目で、愚にもつかない「アルバイト」に精を出す若手医局員も多い（しかもそれが公務員法違反であることも知らない人が多い）。地域社会への貢献、交流ということを論じるとき、特に地方医大においては大学本来の役割を明確にしなければ、大義名分の美名の前に、すべての議論は空転する可能性があることをよく考慮すべきです。（医学部）
- 地域社会と大学との交流は大いにすべきことと考えます。このようなグループできたこともタイムリーなことと思います。研究会の結果、期待しております。（医学部）
- 本学に赴任しもっとも応えたのは、リサーチタイムの絶対量の低下だった。理由は教養部廃止に伴う教育の負担（数学・英語など）、地域のパラメディカルの教育、さらに私の場合は解剖に携わっているため遺体引き取り業務があり、しょっちゅう拘束され、かつ１ヶ月に１週間は実習の当番としての役もあり、その週は連続して行う研究は控えざるを得ない。元々解剖学教育は他の教科に比べて費やす時間が多いことと相乗され、リサーチタイムの少なさに非常に悩んだ。いくつかのストラグルを終えたあとリサーチタイムを確保できるようになったが、今の状態で地域との交流をどの程度行うことができるかと自問した場合、時間的に非常に難しいといわざるを得ない。地方大学は否応なく地域との交流をもたされるのであり、逆にその負担を除くのが必要なのではないかと思う。２．大学は個性的であってよい。押しなべて１つの方針に沿って改革を行う必要はない。カオス的な状態にしておき裾野を拡げておくことにより、いろいろなものに対応できるのではないだろうか。（医学部）
- 地域社会との交流について。交流が自己目的化しないように気をつける必要があると思います。そのためには個人の活動を主体として、それをサポートするシステムを組織として応援する体制を作るということが大

切で、先に組織的枠組みを作ると形だけの交流になってしまうように思います。（人文学部）

- 旧制高校と旧師範学校などを統合して作った地方国立大学には、旧帝大（といっても東大・京大・東北大・阪大くらいまで）がもつような設置理念が明確でない。地元では旧制学校の延長として受け止められていて、意志の疎通がはかりにくい。旧制出身教官が退官された今が新制大学としての存在意義を再確立すべき時であろうが、多くの教官は自分の出身の旧帝大をモデルにしているので足並みがそろわない。その結果、地域社会との交流も前進しない。・国立大学の設置形態が議論されているが、旧帝大を完全に大学院大学化してしまえば（学部を廃止する）、新制大学は立地条件を生かして個性的な教育を行い地域に役立つ人材を供給すると共に、旧帝大大学院へ研究者予備軍を供給することができるようになると思っている。有馬氏が行ったような、東大の特権化のみを隠れた目的とした改革論議は、地方国立大学にとっては百害あって一利なしである。この調査がそういう目的に使われないことを望みたい。（理学部）
- 教育学部は“学校教育”のある限り、地域社会との交流は強い。小中学校の教員を輩出してきた歴史は、地域社会における“教員文化”の形成にも大きなインパクトを与えている。それは教員の人的ネットワークが、大学を基盤として成立しているからである。しかし、このような強固なネットワークは同質性の高い集団となり、他に対して排他的になる傾向を持つ。そのため閉鎖的な教員文化が再生産される。つまり教育界の中だけで交流しても、特権層の秩序維持にしかならない。もっと広くて多様な交流がフレキシブルに存在する方がよい。本学はタコ足キャンパスのためか教員、学生が学部を超えて交流する機会が少ないと感じる。学部単位で地域社会との交流はあるかもしれないが、大学として現状を把握することは着任２年目の私には難しい。（教育学部）
- 地域社会・大学とも互いにどんな仕事、研究・教育をやっているのか、具体的な情報の交換ができる体制作りが必要である。・事務（官）が国立大学では閉鎖的で旧態的である。地方公務員との交流や他省部局との交流をして、もっと開かれた、かつ効率的な運営が必要である。（教育学部）
- まず研究会、談話会等の積み重ねを行う必要あり。その中から種々の協同、協力が生まれ、研究上の結びつきや交流が深まると考える。（理学部）
- 地域社会と大学との交流をさらに促進させるには、大学で何が行われ、あるいは地域社会が求めるものがあるのかどうかを広く知ってもらう必要があると思う。地域社会に向けて広く情報を発信する努力がより一層要求されていると感じている。（理学部）
- 国立大学教員の意識の現状把握の重要性はある。ただ、大学への地域社会への寄与のために、国立大学が抱えている現状に関わって、戦後の制度理念と実態及び（大学が直面している環境条件の大きな変化をもとに）現時点で生かされるべき理念の検討がより重要であると考える。２．国立大学の設置形態については現状では維持されるべきである。そのあり方については、まず学問の自由と大学の自治、及び教育研究条件（あまりに教員は多忙である）の発展をはかることを第一義的に検討することから始めるべきであり、それをそこなうことは絶対にあってはならない。国立大学教員や国立大学の“既得権”の維持というような考え方ではなく、戦後の理念が大学が地域社会と国民に開かれるために、いかに生かされるべきかという観点が重要。（人文学部）
- 御苦労様です。“関係”や“交流”には制度的なものと人間的なもの、この二つの側面があり、特に後者いかんで活発にもなるし、そうでなくなる場合もあります。教官個々の意識、心情がまず大切ではないでしょうか。（教育学部）
- 地域社会との交流は大学の重要な役割の一つと考えています。私の所属する山形大学工学部・物質工学科では、高分子工学を専門とする教官有志により１０数年前からそのような主旨で、東北大学の工業技術センター、そして企業（企業に関しては東北地方との限定はない）によるいわゆる産学官の交流組織である“べにばなコンファレンス”を毎年開催している。その成果は地方の技術センターそして企業の技術、学術レベルの向上に大きく貢献していると自負している。このような経験から、大学と地域社会との交流に、現在の大学組織において大きな阻害要因はないと認識しています。しいてあげれば、大学での研究成果をどのようにわかりやすく、地方組織そして民間に伝えることが出来るかは工夫の余地があると感じております。（工学部）
- 関係や交流を活発にする必要性はあるが、現状ではそれぞれの立場を尊重しているようには見えない。立場を尊重することによって、より活用することが可能となるのではないかと思う。この調査は大学全体をとらえて考えなければならないようになっているが、在職年数が少ない上、分散キャンパスによる学部のおかれた地域の環境が異なる本学部に在職していると、学部のことしかわからない。よって的外れな回答となっているような気がする。（農学部）
- 山形大学の場合、キャンパスが三地域に４つあり全体像が見えづらい。従って大学全体という問には申し訳のないことですが、答えづらかった。（教育学部）
- 大学人は社会の中で「哲学教育」を分担していることを意識すべきである。・大学で得た教育・研究成果は地域に還元すべきである。・地域社会の要望に応じることも地方大学の一つの使命であると考える。・そうは思うが暇がない。人員不足。文部省は人を増やすべきである。大学院の教育・地域社会の教育を従来通りの人員で充実させようとしても無理。これが現実です。（理学部）
- 画一的な地方と大学との関係や交流はない。質も量も地方によって異なるはずで、各県と各大学で独自に動ける方がよいと思う。大学で落ち着いて研究を続けるためには、現行の公務員の制度はとてもよい。民営化

や期限付きの公務員ではデータがすぐ出る分野（またはインパクトファクターの高い論文に関係する分野）のみに人が集まり、研究もコマ切れ的になる恐れあり。また地道だが重要な研究は、民営化や期限付きのポジションでは出来なくなる。最先端の研究は米国や日本の一部の大きな研究所で行い、地道で長い年月継続すべきプロジェクトは地方の大学で行うべきである。また地域に密着した交流、主として地方へ人材を送る意味でも地方の国立大学は重要と思われる。従って地方の小さなサイズの国立大学（旧帝大でない二期校など）の存続及び公務員の現行制度の維持を切望する。（所属部局不明）

- 地域社会との交流、大変大事と思っています。ただ、教育現場の人が大学をあまりにも活用しなさすぎると思います。それは「礼金」が潤沢に用意されていないこともありましょうし、大学に対して警戒感もあるように思います。（教育学部）
- 大学の責務に関する主題を投げかけられたとして思考しますと、１．教育、ａ．問題の課題に関わる調査分析、ｂ．問題を提起、ｃ．解決方法を提示して実施、ｄ．説得力のあるまとめと行動、のできる人を養成することで、単に知識量を望まない。２．研究活動、地域との交流があればそれはその結果である。（工学部）
- 地域社会との交流は専門分野によると思う。理学部数理科学科は、地域の高等学校教員の養成という点で大きく貢献しており、これからもそうあるべきであろう（本県の高等学校数学教員の半数は本学科出身）。若者の理数系離れ（広く考えると離れ）が社会問題になっている今日、大学が地域に直接貢献することは必要ないとは言わないが、まず学生の教育がもっとも期待されることである。学生を大切に教育できなくて何が大学か。（理学部）
- アンケートの設問に疑問を感じる。１．地域の概念が不明。２．行政と教育。３．国立大学設置形態よりは日本の国大の現状が問題。大学と行政と関係は、財政的にはサポートアンドノーコントロールが世界的な原則。（農学部）
- 地域との交流が出来るほどの研究費が、その使途の制限（例えば旅費や学生アルバイトは不可）も含め自由に使えるようになることを期待したい。・大学に地域との交流を担当する係を置き、大学側からのＰＲや依頼の仲介をすることが望まれる。（教育学部）
- 一般的に大学の先生は勉強不足。元々教官の能力に欠ける人が多い。特に文系はひどい。逆に能力のある優秀な人は気の毒。（教育学部）
- 大学教官が研究業績のみで評価されないようにすることが大切であると考える。（教育学部）
- 本調査が種々の改革に生かされることを望みます。（教育学部）
- 大学人に負荷される役務が急増し、教官が余裕を失っている。このため出来ない学生に対する指導が冷淡となり単なる選別、切り捨ての教育になってきている。このため大学に教育・研究の楽しさがなくなり、大学にもいじめの問題が起きるのは目前と思われる。地域や国際貢献など見栄えのよいことばかりにかまけていると、肝心の大学の教育が荒廃の一途をたどることになる。設置形態とか制度をいじるのではなく、大学人に心を取り戻す方策を考えるべきである。（所属部局不明）
- このような調査がされることは、これからの以上の問題への取り組みの初期段階として有用なものと思います。（医学部）
- 医学部の場合、医師の派遣、無医地域（村）等の問題で、臨床分野においては重要な点も多いと思う。基礎研究に従事している場合は、どの程度必要かはケースバイケースによると思う。（医学部）
- 本調査は有意義なものと考えますが、設問の作り方が回答者によっては意味の不明、もしくは理解困難なものがあるような気がします。従って国税の確定申告書のように回答例をいくつか専門分野ごとに添付した方がよかったと思うのですが、幼稚な意見でしょうか。例えば問７はその１例です。また問１５の「設置形態」とは何かよくわかりません。いわゆる民営化なども入るのでしょうか。（医学部）
- 地域のニーズを吸い上げ、大学でできる分野・内容等を積極的に交流させることを業務とするような窓口を大学側に設置することが望まれる。（教育学部）
- 問１５について、日本の国立大学は経営という観点から縁のない世界にいる。これはプラスとマイナスの両面につながることは言うまでもないが、これを否定すると角を矯めて牛を殺してしまうことは明らかではないか。但し、一部の国立大学（東大・京大）ならやっていけるかもしれない。・地域の社会にはそれなりの権力があって、その人々がさまざまに介入するようになると、現在の文部省の細々とした指示よりも悪しき現象が起こる危険を感ずる。（教育学部）
- 交流は十分行われている。すなわち教育・研究の時間を、逆にこれを取られそうであります。ですからこのようなアンケートそのものが、あまり意味のあるようには思われません。大学もいろいろな部門があるわけですが、私個人としては企業との対応が多すぎるとの感覚も持っています。地域との交流は、十分すぎるくらいあると思っています。とても大学だけの内にあっては生きていけません。（工学部）
- 地域との研究交流は、ともすれば学界に通用しないレベルの低いものに流される恐れがある。特に工学部にその傾向が強い。大学教官はまず国際的に通用する研究能力を身につけるべきで、地域社会との交流はそのあとのことである。（工学部）
- 本学部は積極的に地域との交流（企業との共同研究、依頼、試験、さらに地域の学生への教育、実験体験）を行っていると考える。ただ本学部の規模に対して市（地域）の人口が少なく、人数が毎年不足しがちで、定員を集めるのに教員が苦労している状況。よって教職員は地域との交流に対してはかなり積極的といえるが、むしろ地域環境がそれほど充実していない。大学に関心のある人口数が絶対的に足りないと感じているのですが、毎年地域サービスを続けてきての感想です。

これはおそらく数少ない進学校（組も含めて）は全国有名大学を目指しており、地方大学には関心がないということも影響していることと思われる。（工学部）

- 現在の日本は、国と地方の財政赤字を合わせると５００兆円にもなり、それが国民一人当たり４００万円ともいわれております。この財政赤字が、現在も時々刻々進行しております。「国立大学の維持」と「国家公務員の身分保障」なども含めて、国の財政を再建するためにはどうすればよいかの解答を出すべきであると思う。国の財政を再建するためには国立大学を解体せざるを得ないならば、その後どうするか。第三セクター方式、あるいは私立大学として再生して残れば、そのような形態での地域社会との交流という問題になる。（工学部）
- 地域の特性に関連した研究課題はごく限られている。・大学教官を地域の行政、企業は［研究費］を出した上で大いに活用すべきである。・特定の（お偉い教官）のみに頼らず、事業毎に案を公募するとよいと思う。（工学部）
- 文部省のそのときの都合に振り回されない真の自立を各大学が出来るよう、資金面の自立が必要と思われます。ドイツの大学のように、地域が自立して初めて大学と地域との交流が進められるように感じています。（工学部）
- お互いを知ることが大切。・各々の本来の存在意志を活かす環境づくりに互いが協力すれば、自ずと良好な関係が形成されるはず。特別に構えることも意気込む必要もない。・地域を尊重するのは地域との交流を第一にすることではなく最新の、あるいは他にある知識・情報をその他の地域にもたらし、これを媒介に地域に新しい風を吹き込むことに大学の役割があろう。（工学部）
- 現在、大学の役割は多岐にわたっている（教育、研究、地域を含めた外部との交流）。学生の質、意欲も変わっている。これらの役割を分担すべき（評価も含め）時期に来ている。（工学部）
- 地域社会との関係が強すぎる場合は、キャンパス移転や大学改革等が不可能となる。山形大学にはキャンパス統合問題があるので、米沢地区とのつきあいを出来るだけ避けるようにしている。（工学部）
- 工学部がある米沢には工業団地があるが、主に産業拠点としての工場が集まっているので、設計や研究開発部門への就職を希望する学生には、あまり魅力がないといえる。東北６県からの学生が４割５分ほどで地元志向が強い最近の学生が、米沢周辺に落ち着くことはあまり期待できない。地域住民子弟の入学のための優先枠は、大学と地域とのつながりを強めるのには意味のある制度といえる。（工学部）
- 工学教員の立場から地域企業に対して研究会、講習会、産学官交流の機会を積極的に主催してきましたが、最初を除けばメンバーや聴衆が固定され、ついには予定の人数が集まらなくなる。地域に大学から開くことは、是非開いてほしいという維持的な要望（熱望）がないと実際は難しく、開かるべきというような原則論では中途半端になる。大学はやはり、教育と研究を通じて地域社会に還元していくべきであり、学識経験を必要とする場には余裕があるとき、個人的なボランティアとして参加するのが大学の本当の姿であると、最近では考えている。（工学部）
- 大学側にどのような専門知識を持った人材がいるのか、といった情報をもっと社会に向けて公開すべきであるし、社会の側も大学へニーズを伝えるべきである。そのような仕組みや場を設けることが、両者の交流促進には不可欠であると思う。（人文学部）
- 大変回答しやすいアンケートだと思いました。現在まで地域社会との関係はほとんどありませんでしたが、機会があればどんな形であっても、できる事ならしたいと考えています。専門が特殊なので、あまり役に立たない立場にいる人間ではありますが。（人文学部）
- 地域社会との交流やサービスと普遍的な学問発展とを二項対立させて解答させる調査方法は、個人の研究分野による違いもあり些か回答しにくい点があった。（人文学部）
- 特に力学と地域との関係について、単なる印象だけで回答することが妥当か悩みました。（人文学部）
- 出来るだけ協力したいのですが、私は本学に来てまだ一年もたっていません。アンケートの回答についてもその点を考慮して下さい。（人文学部）
- 最近やっと大学側、自治体側、企業側が歩み寄り、話し合いや共同研究を行う風潮がでてきていて、良いと思っています。新しい視野に立って研究を推進する事も時によっては可能であり、地域交流は学問の活性化につながる面も持っていると思います。（農学部）
- 地域において公開講座等をもっと積極的に行うべきだと思うが、現状では資金不足でこれが出来ない。現在は市民からお金を取って行っているが、無料にすべきだと思う。（理学部）
- 多数の国立大学を抱える我が国の現状では、役割分担をすべきである。例えば、研究中心型、学生教育中心型（中小学校教員養成型、高校教員養成型、社会人養成型）、スポーツ教育中心型（全国大会・国際大会で活躍できる人材を育てるべき）。良き教育者＝良き研究者が成り立たないことは明白。それぞれの役割に応じて大学教官の能力は発揮すべきである。（理学部）
- 各大学の研究・教育における特徴、独自性を地域社会でも大いにアピールすること。そのために教官は常に社会貢献、将来的発展性を見据えた研究テーマに取り組み、また研究を進めるために必要な基礎教育を行うべきだと思います。（理学部）
- 大学としての今迄の閉鎖的な慣習を改め、大学内で蓄積された知識、技術等の公開や教育内容に関する自己評価を含めた公開など、大学として地域社会に広く公開する努力が必要と思われる。（理学部）
- 国立大学である以上は、地域の事情を最優先させるわけにはいかない。しかし地域との交流は互いのためにもなるので、交流は活性化した方がよい。（工学部）
- 地域社会からの要請を待っているのではなく積極的に門戸を開いているが、なかなか乗ってくれない面があ

る。やはり交流の場を多く設けて、お互いに話し合うチャンスを作り、根気よく継続していくことだと思う。（工学部）

- かつて山形県中小企業団体中央会の依頼により、「タイヤゴムのリサイクル」をテーマとして研究したことがありますが、一時的な事業であり研究期間終了と共に交流も失われてしまいました。継続的に行えば成果も上がると思いますが、期限付きの交流では実りも少ないと思います。（工学研究科）
- 「公開講座を行うことが地域社会に貢献することだ」といった考え方があるが、これは正しくないと思う。大学が社会に貢献する道は「学生を十分に教育すること」にあると思う。（理学部）
- 地域社会と大学との関係は人的交流が最も重要であり、そのような機会を積極的に作ることが行政、大学両方から必要である。しかしながら、実際の交流を促進するための会議やシンポジウムは、中味が伴っていないことが多い。うわべだけの交流会が多すぎて、参加する気力が失われる。・地元企業からの大学へのアプローチが少ないのは、企業のトップの考え方を変える必要がある。そのためには大学の中に専門的な窓口（研究者と事務官）を作る必要がある。（その専門職員は研究・教育を免除する）（工学部）
- 大学と地域社会との関係のあり方を論議すること、大賛成。２．しかし、この調査の設問は大きいし、抽象的で判断不能のものが大きい。例えば問１～問５は学長、或いは学部長経験者でないと意味がないのではないか。小生は講座・学部に限定して（書き込み）判断した。特に大学が４ヶ所に分散しているので、全体の条件は把握できない。（農学部）
- 一般的に「地域社会」というのではなく、地域の歴史的特質に基づく社会基盤がかなり異なるので、大学が果たす役割も大きく異なるのが当然である。その観点でアンケートを作ったほうがよいのではないか。地方大学と都会の大学ではその役割が異なるのではなく存在の目的が異なるので、役割を問われると答えにくいものがある。（工学部）
- 地域のニーズと大学のシーズが必ずしもかみ合わず、そのことが産学交流の障害になっていることもあると思います。また教官の業績評価が学術論文に偏っていることが、地域に対するサービス評価を低くしている主原因であると思います。（センター等）
- 県庁の学事課に、４年制大学の対応窓口が全くないことに驚いている。・大学院の多様化が教育・研究制度の上で進んでいる。学部レベルでは、地域発展型と全国・国際発展型に分化させていくのも一案と考えている。・平成３年度の大学設置基準の大綱化以来、大学での事務レベルの業務負担が急増し、地域社会へ向けての指向を妨げるほど多忙である。また近年の定員削減で、教官（若手：具体的には助手層）の年齢構成がアンバランスになると同時に、ベテラン教官の肉体的負荷も増え、余分な活動を控えなければならなくなった。地方大学にこの傾向は強い。・教官及び事務官の定員削減がこのまま続けば、大学としての機能は壊滅するであろう。（理学部）
- 特定の分野、つながりからだけではなく、大学全体として地域社会へ種々の研究や情報を幅広く提供する姿勢が必要と思う。（工学部）
- 大企業ではそうでもないが、地方の企業では大学の先生に期待していることが大きすぎるようです。何でも相談すれば、すぐに答えがでるように思っている方もいます。全体的に見て地方の企業の方は、大学の先生方や大学にあるシステムを利用する方法を知らないことが多いと感じています。（工学部）
- 大変有意義な企画で、心から賛意を表するものです。このような大学の果たすべき役割の制度的な側面についてと同時に、大学の中味（教官、事務官、学生の質の問題）についての検討の企画を行っていただけないでしょうか。同封の資料は外国で生活されておられた方の、“日本の大学”に対するとても貴重な意見の一つです。今回のアンケートにあったような制度面での改革と共に、そこに指摘されているような学生の質を高める工夫を、全国民が真剣に考えなければならない時期に来ているのではないでしょうか。（工学部）
- 地方大学だからこそ地域社会と密接に結びつく必要があるが、大学の内も外（地域社会）もお互いの必要性を感じていないようだし、お互いが活かしきれていない。もったいない。（教育学部）
- 問１３について、このように単純な割り切りは本来出来ないし、するべきでもないと思いました。大学はローカルな面でもグローバルな面でも両者に責任を負うべき場だと思うし、例えばどちらかを切り捨てるようなことがあれば、いずれどこかでゆがみが現れると思います。自分としてはＢにも○をつけたいが、まずは足元を固めるのが順序であるという意味でＡを優先したにすぎません。（農学部）
- 山形大工学部の場合、キャンパス分散が地域交流の障害となっている。統一キャンパスが望まれる。（工学部）
- 我々は、地域外、広くいえば世界の中で独自の研究・教育活動をしており、その結果、地域に新産業を起こすことを目指しています。幸い本県は特に技術的なポテンシャルがあり、我々の刺激により新分野に進出する企業もでてきています（県外も含む）。そのためネットワークも、官の支援により完備しつつあります。但し、この意味で大学の設置形態は国立であることが重要です。地域の枠内での教育・研究では将来的なビジョン、視野が狭くなります。例えば現状において、全国あるいは世界にある企業と公平に共同研究を進められるのは、地域の特殊性との整合を問われない国立大学であるためであり、逆に県、市などの地域中心とした第３セクター方式ですと、地域との整合性あるいは需要との関連で枠がはめられ、公平かつ自由な研究活動（環境）を損なうことになります。つまり、大学発展と共に地域の発展があるものであって、その逆ではこの地域に先端的な研究教育活動をする大学は必要でないと思います。（特定分野の技術的なトレーニングでは県の工業技術短大で充分である。現実には技術

短大教官あるいは地方公設試験所、工技院研究所の教育研究指導は山形大工学部で支援している。）大事なことは、戦後各県に一国立大学を設置し、地域振興を目指した原点を忘れないようにすることです。満足はしていませんが、本学（工学部の一部教官）が地域振興のために努力しているのは、間違いのないことです。（工学のように広い分野で特定の大学群（旧帝大）がすべてカバーできるというのは妄想にすぎません。）（工学部）

- 委員会等の公務におわれて、地域社会にサービスする時間の余裕がない。地域へのサービスが業績として評価されない。教官は業績のための研究ではなく、社会や地域社会に広く貢献するための研究や教育について関心をもつべきである。施設、設備が古く狭い。特に地域交流のための施設の充実が望まれる。（教育学部）
- 地域社会の窓口が国立大学との交流を積極的に進める場合に、人的ネットワークが閉鎖的な上、研究援助を農業の補助金と同じように考え、国から県に支給される地域おこしの資金も政治的政策の面が強く、真の地域産業や新しい産業の芽を育成するには、少なくてもあと５年～１０年はかかる。国の中央機関の人たちの方が大学に対する危機感を持っているが、地方はその地方の政治家の動きと連動していて、意識も低いと判断される。（工学部）
- 現今の学生の質（入試時の学力等とは別の品格・教養）の低下は、目に余るものがある。文学系の学生ですら、古今の文豪の著作に触れようともしない者が多い。もっとも教師自らが専門家に甘んじ、読書せぬ風潮がある。野にあって自分を磨き、社会貢献のための学問をふたたび身につけようとする、心ある社会人にもっと大学の門戸を開き、いろいろな部分で大学に新風を送っていただきたいと思う。このような調査を土台に、日本の大学が新しい典型（ギルドでも国立でもない）を世界に呈示できる日を待望する。そのとき、あるいはそれに至る過程での協力・参加は、惜しまないつもりである。（人文学部）
- 大学の情報を積極的に地域へ発信すべきだ。国立大学（特に地方大学）は従来の評価に安住し、営業努力が不足している。そもそもサービスの考え方がないのかもしれない。大学も官僚機構の一部だからかもしれない。山形の産業は下請けの企業が多く、自力で開発を行えないところが多い。このような企業は人的資源も乏しい。大学で考える共同研究とのマッチングがよくない。技術開発を指向する企業とは交流が行われている。＜まとめ＞・大学はもっと営業努力をすべし、宣伝も。・地元は下請けを脱し、技術開発型企業を試行すべし。・大学の事務組織も柔軟な対応が必要である。（工学部）
- 大学はもっと地域社会に対して開かれるべきである。しかし、行政や企業の要請に対しては学問の自由、大学の自治を堅持しなければならない。（人文学部）

新潟大学

- ブロック・県レベルを含めての所属大学が立地する地域に関する研究をしやすい分野と全くといってよい程不可能な分野があるので、被調査者の専門をも考慮した調査も考えるべきではないか。（教育人間科学部）
- 学部、研究分野によってもかなり地域社会との関係や交流の質、量が違うと思います。それを一律には評価したり論じられないような気がします。（医学部）
- 医学にあっては地域社会との連携は不可欠である。疾患を扱う臨床にあっては当然であるが、多大な研究費を必要とする医学研究の資金を集めるためにも交流は絶対的に重要である。しかしながら国家公務員としての制約が多く、それらの活動が制約されているのが現状である。また多忙であるのに給与は極めて低く、優秀な人材の確保が難しい。縦割り行政の弊害がきわめて大である。（医学部）
- 「産学協同」といえば私たちが大学生の時代はまさに打倒すべき存在であったものが、今では国公私立大学を含めて実践している。そのことの是非はさておくが、やはり慎重な態度も時によっては必要であろう。地方国立大学の卒業生の多くは地元に就職し地元の社会に貢献しているという事実がある。特に医・歯・教育学部に顕著に現れている。このような中で国立大学として果たす役割はなんであろうか。私はあまりよくわからない。私の職場に即していえば留学生教育と地元という点で考えれば、地元の企業に留学生があまり進出していない。留学生の多くは大都市なり本国に帰国ということになる。国際交流という点から考えれば問題はないのだが、留学生が学ぶ場所というのは、やはり重要な点だと思います。駄文で申し訳ございません。（センター等）
- 大学・学部・講座のレベルで評価が違ってくる。大学とはの問について講座間での差が大きく、どう答えて良いかと惑うところが多かった。（歯学部）
- 各学部によって地域社会との関わりや交流は異なってくると思います。（医学部）
- 地域社会との交流といっても、やりやすい分野とそうでない分野があり、交流の重視ばかりを言うと大学の専門性が損なわれてしまう。東京ならばどんなに変わったテーマでも多少の関心を示してくれる人たちが必ずいるが、地方都市ではそうはいかない。大学での授業でも先端的テーマを取り上げても学生が全く興味を示さなかったり、そもそもゼミに来なかったりする。日常的にテレビや通俗雑誌などにしか接していないので、その範囲でしか大学の「学問」にもアプローチできない。地方都市の知的雰囲気は東京とは全く違うレベルであるから、あまり「交流」を過大評価するのはよくないと思う。（人文学部）
- 地域に根ざした研究テーマは率先して遂行するだけの価値は十分にあると思う。月並みだがこのような優れた研究は“地方から世界へ”という点で正に本格的な意味を持っている。大学は研究、教育、そしてここでいう地域交流とその役割は大きいが、いかんせんスタッフの数は欧米に比べ、はるかに少なく私の属する医学系においてはそれを痛感せざるを得ない。（脳研究

所)

- 地方の国立大学の存在意義は地域の特色を生かした教育・研究であると思う。そしてそれらが国際的にも通用するレベルに高められることも重要である。地域に閉じこもるのではなく地域で得られた成果は、日本国内はもとより世界に向けて発信されるシステムを整備する必要がある。地域性と国際性の両方を意識して教育・研究に取り組むことが大切だと思います。(センター等)
- 大学全体に対しての一般的感想は学部毎に異なり、簡単に表現することはできません。そのためこのアンケートでは歯学部について述べてあります。9頁以降は国立大学一般について述べてありますので前半とは少し傾向が異なります。(歯学部)
- 地方大学でもあり地域社会なくして大学の存在意義はないと思う。企業との交流は目的が同じでなくては難しい。(一般研究と利益目的の企業では)これからは存在意義を出していかないと(形あるものとして)厳しい気がする。(歯学部)
- 双方にとって情報が少なすぎるために、現在は個人的なレベルで折衝している。この点個人的に県に在職していた経験が役立っているが、もっと情報を公開すべきである。また研究費については企業等も含めてもっと自由に受け入れる体制を作って欲しい。(医学部)
- 地域が大学をみない。大学は地域のことを考えない。共に中央へ目が向いている。これは序列社会、つまり市町村より県、県より国が上という日本では仕方のないことでしょう。これが変わるのは日本の民主主義が真に発達した時であり、今後50年位かかるでしょう。(病院)
- 国立大学を民営化ないし独立法人化すれば、地域社会と大学との関係は自然と活性化されてくることでしょう。本当は地域住民の支払った直接的あるいは間接的税金で養われているはずなのに、どこか遠い世界から養われている感覚が抜けきれていない現状下では、自己改革や地域との交流なんて、とても絵に書いたモチであろうと思います。評価・経緯などの進歩に比して、政治や行政の遅れが目立ちすぎます。情報公開制度の積極的な拡充が、地域と大学との関係の緊密化にも役に立つかも知れません。今少し互いの欠点をほじくり出す方向性が将来的に見たときに、一体化をもたらすのではないでしょうか。いつまでも衣服をまとわないで、時々一緒に風呂へはいる位でないとだめでしょう。(脳研究所)
- 歯学部付属病院は学部と切り離すべきです。診療も教育も研究も一環であれというのは難。歯科医は過飽和状態で人数的にはこれ以上必要なし。(学生数の減少へ)病院はオープン形式とし開業医がもっと気楽に大学の施設を利用できるようにするべし。病院も"目的"を明確にし、一般開業医との区別化をはかるべし。教育病院・研修病院・高度先進治療などのための病院ということを世間に広報する。(病院)
- 他学部の状況については全くわからないので医学部についての質問と理解して答えました。(医学部)
- 地域社会と大学は密接なつながりをもつ必要性がある。そのためには大学が情報をできるだけ公開しなくてはならない。しかし大学が新聞・テレビ・ラジオ等のマスコミを利用して市民向け公開講座を連絡しようとしても、なかなかうまく取り上げてもらえないのが現状である。県の機関誌などは、はじめから相手にしてくれない。もちろん働きかけの努力は今後も惜しまないつもりであるが、ある程度年間予算として計上してもらえると動きやすくなるように思う。また県行政の考え方・あり方の改善も必要と思う。(病院)
- 地域社会にとって国立大学との交流が必要であれば交流すべきだし大学もこれに協力すべきだが、ニーズがないのに交流の必要性を唱えても意味がない。具体的にどのようなニーズがあるのかを明らかにする必要があるのではないか?これは専門分野によっても異なると思われるので、一律に扱うのは無理である。地域社会はもちろん全国的に見ても、国立大学で具体的にどのような教育が行われ、どのような研究活動が行われているかを一般市民が簡単に知り得ないところに問題があると思われる。現在のように地域性が失われる一方の状況にあっては、地域に密着することに意味があるのではなく、特定の問題を考え議論し、解決するためには、どこの大学の誰にあるいはどのグループにどのようにアプローチすればよいのかを判断するための情報が公開されることに意味があると考える。地域の企業・産業界といえども活性化を求めるならば、広く全国規模で情報の収集に努めなければなるまい。国立大学の使命は、高度の教育と最先端の研究を持続することを通じて、地域にとらわれず広く社会に貢献することにある。情報の公開はインターネットを通じて両方向から行うことが十分に可能である。もし、地域が離れているがゆえに問題が解決しにくいという事態が出てくれば大学間で人事の交流をするとか、期限を限って当該地域に出張するとか解決の方法は幾通りもある。問題はそのような人事交流をし難い現在の慣習・制度にあるのであり、大学の設置形態ではない。本来教育には経費がかかるものであり、国家財政の危機というドサクサにまぎれて行政改革という言葉遊びにも似た看板のもとに、国家の将来を左右する教育の問題をその他一般の予算削減と一括処理しようとしたり安易な民営化や地方行政への組み込みでごまかしてしまうことには賛成できない。(歯学部)
- 本県は大学数、大学の研究教育レベルは決して高くないと思われる。しかし本大学を始め、大学に教育・研究上の特徴があり人を呼んでいる。地方大学の場合、全般的に学部の力量をあげるのは難しく、一部特色ある専門分野が必要と思われる。特にそれが地域社会と全国かつ国際的にも役立つものであれば望ましいと思われる。(病院)
- 経済効果の視点ではなく文化芸術、特に日本の伝統文化の地域での確立にも、人文系の果たす役割を期待したい。その意味での地域のリーダーシップを発揮して欲しい。(医学部)
- 本県の医師供給源として本学部は重要な役割を果たし

ている。（医学部）

- タイミングの良い調査と思う。結果に関心あり。地域社会と大学はかなり真剣に交流を考え始めていて悲観していない。しかし全体に変化への対応が遅すぎる。また意識が弱い。「市民感覚」を全体にもっと育てないと駄目。成功を祈ります。（センター等）
- 他学部（特にキャンパスが違う学部）のことはよくわからない。「所属されている大学」を「所属されている学部」と読みかえて回答した欄もある。（病院）
- 教官自身が従来の教育にとらわれることなく新しい知識を得、学生の役に立つ教育を真剣に考える必要があると考える。地域に役立つ学生の養成にもっと力を入れるべきだ。（センター等）
- 医学部の基礎研究に携わっているものとしては答えが難しい（よくわからない）質問もありました。大学人として地域社会に貢献できる場があれば積極的に参加していくべきであるし、また参加したいと思いますが、あまりそのような機会もありませんし、こちらから積極的にそういう場を探すというようなことは時間的にも方法的にも難しいというのが現状のように思います。研究面・教育面においてはあまり“地方に貢献”というようなことを考えず、もっと広く日本全体世界に貢献できる研究、人材教育というものが必要であると考えていますので、特に“地域のために”という発想は必要ないと考えております。（センター等）
- 地域社会と大学との関係や交流は重要であるが、運営のための会議時間が長すぎ。民主的手続きを行うため（尊重するため）同様な内容の報告、討議の会議が長すぎる。そのため学生との対話が不十分となりがちで、社会との交流にまで手がまわりかねる。学科名などの変更を行い改組を繰り返すが、もっとも大切な内容の改革は教員一人一人の問題で、それに時間を使うべきであるが名称変更が激しすぎる。学部・大学院前期・後期などそれぞれの委員会があり、専攻名・大講座名など大変わかりにくいのがその一例である。大学の運営・教育研究の役割分担が重要であろう。（センター等）
- 大学間の人事異動を行わなければ活性化はあり得ない。大学間での人事異動を容易にすることを検討しなければならない。同じ大学に１０年以上いるのは絶対に良くないと考えます。大学は他の研究機関に比べると、あまりに雑用が多すぎる。人手不足である。コピーのはてからすべて一人でこなさなければならない。これでは満足すべき教育すら行えない。また他の官庁に比べて手当が少なすぎる。国立の研究機関の室長で１６％もついているのに、教授ですら大学院手当６％ではあまりにも格差がありすぎ、雑用（大学の運営管理）をやる気がうせてしまう。（農学部）
- 国立大学はあくまでも全国を対象とした大学であるべきで、地域との関係を強調するのは間違っている。もちろん、その中で地域との関係交流も生まれてくるが。（農学部）
- 地域社会と大学の交流を進めようという声の割には、大学側の拘束（制約）が多すぎるように思える。（農学部）
- 地域社会と大学との交流はもちろん大切ですが、それ以前に大学内での文化系と理科系・工学系・医薬系等間の交流が必要と云えそうです。同じ学問・研究領域の人の間でも信頼関係が日本人研究者の間では円滑でなく、今だに欧米からの輸入学問の域から脱していないためか、すべての分野で欧米の研究崇拝からぬけ切れてない。それだけ日本人研究者の自信がない証拠であろうし、成熟しきっていない研究・学問領域が多いと云える。世界的に通用する学者は地域でも通用するであろうし、学問の領域間を超えた領域でも通用することは言を待たない。真に優れた研究者・大学人を見出し、相応に評価する組織を早急に作り上げ、自由に活躍させる場を構築するのが緊急に必要と考えている。（理学部）
- 現在の大学が地域社会との関係、貢献について極めて不十分であることはよくわかります。学問が具体的社会のニーズ要請への回答を見い出す努力をする中で、発展する要素を内在していることを認めることと、その側面での貢献を研究・教育者の評価項目に加えるべきでしょう。外国雑誌への投稿論文数のみが業績として評価され、絶対視している現状を改める努力が必要です。（理学部）
- 私が前任の熊本県では地域協同研究センターが県、企業の協同出資で運営されていました。新潟でも県や企業側からのアプローチがあってもいいと思います。（理学部）
- 回答が限定されていて、ややあてはまらないところがある。現在の国立大の形態では地域との交流は困難だと思われる。社会人としての経験から。（理学部）
- 質問が大学単位か学部単位で分けるべきではないか。学部に多様性があるので大学単位の評価と学部単位の評価では内容が変わる可能性がある。（私は学部を念頭において答えました。）（法学部）
- 自分の研究・教育分野が地域社会のニーズに合致する場合でも自治体での研修や講演等で“薄謝”が支給される場合を除けば、交流活動の多くは無償であり、個々の教官の善意に支えられているのが現状である。地域交流を、きちんとした組織も予算も持たずに押し進めることには自ずと限界があるように思われる。（法学部）
- こういう調査にじっくりと考える時間が欲しいのだが、仕事が忙しくて残念ながらその余裕もありません。（法学部）
- 大学には多数の研究者がおり、地域社会にはその能力を利用したらどうかと思われる領域がある。しかしこれまで、大学と地域との交流をコーディネートする部局が存在しないため、相方とも遠慮し合っているようだ。（法学部）
- 大学と地元との交流は必要ですが、そのためにはそれをなしうる体制を作り出す努力が大学と地元双方に存在しないといけないでしょう。お互いがもたれあいである以上そこからは何も出てきません。地元は大学に何を期待するのか、目前の利益を上げることだけを意

図しているのか、あるいは地方の環境整備を意図しているのかなど、交流をなしうる糸口を見いだす努力をすべきです。大学も何のために地元と交流しなければならないのか、卒業生を受け入れてもらうためか教育の一環として地元環境を把握するのかなどを考えておく必要があります。私たち法学部は、すでに１９９７年度よりインターンシップ計画を試行的ではあるが発足させています。その場合、大学だけではなく、地元を含みこんだ教育というコンセプトで開始しました。大学の経営状態については、何をその当該の大学が第一においているかを再確認することが必要でしょう。その大学の追求するところにより、当然経営形態も異なってくるからです。それより以上に、現在の国立大学においてどのような将来形態が望ましいかについて、有効な対案を提案できるかが最大の問題でしょう。(法学部)

- 大学は大学管理（運営）、教育、研究の３本柱で運営されている。現在地域交流の必要性が重視されているが、時間余裕が少ないため交流を望んでも忙しさ・ストレスのためもあり出来ない。出来ればオーストラリアで実施している教育面に重点が置かれる教職員と研究面に重点が置かれる教職員を分け、それぞれに評価されるシステム作りが必要と思う。（提案）ゆっくり思索する時間と７年～１０年に一回くらいサバティカルレベルの制度を全教職員に与えられると、優れた教職員が集まってくると思います。ゆとりのない職場は魅力がないですから。システムを変えないで仕事だけ増えていくのは大学の身の破滅ですね。（教育人間科学部）
- 義務教育の分野に卒業生が多く活躍しているので新潟県の教育行政に関わることが非常に多く、単に研究室に閉じこもるのではなく、実際の教育現場の問題にも触れることになり地域交流研究のテーマについて賛同できる。（教育人間科学部）
- 新潟の教育行政や教育システムにおいて、学閥の支配（旧師範から引き継がれ上越のこうそん、下越のときわなどの団体）が最優先されており、率直な教育の（地方における）交流・改善のための協力関係（地域住民や大学を含む）が育ちにくい。学閥支配を廃止することで本来の協力関係が発展するだろう。これが新潟の教育の後進性の根本原因と思われる。（教育人間科学部）
- 大学においては、教員も学生も多様であるべきである。様々な地方から集まった者達が、刺激しあって成長するのである。地元占有率の高い大学が地域と結びつきが強いのはある意味で当然であって、一見開かれているようにも思えるが、結局はその地域社会で閉じられている。（学生も含めて）大学人は当該地域出身者も必要ではあるが、多様な者が集まってなおかつ地域社会と結びつくことが真の交流であろう。（教育人間科学部）
- 大学で得た研究や教育の成果を、地域社会に還元する必要性が大いにあると思う。それによって社会から大学の必要性、大学教員の存在意義が強められるようになると考えられる。（教育人間科学部）
- 新潟に赴任して日が浅いので、断片的な考えしかもてない。回答が相互に矛盾しているところもあるかも知れない。教育学部としては、もっと地域の教育界と協力提携関係を強めてもよいと思う。（教育人間科学部）
- 地方国立大学の教員が述べるのはおかしいのですが、これからの時代は「一つの県に一つ以上の国立大学を」は合わないと思います。根本的な統廃合を推進すべきかと思うほど、大学の運営は非効率的です。人事にしろ研究費にしろ不透明感を覚えないことはありません。（教育人間科学部）
- 地域が大学をそれほど重んじていないと思う。どこの大学であれ東京の大学は重視しがち。（教育人間科学部）
- 地域社会が大学をうまく利用するためには、地域社会自体がそのことについて十分に研究・準備すべきであろう。大学自体からは地域の要求の個々のものは見えてこないのであるから。もちろん大学も相談窓口を作るなどの体制作りはすべきである。このアンケートにおける副詞「やや」の使用法が気なった。「やや利用している」「やや協力的である」などという言い方は明らかに不適切である。（人文学部）
- 地域社会との交流を、積極的に評価してくれる人々が大学には少ないように思う。大学内の各種委員会を数多く引き受けた方が、何かと自己の利害につながると考えている先生方が多いのではないだろうか。また公民館等で語学講座を開いて地域に貢献してみたいと思っても、そのような活動そのものに費やす時間がないのが実状。英語以外の語学の先生が貢献できる場所は結局、他大学の非常勤という形しかない。企業が、行政が英語以外の言語を必要とすることは希である。結局教育にしろ研究にしろ、語学の教師が自治体や企業と交流することは難しい。（人文学部）
- このアンケート結果が意識的であれ意識しないものであれ、国立大学の設置形態をめぐる論議に利用されないように細心の注意を望みたい。（人文学部）
- 現時点での本調査実施の意義は大きいと思う。国立大学のあるべき姿をさぐってほしい。ブームや流行、マスコミの宣伝、自治体の政策に便乗した大学と地域社会との交流もあるようです。大変残念です。（人文学部）
- 大学は地域を研究の対象とする研究分野の開発に力を入れるべきだ。またそういう科目を研究室講座の枠を超えてカリキュラム化すべきだ。それにしても講義の数、教える学生の数が多くて、地域との交流まで手が及ばないのが現状だ。（人文学部）
- ドイツやイギリスで見た大学の建物には塀がなく、広い敷地から道路に向かって見渡せる。自ら地域社会との壁を作るやり方は再検討されるべきであろう。管理から教員の兼業伺いを行うだけでなくて、塀を作って自他を区別するこの原点を改めることを見落としできない。大学の役割と機能は多面的であって、地域社会や住民の心からの必要や支援を得て成長できるものと思う。設置形態も、予算の問題から現状維持を求める

のは地域社会と自治体も同様に考えられる。なぜならば税制、大学寄付金などを全額減税にするなどの抜本改正と抱き合わせるような、措置の検討のない議論は片手落ち。大学はもっと地域社会や住民のニーズを、多様な具体性を持って把握しているべきかとも考える。（人文学部）

- 地元の教育委員会から依頼を受けて公開講座や学習指導会の講師を務めることがたびたびありますが、受講者からのフィードバックが乏しいので自分のやったことがどの程度理解されたかを知ることができず徒労感があります。地域の側のフォロー（というか）がありません。要求が明確でないためにこちらも何を提供したらよいのかわからないことも多く、表面だけの交流に終わることも多いのです。地域社会が何を望んでいるのかを知ることもなく、自分の専門領域に閉じこもってばかりの大学の在り方は改善されるべきですが、やはり大学と地域をつなぐ第三者的パイプのような機関が必要かと思います。情報センター的な任務のものがないとどちらも相手の顔の見えない交流をせざるを得ません。（人文学部）
- 私の場合趣味を通して、中小企業の管理職の方と知り合いました。私が工学部ということもあり、個人的にその会社の技術担当者を含んで話をすることができ、教育・研究に関して刺激を受けました。企業にとっては特許の関係で、個人的信用関係のない人との技術相談はしにくいと思われます。私の経験から、若手教官と企業が知り合う機会を地域社会が作るべきだと考えます。（工学部）
- 最近開かれた大学と称して雑用が多すぎる。開くためには人を増やすべきである。教養がなくなり講義の負担が大きすぎることと物を知らない学生が増えすぎている。もう少し教育とは何かを考えなければ、アメリカのあとをついて失敗を重ねることになる。貧乏すぎます。特に理工系の貧乏は、部屋の大きさはウサギ小屋よりも小さいネズミ小屋です。統合大学で理工系離れが進むのは当然で理工系はネズミ小屋で夜も寝ずに研究をしますが、文化系はアルバイトの時間があり生活が豊かに見えます。研究費配分に非常に片寄りが大きいため支障をきたしています。業績重視（論文数重視）の今の状態は学生を労働力とみている先生を作っているように思います。教育やサイエンスは余裕のあるところでやるもので、馬車馬のごとき状況は異常としかいいようがありません。何が豊かになったのでしょうか。（工学部）
- 大学のオープンディやパブリックレクチャーなどがもっとあってもよいのではと思う。（工学部）
- 地域からの要望が多く市民大学等に出向くことが多いが、学生の教育にもっとも時間を割くべきであり、市民へのサービスは二の次と考え、少し地域からの要望を断りはじめている。しかしなかなか断れないのも実情で苦慮している。（工学部）
- 研究資金がないから地域と交流を持つ。（背に腹は変えられない）地域は（地場企業）効率的な金儲けのために大学と交流を持とうとする。（少ない資金で成果を求める）バブルが弾けて、日本の製品が売れない→日本の大学の研究レベルが低い、今まで貢献してこなかった→だから産学官の交流→政・経済界の強い要請→しかし彼ら（経済界）は欧米にこれまで多額の投資をし、日本の大学には人の供給のみを求めてきた！この事実。以上を考えると真に産学官の交流（地域を主体とした）を行おうという意味あいはどこにも無いと思う。（工学部）
- 国立大学全体の改善につながるよう役立ててほしい。特に研究環境について。（工学部）
- 交流には大学側がしっかりした体制を確立してから始めないと実が上がらない。教育・研究で手がいっぱいである。（工学部）
- 現在日本が抱えている重要課題の一つは教育システムにあると痛感しております。国立大学と地域社会との関係、県など地方自治体への移管問題の前に、生まれてから死ぬまでの教育システムの見直しが必要ではないかと思います。つまりもっと大きな視野で教育システムに対する理念を持ち、その上で具体的な改善策を考えるべきではないでしょうか。改善のためには抜本的な組織変革が必要だと考えます。地方自治体への移管も一つの方法であると考えます。護送船団の時代は終わったことを認識している大学人（特にお偉い方々）が少ない気がしてなりません。「大きいことはいいことだ」の拡大指向も同様です。時代の急変に無関心。首都機能の移転とあいまって地方自治体が魅力的な街作りを積極的に行えば、それとの相互作用で地方大学にも発展の余地があるようにも思います。最後に橋本内閣の改革が微調整に終わらないことを切に願っております。乱筆乱文をお許し下さい。（工学部）
- 地域社会と大学という視点で論ずる前に、今大学の直面している問題はより統合的な難問も同時に抱えているように感じられます。従って本調査をまとめるに際して、本研究の意味をより広い視野のもとで位置づけることが肝要かと思います。出すぎたことを申し上げました。ご容赦下さい。（工学部）
- 「地域に根ざした教育=実践的学問」という色づけが若干強すぎるように感じました。大学においてあまりに実践性を強調しますと、大学が専門学校と化してしまうのではないか、あるいは学生から見て大学と専門学校の差異が認められなくなるのではと思います。地域に密着するとしても、大学としての理念、学問の理想は維持すべきだと思います。（工学部）
- 大学関係では大学周辺と大きな産業があるが、これを育成する行政が行われないと地域社会との交流はなかなか進まないのが実感である。（工学部）
- 本地域で２年しか経過していないため交流等未だの感がある。今後の課題と考える。（工学部）
- 全国的な視野を持ち、なおきめ細かく地域活動のできる人材の育成を心がけたいと常に考えております。（歯学部）
- 歯学部は付属病院の活動を通じて地域社会とは密接な関係を維持している。しかし歯学についての教育、研究内容に関しては公開講座等で内容を開示するかマス

コミを介した情報公開にすぎず、より一層地域住民に対して大学歯学部についてのご理解をいただく努力が必要と考えている。できるだけ多くの共通語で語り合い理解し合うことが今後の大学の在り方にとって重要と思われる。（歯学部）

- 自分は基礎系にいるので交流は少ない。大学全体としてはもっと積極的に例えば公開講座（大学内ではなくもっとアクセスのよいところ）などで地域に出るべきだと思う。（歯学部）
- 地域社会と大学との関係や交流を期待するのなら、多くの国立大学の設置母体は自治体に移行した方が効率的である。歯学部のように単独の県に移行できない場合は、複数の自治体が集合したシステムにすることが考えられる。いずれにしても今のように親方日の丸的なシステムでは、国民の税金を無駄にしているといわれても仕方がない。地域の大学は必要があって成り立つべきと考える。（歯学部）
- 地域の考え方が不明瞭です。（市・県・日本すべてにあてはまる言葉）（歯学部）
- 地域のニーズがわからない。同一大学の学部間の協力も不充分。（医学部）
- 最近、受験生数→学生定員の減少が見込まれ大学院の充実の必要性が拡大していますが、地域（県など）の試験研究機関の研究員が研究を進め学位を取得するために、大いに大学院（社会人枠）を利用してほしいと思います。年に１度か２度顔を合わせる審議会のような形だけの交流ではなく長期的な継続的交流による大学、地域両者の活性化が必要だと思います。このことは若い研究員の方は賛同してくれますが行政的、財政的バックアップが非常に弱いと思います。また地域から大学への研究費を伴う研究依頼があってもよいのではと思います。これまで長年共同研究を続けていますが、大学への研究費支給はありません。またもっと本質的には大学の経常研究費が教員１人あたり数１０万円と、あまりに少なすぎます。せめて２００万円くらいないと研究はできません。（農学部）
- いくつかの大学に籍を置いたことのある者として少々戸惑うアンケートでした。特に問１３以降自分の大学と一般論とはかなり異なる感じがしています。また大学と地域交流はすばらしいテーマであると思います。しかし地域（大学外部）が求めているのが、しばしば交流ではなく大学の権威であることが多いのです。利益なしに接近してくることは少ないと考えなくてはなりません。交流はよいことだ、これからの大学は交流を考えないのは遅れている、さらにそれを通り越して悪だと決めつけかねない風潮は危険です。地方の大学はいや応なしに交流せざるを得ません。交流はよいことです。しかしその前に整えなければならない要件を国立大学は備えておかなければならないと考えます。曲学阿世という言葉が思い出されます。（農学部）
- もう少し人的な余裕があれば地域へのサービス（公開講座や地域に関連した研究推進）も可能と思われる。しかし現状では人的不足のため不可能に近い。個人への負担が増すばかりである。（農学部）
- おそらく旧帝大が全国的大学院大学、地方大学が地域密着型大学というような考え方があるのではないかと邪推しています。国立大学はまだ（いまだに）授業料が安く、いたずらに寄付が求められないお金のかからない大学というイメージがあり、それでよいのかと思っています。私自身自宅から通学できるという最大のメリット（お金がかからない）から旧帝大の１つに入学しました。（であるが故に大学院にも５年間通うことができたと思っています）以上のようなことから国立大学は安価な、しかししっかりとした教育を受けることができるという立場を持ち続ける必要があると考えています。このために特に地域と密接な関係を持つ必要はなく、入学を希望する学生は機会均等に入学試験を受けられればよいのではないでしょうか。本調査により大学を立地する地域との関係の大切さが示されることはよいことと思いますが、地方大学イコール地方の大学ということになるのは反対です。大学を考えるのであれば安価イコール安易な教育を改め、少子化した学生一人一人を大切に育てる（厳しく）ということの方が地域との関連より大切と思います。本調査の次には大学教育の本質的なあり方を問う調査が行われることを希望します。安い教育を目指している今のやり方（いわゆる偉い人、偉いさん）は間違っていると思います。（農学部）
- 一部の大学を除いて一般に地域社会も大学も開かれていない。お互いに敷居が高いと思いこんでいる。事実、新制大学は発足時は力がなかった。しかし現在はそれなりの実力を持ってきた。しかしそれを活かす手段が培れていない。そこで国立の研究機関を廃止し地域の研究機関（県・市）と大学を統合する。そして研究部門をエージェンシー化し教育部門は国立として残す。教育部門は４年の学部レベルまでとして現在の修士、博士はエージェンシー化した研究部門にゆだねる。この方法で企業、研究機関、学生の間に垣根がなくなると思う。（所属部局不明）
- 地域社会と大学との関係交流についての研究・検討されることに敬意を表します。大切なことであり遅きに失しているとさえいえますが、とにかく抜本的改革が必要だと考えます。積極的に地方・地域に貢献できる組織体、制度に改善したい。改革のごとく、開放された大学として共同研究や相互交流、人材交換、市民との交流を進めたい。文部官僚の採用制度を抜本改革し有能で能力のある職員（熱意のある職員）の採用と養成制度を作るべきである。同時に教育の交流・交換・流動を活発にする。大学の開放のために米国州立大学並にする必要あり。システムを大学教育（Faculty）が経営権を持つべきであり、素人職員は年功序列で上に上がるのはやめて新規に公募をすべきである。職員の保守性と不勉強さで大学行政が曲げられたり効率が悪くなっている。事務員は能力のある修士、博士の専門家をセクレタリーとして雇用すべきである。純日本的な低学歴の素人の Promotion は絶対に避けるべきである。（経済学部）
- 地域社会と大学との関係や交流の必要性は、大学教員

の意識の変革をもたらすという意味で重要であると思われます。日本の大学は国際化の中で海外特に英・米の大学のマーケットとなりつつあり、そのことに教員は気がついていない。１０ないし２０年のレベルで見ると日本の大学には能力の低い学生が集まることになるように思われます。特に日本の大学は研究も教員も曖昧に行われている、またその場その場で文部省の思いつきがますます大学を悪くしているのではないでしょうか。形だけ整えてその場をしのぐという日本的悪さにおかされ続けているようではないでしょうか。(経済学部)

- 時間の関係で要点のみ（1）現状では、アメリカの大学に出ていった方が研究しやすい。（2）自分の大学に出てくると、本来の研究をする時間がとれないのは情けない。（3）資金は自分で取ってくるので、研究環境のみ充実してほしい。（4）土、日はほんとうに仕事がはかどる。全員に休みをとってもらい、だれが必要かをもう１度考えてほしい。ぜひ大学の人的面では民営化に近い形にしてほしい。設備はやはり税金が必要と思います。(工学部)
- 私は医師の中でも外科病理部門（病理診断を主たる業務・研究対象とする）という特殊な領域を専門としているため、今回の調査項目の中には答え難い設問もありました。しかし、外科病理部門を専門とする者として医療従事者（看護婦、臨床検査師、細胞診検査士、放射線技師、臨床医等）との研修会や研究会は相互にとって重要と考えております。今までも可能な限りやってきましたし、今後もそのつもりでおります。(病院)
- 地域との交流には参加もしているし賛成であるが、行政、企業を問わず、大学教員の専門性（研究分野、テーマ等）が理解されていない面がある。したがって、特定の分野間の交流に隔りがちである。大学自体のPRが大切である。(教育人間科学部)
- 芸術についての質問がないのが気になる。もう少し文化に目を向けて欲しい。(教育人間科学部)
- 学部として地域交流を進めるべきだと思うが、賛同し協力しようとする教員は少数である。地方大学が抱える大問題の１つが若手研究員の流出である。研究者として育ってくると、中央の私立大学に引き抜かれてしまう。若手研究者の多くは新設或いは新設大学に魅力を感じて勤務しているわけではなく、たまたまここでの就職に成功したから在職している。もっと条件のよい（と自分が考える）ところから誘われればすぐに移ってしまう。地域との交流に時間や精力を使うよりも、学界にアピールできる仕事に打ち込みたいと考えている。この状況の解決は難問である。(経済学部)
- 地域との関係を重視するにしても、現在の教員の多忙さと地域協力への評価の低さは「交流」を阻害する。大学のあり方として、ユネスコでの協定（高等教育に関する）から大学の現状が教員の身分保障を論ずるべきと思う。(センター等)
- 地域に設置されている大学として、地域の方々にもその施設を有効に使ってもらうこと。人材を活用してもらうことはとても大切だと思っています。その一方、自分自身が新潟大学全体として、どのようなことを実施しているかも知らないということが今回の調査でわかりました。今後、もっと大学として何をしているかに関心をもつとともに、地域からの要請がくるように頑張りたいと思います。(短期大学部)
- どのような組織も、地域社会と没交渉ではいられるわけがない。大学も、地域社会とのよりよい関係を追求するのは当然のことである。しかし、大学における教育・研究も地域社会のありようも非常に多様である。しかるに本調査内容は、それらの多様性を無視した、どうでもいいような、又どう答えるべきか回答に困る質問ばかりである。このような内容の調査によって「国立大学の将来や、地域との交流のあり方を考える上で重要な手掛かりが得られる」と真に考えておられるとしたら、その方々の常識を疑わざるをえない。(短期大学部)
- 地域社会と大学との交流が不要だという考えはありません。今回の調査では、交流が阻害されている因子はなにかを探ろうとする意図が、前面に出ていないようですが、問１１・１２で集約されてしまうのでしょうか。交流にかぎらず、ゆとりある教育という文言が言葉だけでなく、内容のあるものとなる施策を切に望むものです。(短期大学部)
- 学校の生徒や学生たちには地域社会とかかわるボランティア活動をすすめておきながら、大学自体は教員や職員のそのような活動への参加を推進どころか歓迎しない向きがあるのはどうしてなのか。個々人の意識を調査するよりは、規則でがんじがらめになっている国立大学の運営制度そのものを検討すべきではないかと思います。(短期大学部)

広島大学

- 整備されつつあるが、やはり砂漠の中に移転した感が強かった。後１０年もするとかなり良い方向に変化した状況になっていると期待したい。(総合科学部)
- 地域と大学の交流にはいろいろなレベルでの交流があると思う。従って、設問は各レベルに対するものを分けて示した方が正確な調査になるのではないかと思う。(総合科学部)
- 大学は地方の社会との対比でとらえるべきで、大学は常に普遍的価値の追求を行うべきである。決して地方の文化や社会と融合する（癒着）すべきでない。逆に地方の文化・社会の持つ普遍的価値を発見し全体（世界）に拡げる努力をすべきである。大学が地方の政界や社会と癒着したらおしまいである。(総合科学部)
- 国立大学全てが似たような形態・研究志向・教育方針を持つことは避けるべきだ。大学院中心で研究志向の大学とか、地域に貢献する人材を育成する大学とか、国立大学の中でも分けるべきだ。極論すれば“国立”である必要はなく、地域重視ならば“県立”“第三セクター”にするとか、最先端の研究を行う研究所は“時限”として全て任期制で運営するとか工夫が必要だと

思う。（原爆放射能医学研究所）

- 地域社会との関連も含め、大学の変化は時代についていけなくなりつつある。長い未来へ向け大学はより大きな変化を求めて大きく変改されないと、諸外国の大学のテンポに大きく遅れることになるだろうと思われる。大学は現在でもきわめて古い日本的方法にたよって人事、制度等が動いており、効率と実力をもとめる体制により早く移行しないと、日本全体の足をぴっぱる最大の部分となってしまうかもしれない。（医学部）
- “大学”は教育・研究を通じ地域社会と結びついていますが、忘れてはならないのは教職員・学生の存在で、彼らの地道な地域との生活の場における貢献度もかなりのウエイトを占めていると考えます。ただ単に業績などにこだわった偏重な考えにこだわることなく、人間（的）性を高める幅広い教育にも目を向けて欲しいものです。器では計り知れないものがあるはずです。マスコミなどにとりあげられるようなパフォーマンスが地域との交流ではないと考えます。本調査は非常に有意義なひとときを過ごせる時間をもつことができました。（歯学部）
- このような視点の調査は小生の記憶では初めてであり、従って今後「大学と地域」「大学人の大学外での貢献」への視点を啓発することに期待したい。（生物生産学部）
- 大学全体としては多様性を維持する必要があると思う。したがってある者は地域と密接に活動し、ある者はそうでないという状況があってよいと思う。現状は活動の形態の異なる者が互いに他の価値を認めないとか、地域への貢献や教育、学内組織の運営などの行為を大学人の価値として評価していない、というような点にあるのだと思う。（医学部）
- 全国各ブロックに少なくとも一つは国立の大学院大学を設置することを希望します。各地に既存の国立大学はおおむねミニ東大を目指して来たと見られるが、そうではなく大学院大学以外はそれぞれ特色のあるカラーをもった大学に改組していくべきと考えます。（理学部）
- 地域社会と大学との関係と大学のエージェンシー制なり（設置形態）とは別の議論とすべきと考えます。大学教官の任期制は教官の社会へのステータス（給料、等）がずっと良くなってからでないと、本当に優秀な研究が出来る人がくる可能性は低いと思われます。つまり任期制の場合、給与をかなり引き上げるべきだと思います。また、任期制と研究活動の活発さは特に何の相関もないとする意見もあり、もっと慎重に議論すべきでしょう。本来の国立大学（安い授業料、教育の機会均等）の姿が失われつつある現時点では、むしろ国立大学のあり方（あるいは設置目標）を始めに決めてから設置形態が決まるのであって、研究費のほとんどない現状の大学の姿から決めるべきではないと思います。（「本当にこの国はどうなっとんのやー」です）（工学部）
- 大学の事務局を大きくして地域社会との窓口になって欲しい。しかし積極的に特許等地域の会社と連携するためには、秘書等の事務系が充実しないと時間等の理由でほとんど無理である。（工学部）
- 地域社会が大学に何かを求めるときは問題が生じてしまってからの場合が多いが、本来ならそのような問題が生じるような状況以前からの交流がないといけない。大学は問題提起は上手だが、その解決法は苦手なところがある。その裏には自分の方法論に無理矢理問題点を適用することがあるからと考える。大学は地域社会の組織や生活情報を多くの教官が日頃から受信しておく必要がある。（総合科学部）
- 最近大学に倫理規定が制定され、地域社会との交流を阻止しようとする傾向があり、現状（開かれた大学）は逆行しつつある。（総合科学部）
- 広島大学の場合、地域社会への貢献以前に、自らの組織改革が最重要課題である。自らの保身を最優先しているように見える教授層や、あまりにも数の多い学内行政や会議のために、落ち着いた研究環境や体系的な教育環境にあるとは到底思えない。大学構成員の主観はともかく、客観的には広島大学は確実にその研究・教育能力を急落させるであろう。（「中・四国の拠点大学」などと「お山の大将」気取りでいて、社会的要請にまともに答えられない大学組織は、不必要であるとしか思えない。）今のままでは優秀な若手研究者はどんどんこの大学を離れるであろうし、また離れるべきだ。（総合科学部）
- 自分の研究と深い関わりを持つ分野、自分の研究を活かせる分野での地域交流に賛成であるが、教育・管理運営等の業務のため自分の研究さえできない現状では、地域との交流はとても不可能である。時間的余裕の確保が先決である。（総合科学部）
- 大学は国際性、普遍性があってこそ大学と思います。地域性を志向する教育研究機関は低級化せざるを得ない。（1）の大学（高等研究のみ＊）、（2）の大学（地域貢献型）に分化すべき。＊基本的に研究者養成のみ行う。（生物生産学部）
- 所属学部の性格上、農民や漁民との交流機会が多い。それはそれで良いのだが、一部教員は農民や漁民とばかり接触しているうちに殿様気分になっているふしがある。典型的な田舎教授なのだが、あまりカッコ良いものではない。（生物生産学部）
- 特色が生きる大学を創るためには、現在の国立大学のあり方はよくない。なぜならば、あいかわらず旧帝大系をトップとする序列構成が予算面などで fix しており、各大学の自主的努力を評価しない傾向が強い。地方国立大学が東大や京大などの支店化された組織になってきていることは問題だ。より特色を持たせるためには予算面で地域（県もしくはそれに準じた地方行政）と国とのハイブリッドな運営が望ましいのではないか。米国大学のような州立大学と似た運営ができないものか？（理学部）
- 地域社会と大学の交流は大いに推進すべきだが、今大学改革の時期にあって一人一人の教官の学内業務が余りにも多すぎる。一人の教官に何でも期待するのは無理。私個人としては、5年ほど前から却って地域の技

術セミナーに出かけたり、企業との技術相談に応じる機会が減ってきている。手がまわらないのが最大の理由。（総合科学部）

- 私の所属している医学部は本部と離れているので、大学全体がよくわからないので、医学部として答えました。（医学部）
- 最近社会に役立つ研究という言葉が多い。あまりにも近視眼すぎる。本当に人類に役立ってきた研究は、役に立つとは思えない研究から発展してきている。本当に地域に役立つ研究を大学がしているのか疑問がある。（所属部局不明）
- 人間形成に必要な事が指導・管理できる管理者が極めて少ない。世間一般の風潮をそのまま大学の中に持ち込むことになんら責任がない。地域社会との交流も管理者は自我を出してうまくいかないことが多々あると思う。大学のあり方が重要と言っても大学の中の構成・キャラクターがまず難関。（所属部局不明）
- 非常勤講師等の依頼があり、地域社会に貢献するためにも収入のためにも引き受けたいと思う。しかし大学の授業、実習、会議等の負担が重く、引き受けると研究時間や考える時間すら失われる。助手が学外で貢献するのも、ある程度やむを得ないが、実験の予定が大きく制約を受けたり研究がおろそかになるのは、なるべく最小にとどめたい。（医学部）
- 大学の中にも私自身の如く研究中心の人間と、教育中心の人間がいる。この区別はされるべきである。研究中心の人間は独善的である。これを組織化していくことはなかなか困難を伴う。従って、身分の保障はすべきでない。成果による配分を考えるべきである。（原爆放射能医学研究所）
- 日本の地域社会は大学を「子弟を押し込む学校」とだけ見なして我が手で支え、発展させる教育機関という認識が極めて希薄ですね。地域住民が大学のキャンパスに樹々を植え草取りをし、といったボランティアがあってもよろしいのではないでしょうか。あるいは地域住民が講師となって学生を教育するボランティア講座があっても宜しいのではないでしょうか。地域住民の側からの、大学に対する意識の変革を期待します。（医学部）
- 既に地方のテレビ局で一般人向けの教養番組に出演しているので、地域社会への貢献は充分に果たしていると思う。（経済学部）
- 地域と大学の関係は学部によって大きく異なると考えられます。私は大学全体を想定して回答したつもりですが、赴任して4年で全体を把握しているとはあまり思えません。アンケートを有効なものにするには、学部の活動に限定して設問すべきなのではないでしょうか？（工学部）
- 大学が地域の文化、芸術に対するイニシャティブをとり、地域の創造性の開発を担うべきであると考える。例えば芸術センターのようなものを設置し、そこから文化を発信する必要があると思う。（教育学部）
- 私は医師であり一般的な文部教官に求められている１、教育、２、研究に加え、３、診療という重責が存在する。自分の時間、家庭、etc なにかをギセイにしなければなしえない。（所属部局不明）
- 地域社会の質的向上（環境（地球）問題、倫理、経済…問題）に役立つ体制を、大学の vision として築くべきだと感じる。特に広島大学は local を自覚し特色を出すことで、地域を含めたユニークな注目される大学とすべきだと感じている。現状は大学間競争があるのみで、いつまでたっても 1.5 流大学にしかランクされないだろう。（いくら努力しても）（生物生産学部）
- 今の国立大学は大変閉鎖的。もっと地域社会やその他学外との研究・教育の交流があっても良いと考える。（教育学部）
- 大学と地域社会との交流は重要であるので、大いに活発に進展させるべきである。ただし、研究面で受託研究などの場合研究費の 30%が文部省に上納されるようなことはやめて欲しい。地域としては大学にどのような人材の研究者がいるか、充分把握する事が必要である。（理学部）
- 昭和４４年頃、工場と大学は迷惑施設として、都市から転出を迫られた。しかし今や生涯学習を考え、そのためのサービスを考慮したとしても大学は大変不便なところに放出され、担当者の時間労力負担は莫大でロスのみ多い。県・市等が知的サービスの一大拠点として国立大学を考えているのであれば、更めて都市への大学の回帰を真剣に考慮すべき時に来ている。国も当然に支援すべきである。その際研究と教育の場・空間の切り離しは当然ありうる。県・市町村等の代表者と国立大学の制度的協議会の場も必要となってきた。知的サービスの地域との関連を具体的にすすめる場として、例えば<商工会議所>のような法的整備も必須だと考える。（文学部）
- 教育・研究は地域の枠を越えた価値観に基づいて実施されるべきだと思います。地域社会への貢献は、この様な価値観に基づき、地域社会の問題の解決や発展に取り組むことで、より大きな効果があり、また真の貢献ができるものと考えています。この意味で大学は独自の普遍的な（世界に貢献し得る）研究・教育を行い、これを地域に還元できる存在である必要があると思っています。（このためには人事の流動化もある程度不可欠だと思いますが、一方で身分保証や待遇面での保証が損なわれると有能な人材も集まりません。）（工学部）
- 地域から要請があれば協力しようという姿勢は大学側にはあると思う。ただ地域の要請はある限られた学問分野にだけあり、特に基礎研究の分野には少ない。したがって地域の要請のない学問分野はその大学には必要ないと判断されることが一番危険である。国立大学の本来の使命は地域より国のはず。残さなければならない学問分野もある。いったん切ってしまうと、その分野が必要になった時に人材育成に２０～３０年はかかる。（総合科学部）
- 現状の大学が地域に貢献することは難しい（研究・教育面で）ただ文化面では貢献できると思う。例えば大学の所有している施設（図書館、体育館、音楽ホール、

プール etc）を開放することが出来ると思うが、現体制（行政体制）では無理。まずこの点を改善すべき。地域住民は大学を身近なものと考えていない。（工学部）

- 一口に地域社会との交流といっても、研究領域の違いでミクロな研究領域ないしは個人を対象とする研究領域では地域社会との関係が薄い場合があり、それが基礎研究であればなおさらである。従ってプライベートな範囲での交流は可能でも大学という組織として教官が地域と交流することを考えることに限度があるのでは？（教育学部）
- 教育される学生も、教育する側も、向き、不向きや時とともに変わる価値観を持っている。そのときそのときの人を見て、地域に生かす人材育成を目指すか、普遍的なテーマの研究が向いているか判断するようにしている。価値観、生き方を押しつけるべきではないと思う。（総合科学部）
- 今後 Globalization と Localization の双方が進み Glocalization が重視される。大学と地域とのカベは低くなり両者の距離は短くなるだろう。大学と地域との関係は国立大学という設置形態をそのままにしても、大きく換えることが色々な方法で可能であると思う。センターという所属のため回答が偏っていると思う。前任校の学部では地域の資源の活用はきわめて多かった。（センター等）
- 国政を第一義とすべき国会議員が地域の利益誘導に血眼になるような愚は避けるべきである（医学部）
- 新設の学科で学部教育、修士課程、博士課程の新設に手いっぱいで、地域との交流まで考える余裕がまだないのが実状です。（医学部）
- 日本の国を地域密着型にしてゆくかどうかという問題と深く関わるアンケートであるとの印象を受けた。（2）そのためには現在の日本の東京一極集中型の国づくりを地方（州）型にする必要があると思う。（3）一つの例としてドイツ国のような連邦制を考えに入れても良い。九州で生まれた人が九州で就職して一生を送れるかどうか考えると、今の日本の地方には一生を託すことの出来る雇用機会が少ないことは疑いのないことであろう。首都移転よりも雇用の分散化の方が人口密度アンバランスを解決する方策となりうると思われるので、こういった視点からこのアンケートをとらえることも可能であろう。（医学部）
- 医療、保健、福祉の分野においては地域と密接に関わり合うことが重要である。特に高齢者問題に関しては大学内ではどうしょうもできないことがある。行政そして地域の保健（医療）機関と交流を持たないと研究そして教育が進まない。公務員の場合、勤務時間、給料などのさまざまな制約があるので、もっと地域で能力が発揮できる可能性を秘めているにもかかわらず、実現できない場合が多いと思われる。このような調査が国立系の改組に結びつけることができればと期待いたします。頑張って下さい。（医学部）
- 大学は積極的に産学協同研究を推進すべきである。不況の中で大学の研究費が削減されれば益々不況に陥り悪循環を呈す。したがって産学共同研究を盛んに行い、研究費削減どころか増大させるべきである。ＵＳＡの経済、福祉、医療の発展は膨大な研究費の割り当てにより、中、長期的観点から大規模プロジェクトを行っていることからくると思われる。目先のことにとらわれず、長期的研究を待つ余裕が国に必要である。地域交流に対するバックアップが少なく評価が低い。大学での研究は地域に貢献できて初めて評価が見いだされるものである。医療の現場でも研究よりも臨床あるいは保健、福祉が低く評価されがちである。これは間違いである。大学の規律ばかりを問い正すあまり大学人は萎縮し地域交流への意欲エネルギーが減退し、自由な発想が失われ、事なかれ主義に陥る危険性がある。（医学部）
- 教員養成に関わっている立場から、小、中、高の教員が気軽に利用できる体制が整ってほしいと思っています（学校教育学部）
- 地域との交流が深ければ、それだけ時間が費やされることになるが、大学側がこれを大いに評価する体制にならなければならないと思う。そうでなければ地域との交流は消極的にならざるを得なくなる。（学校教育学部）
- 大学がこれまでとこれからを正面から見つめ直すことは不可避の課題と存じます。ご苦労様です。（学校教育学部）
- 地域との交流は大切であるが、その交流が本務に反映されていくものでないと一人歩きし始める。学問研究とか交流とかの名の下に授業を無視・軽視した新しい意味での誤った業績主義に陥るおそれがある。（学校教育学部）
- 地域の側（市・県など）で研究助成制度を創設されて、地域と関わりのある研究の実施に対して研究助成金を交付されれば、地域と大学（特に個別の教員）との連携がより強まるものと考えます。（教育学部）
- 大学組織と地域社会との関係、（2）当該大学に所属する教員個人と地域社会との関係、この二つのレベルをどうとらえるべきなのか、をめぐって色々問題があるような気がします。組織レベルで何もないと、個人レベルでも何もできないということがありますが、逆に個人レベルでうまく行っているからといって、それを組織レベルに持っていくと（組織化すると）ダメになることもあります。（教育学部）
- アンケートにおける「地域」のとらえ方が各人各様で、さらにケースバイケースでよいのか。私は広島大学のものであるが大学は西条にあり、東広島を地域と考える場合と広島都市圏さらには中、四国地方を地域と考える場合で回答が全く異なってくる。このような状況のもとで回答を単純に集計し分析することは大きな誤りを導くことにならないかを恐れる。検討いただきたい。（経済学部）
- 「地域の時代」にあって「地域からの発信」のために大学がどのような貢献を目指すべきか、またそのためにどのような工夫が必要かという視点がこの調査では欠落しているように思われます。オピニオンリーダー

をどのようにするのがよいのか、問題解決の方策提案を目指したまとめを期待したいと思います。（工学部）

- 結論を急がないこと。2、各大学が独自性を出すこと。が重要と考えます。（歯学部）
- 地域社会と関係交流をできる部分と、できない部分に分けて考えていくことが必要。又大学の学問分野において地域社会とあまり密接な関係を持てない分野もあるし持てる分野もある（学校教育学部）
- 地域社会に貢献することは研究にプラスになる面があり大切なことであるが、長年地域の行政にかかわっていると行政の代弁者になってしまう例が多々見られる。「研究のために」やっているつもりが、いつのまにか大学人としての、又、研究者としての立場を忘れ「利権屋」になっていくケースが多いように見受けられる。地域との交流のこうしたマイナス面に対する対策が必要である。（所属部局不明）
- 教育機関としての大学は、「地域の役に立つ」ことにこだわった人材育成をするのでなく、グローバルな視点にたった人材育成をすべきであると考える。ただ大学という機関、及びそこに勤める教職員は地域の構成メンバーの一員として、地域に貢献する必要は大いにあると思う。また学生も将来はどこか別の世界、地域で活躍するとしても、それぞれの地域での関わり方、社会的な視点の修得などの体験的学習の場として4年間住民地域との関わりを持つということは大切だと考える。（総合科学部）
- イメージのわかない設問が多かったので選択をしづらかった。（総合科学部）
- 地域との交流の必要性は常識として持っているつもりである。しかし具体的に何をやれるかと問われても答えるべきものがない。自分の研究なり教育を必要とされれば提供に応じる用意はあるが、本務はあくまで研究教育だという気持ちが強い（文学部）
- 地域と大学との交流について。1、地域（県・市）などで大学教員の専門とその業績について十分理解されておらず、常に利用しやすい人を利用する傾向がある。人選をもっとよく考えてすべきだ。2、地域との交流をするためにはそれだけの人的・資金的な手当が必要と思う。現状では学内の教育と研究に手一杯でこの上に更に地域との交流をするのは、できにくい。（文学部）
- 地域社会との交流を過度に重視する必要はない。むしろ自然な形で、大学をオープンにすることが大切だと思う。基本的にオープンにしておくと地域からのアクセスも可能でそうした環境の中で初めて地域のニーズに応じた交流が定着することになるのではないか。（法学部）
- 1）（問 3、13）地域への貢献のための人、物、金等の基盤整備が不十分である。2）（問 4）東京への一極集中が進んだため、地域の独自性、独立性が相対的に薄れてきているように思われる。3）（問 6、11）市町村、県、国等の行政機関等からの要請に応じるために本務校の仕事をおろそかにするわけにはいかない。そうした要請に充分答えるためには、そうしたことが可能になるようなサポートの姿勢が整うことが不可欠である。4）（問 15）大学で行う基礎的な研究は国の資金によるのが安定的に行えるし景気の変動や利益によって影響を受けるような不安定な研究態勢ではよい成果が期待できないこと。また利益の上がる領域だけに研究が集中するようないびつな研究体制に陥るのを防ぐことが出来る。民営化すれば倒産する大学が続出するし授業料の高騰、研究、教育体制の空洞化をまねくことになる。5）（問 15(3)）事務組織も一定範囲で教育的機能を果たしている。教育は人手をかけることが必要であり効率の追求は事務の仕事を教員に転嫁したり教育効果を減殺する事に繋がる。　6）いずれにせよ教職員の待遇の大幅な改善、人員・教官・研究費の格段の増加が必要と考える。世界に通用する大学の数を経済大国にふさわしいところまでふやすためにも。（法学部）
- 私は昨年こちらに着任しまだ一年でありますが、広大はよく地域と密着していると思います。特にこれから多くの大学が移転をすることが多いと思いますが、広大は移転とともに地域とのつながりを深めていると思うし、その需要も多いと思います。移転だけでなく今後大学は折々に応じ様々な Turning point を迎えると思いますが、それに応じ地域とのつながりを深めるチャンス。需要は高まるのでそういった機会を今後は一つでも多くつくり、利用していくべきだと思います。（理学部）
- 社会人の再教育や、基礎研究の場として大学を部分的に開放することは、その大学の所在地域への貢献という意味から考慮に値するが、教育・研究に多忙な現状では人的な援助がないと困難と思われる。（原爆放射能医学研究所）
- 地域社会との交流に関わる調査票は有意義だが地域社会の方に受け皿があるかどうかが疑問・地域社会と歩調のあった調査が必要（センター等）
- 広島大学の場合まだ赴任一ヶ月ちょっとなのでよくわからないが、「地域」というのが広島大学自転車・徒歩圏内をいうのか（大学町としてのコミュニティ　ちゃんとリサーチパークもある）、バスで二十分くらいかかる西条駅付近を地域というのか（酒の町で人が住んでいる）、東広島市を地域というのか（自転車で動ける大きさでないので全ぼうはつかめないが、ちゃんと国際空港がある・新幹線の駅もある）広島市を地域というのか（県庁所在地らしいが私には言葉が通じない another world である。まだ一回観光に行ったきりである。他の人も半年で4回しか行ってないとかいうのはザラでそれもだいたいが観光）広島県を地域というのか（安芸はんと福山はんがあるらしい）中国地方を地域というのか（卒業生の就職範囲は西日本全般に広がっている）ようわからんかったので、かなりさくそうした答になってしまいました。（笑）（センター等）
- 地域と係わる大学側の受けもと組織が継続的に地味でも良いから時間をかけて関係づくりをしていくことが必要（センター等）

- 問 13 について　国立大学一般について（1）・（6）の各項目について同じレベルをあてはめる必要はないと思います。地域の人材を養成するのが中心の大学があってもよいし、国家レベルの「有為の材」を養成する大学があってもよいと思います。地域の人材を養成する大学は本来公立（地方自治体設置）の方が適当かも知れませんが、現在の国立大の数を考えると、地域の人材養成も担うべきのように思えます。教育・研究の水準が高く維持できる基盤（財政など）が確保されることが第一と考えます。結果に興味があります本学医学部保健学科宛にもご送付願えれば、大変有り難く存じます（医学部）
- 自分の経験からして大学でどんな教育研究がなされているのか殆どわからないまま入学する。現在でも共通テストの偏差値だけで入学してくる学生が非常に多い。地域と言うよりも全国的にどの大学では何が学べるのかもっとアピールする術が必要である。その特色が地域の関係と結びついていけばよい（生物生産学部）
- 質問事項の重要なものとして、地域との交流を行う際の事務手続きのハンザツさについて触れて欲しかった。大学内あるいは自治体も同じであるが事務手続きがハンザツで嫌気がさす場合がある。もっと簡略な手続きでシステマティックに行えないものか？（生物生産学部）
- 地域社会と大学との交流を盛んにすることは重要です。しかしこの交流に止まらず、諸外国との交流をも活発に維持することによって狭い視野からではない地域社会と大学との交流が可能であると思います。また特に企業との関係は将来さらにいっそう活発に交流を行うべきであり、人事面では他大学、研究機関（国公立、企業）との活発な交流も考えるべきである。但しこれによって個々の研究機関・大学の独自性を失うことがないように配慮するべきである。（生物生産学部）
- 地域との交流は人との連なりが重要で、研究として交流する人以外は、努力しても年月がかかるものです。これから公募などによる今まで縁がなかった土地への転任なども増えることが予想されます。転任と国立大学と地域社会の交流との関係についても考える必要があると思います。（総合科学部）
- 大学と地域社会との交流は大切であるが、大学自体は世界に眼を向け続けている必要がある。研究・学問はインターナショナルな性格のものだからである。（理学部）
- 地域にも大学にも相互交流することの理念が無く場あたり的である（所属部局不明）
- 地域社会に必要な研究、教育が国際的にも重要な研究、教育であれば理想的であるが、あまり地域にこだわりすぎると国際的な水準に到達するような研究成果はえられないのではないか。自分自身の最も関心のある課題について、深く掘り下げて進む方が、国際的な成果となり当然のことながら、地域にも還元できる成果となるだろう。企業の行動原理のように、時間、お金、人手を投じれば、それにみあった成果がえられるというような具合には科学的思考を尊重する立場からは賛成しかねるし、もうすこし長い目で仕事（研究も教育も）すべきであろう。（医学部）
- 地域社会と密接に関連を持ち奉仕する役割を地方の国立大学は理念的に持っているが、具体策となると教官個々人の努力に任されているように思われる。また地域社会にも大学に対する積極的な期待は不足しているようである。両者の情報交換の場がもっと必要であろう。（文学部）
- 私自身は専門分野の関係で、地域との交流が不可欠なので積極的に地域に出かけています。ただ東広島市に移住して広島市が遠くなり、県レベルでの交流がむずかしくなったと感じています。又、東広島市の規模では、ニーズも限られており、もう少し都市化してもらった方が交流しやすいとも思っています。（所属部局不明）
- 地元の高校生の first choice となり地元企業からの求人が多くあり地元の住民の方から教員、学生ともにいささかなりともうやまわれるような存在でありたいと思います。（病院）
- 地域社会と大学とは、開かれた大学を目指し地域社会に大学における研究成果を還元する必要があると考えます。地域社会も大学に対して援助すべきだと思います。（歯学部）
- 特にありません。私（薬学）は地域薬剤師との交流がありますが。（医学部）
- 地域社会との交流は理学系の教官がなかなかできない性格のものと思います。他の系の方々の肯定的・積極的回答をむしろ参考にして頂けることを願っております。（理学部）
- 国立大学と地域社会との交流を積極的、柔軟に進めて行くには、文部省からのさまざまな規制、指導の廃止、緩和が必要と思います。たとえば、小さな規模の研修会（地域共同研究センター主催）の実施のために、文部大臣の決裁が必要なことがありました。大学自身の責任のもとで、運営していく体制を、さらに確立していかねばなりません。（工学部）
- 同じ大学でも学部、学科によって内容は大いに異なるものと考えられる。又、同じ学科内でも講座の研究内容によっても異なってくる。あなたの大学では…という設問の場合どういう立場で解答すべきか…一寸とまどうところがある。（医学部）
- 地域交流：これには多彩な内容が含まれ、ここで取り上げるものを限定・定義することさえ困難なほどである。どんな地域交流が必要であるのかを決めるのはこの調査や大学からではなく、住民の要求によってであろう。人材の活躍の場：育った人材がどこで活躍できるのかは社会状況で変化する。この意味で地域、地域と強調するのは利益の地域還元型構造を生み、過去の過ちを繰り返すことにつながる。実践的教育：人材の活躍の場がどこであろうと、実践的教育が必要である。実践（具体化）すると地域産業に直結した教育が行われてもよい。交流のノウハウ：電話やファクスでの問い合わせにもっと答えられる態勢を整えるべきである。住民の要求に答える問い合わせでさえ即座に答えられ

ないのが現状であると思う。以上から重要なKey Wordは地域交流よりもむしろ住民の要求と実践的教育の方であると考えます。（病院）

- 市民向けの講座を開く・社会人への再教育・大学施設の（一定の使用 or 登録料を払っての）市民への開放等もう少し、教育の面で地域や社会に貢献すべきだと思う。分野によっては企業等との共同研究や国内研修等もあってもよい。ただしそのための制度的障害が多すぎる。障害ばかり多くてそうした経歴が評価されない。新しいことをやろうとするとその人の時間的・経済的持ち出しになってしまう今の状況をあらためないと交流は拡大しない。地域と国際が対立するような形での地域「貢献論」は考えものだ。たとえば問 14 のA、問13の（1）など（所属部局不明）
- 地域社会を啓発して行かねばならない。地域に開かれて行く大学になってもらいたいですね。（総合科学部）
- それぞれの分野において生涯学習が行われているが国立大学ももっと施設などを開放し、ある程度利用しやすくするべきである。（教育・研究・研修など地域の希望者を受け入れやすくする）（歯学部）
- 山の上に位置する本学においては、自然環境の良さイコール研究環境にならない不便を痛感する（教育学部）
- 大学と地域との交流は大切だが、大学は地域のためだけにあるのではない。独立の存在理由を確立すべきと考える（工学部）

香川大学

- 大学が地域のシンボルとなることは、また技術、情報の中心となる事は大事だが、それは地域外に通用する教官がいて成り立つ話であり、“地域だけ”を向いた大学の姿はあり得ない。設問があまりにも地域にかたよっているような気がする。現在問題なのは学会（特に研究会、各種編集活動など事務レベルの）の東京集中ではないのだろうか。それが是正されれば、自然に地域から世界へ、世界から地域への問題は解決されよう。（工学部）
- 学部によって地域との交流に差があるように思えるので、質問文にあるように「大学」としての回答を求められると判断がむずかしい。（農学部）
- 学生や教官による工場見学、会社研究の機会、大学教育に対する産業界の要望など直接に聞く機会、産業界の研修と大学教育の交流促進、教育分野での産学共同があっていいと考えます。（経済学部）
- 大学はもっと地域社会の役に立たなければならないと思う。私が所属するのは教育学部であるから、地域の教育の役に立ちたい。そのためにも大学と地域とを結ぶ窓口になる機関が必要である。（教育学部）
- 問 13 は回答に困りました。AとBで全く対立するものではないからです。教員の専攻領域によって地域とのスタンスのとり方は異なるでしょうが、濃淡はあれ地域と接点をもつことはすべての研究者に可能であり、「研究、教育に力を注ぎたいので・・・」は口実にすぎず、このようなタコツボ型研究者はへたをすると厳しい業績評価の誘いれになるかもしれません。加野先生によろしく。（法学部）
- 「地域社会」とはいったいなんなのでしょうか？大学が貢献すべき、密着すべき「地域社会」とは何か？私にはわかりません。自分の知らないところで学部・大学はいろいろと地域と交流しているのかもしれません。大学単位の交流の実態は我々にたずねられても知りません。私の回答も私の知っている範囲のものだけです。前半の設問にはどんな意味があるのでしょうか？（教育学部）
- 特に問５まで学部によって全く異なると思われるのと、互いに他学部のことがよくわからないので、この点大いに問題がある。（農学部）
- 学長、学部長のリーダーシップ、明確な動機づけ、交流ノウハウを蓄積できる組織とスタッフ（退官教官が大学側への窓口として有効と思う）が必要である。天野先生の来訪への感謝をこめて、このアンケートを書きました。（農学部）
- 地方自治の確立のためには金と知の自律が不可欠だと思うが、国立大学がその役に立つべきかどうかわからないが、地方大学としての国立大学が最もそれに役立つ位置にいるのもたしかだと思う。（法学部）
- 大学と地域の関係をよく知らないので、あいまいな回答しかできません。（教育学部）
- 学部、研究分野の違いを無視しての「大学」と地域社会との交流は考えにくく回答しづらい。（法学部）
- みんながOO先生の話を聞きたい、と言うような大学教官が非常に少ない。今やもっともつまらない話をする人＝大学教授となっている。学問が分析の方ばかり重視に総合化を怠った為だと思う。日本にはまだ、科学が根付いていないのかもしれないが・・・・・・。（教育学部）
- 問１３のA、Bは対立的に扱われているが、項目の多くは対立的にとらえる必要がないように思われる。個別性と普遍性は関連するものである。地域を超えて活躍できる人材の養成をはかることは地域の発展に役立つ人材の養成にもつながる。（教育学部）
- 久し振りに面白いアンケート調査で、有意義だと思います。ただ一つ、これらが「地域大学の民間移行」のデータとして使われたりすることのないように願っております。（教育学部）
- タイムリーな調査と思う。思いつきだが、大学に地域交流促進センター（仮称）をつくり交流の窓口にすることも一つの方法では。香川大学の場合、生涯学習教育研究センターに併設（機能をもたす）ことの方が現実的か。（センター等）
- 大学は未解決な問題を研究する機関であるという中核的な機能を放棄すべきではない。研究する姿勢や方法、ものの捉え方を伝えることにより、人々の視野を広げていくことが重要。そのためのニーズがあれば社会人を入学させるとか方策はいろいろあるはず。量ではなく質の問題を議論してもらいたい。（教育学部）
- 地域社会と大学との関係という場合、関係の次元を

（1）管理・運営（2）教育（3）研究に分け、それらの各次元については多様性が考えられる。大学の設置形態に関する慎重な議論をふまえて、これらの各次元での関係のあり方を具体的に検討する必要があると思う。これらの検討については地域社会と大学との関係、交流を活性化していくという前提に立脚していくことは言うまでもない。（教育学部）

- 若干、確信のない質問項目答えざるを得ませんでした。その主な理由は、（1）従来の私の学問分野がインターナショナルであること（2）教員養成学部としての教育活動を自分の研究分野として開拓していくこと。この（1）と（2）のアンビバレントな関係があるからです。（教育学部）
- 大学教員が多忙になっていて、そんなに時間をさけないこと。教育・研究以外の雑用（会議等）に膨大なエネルギーが費やされて、学外の仕事もある程度断らざるをえない。教育・研究・地域社会への奉仕はすべて本務としての重要な業務であるが。また、すべてにおいて一流でありたいと思っているが、アンデンティティが分裂しそうになってしまう。地域の側に、知識はタダでないという意識がない。負担に見合う謝礼は必要だと思う。大学人の善意のみにすがっていてはいけないと思う。地域の求める人材は、どうしても特定の人に偏るのは仕方がない。講演等でもヘタな人はすぐにお呼びがかからなくなる。外は厳しい社会でもある。（教育学部）
- 地方大学であるので、私自身大学のすぐ近くに住んでいます。折々に大学生の態度の悪さを目にし（学外での）、また地域住民の間での評価をもよく耳にします。ゴミの出し方、利用している自転車の利用の仕方、物を食べながら、ゴミを捨てながら道を歩く等々、学生の態度の悪さも、地域での大学の評価を下げている一因のように思われます。したがって地域の優秀といわれる高校の生徒は、この大学を目指しません。小学生でも「あんな大学にはいかない」と口に出します。「学生のレベルの低下→地域の評価・信頼のなさ→学生のレベルのさらなる低下」と連鎖していると思われます。地域社会での信頼を得るために、教員自身も悩んでおります。でも夜中に屋上で花火を打ち上げる、夜中に車を乗りつけ騒ぐ、学内をバイクで走り回る等々、困難なことが多く生じます。地方大学のかかえる大きな問題だと思います。（教育学部）
- 問１３の国立大学一般として地域優先か社会全体かといっても、地方国立大と東大や京大阪大等々の大都市立地の大学とその他の地方国立大では現状では少しその役割が異なって居ると思うので、この質問は一般としては答えにくい。選択肢として書いていないが両方の教育や研究が求められている。またその（5）の企業との関係での質問で、企業の目的が営利だけであるかのようで、しかもそれは良くないかのような（「避けるべき」という表現が）考えに立った設問は、設問作成者の予断があるように思われる。（経済学部）
- 新たに創設された工学部の一員として、地元産業のシーズの開拓ならびにニーズへの対応を通して、地域社会とともに教育研究してゆくべきと考えている。特に香川大学に地域共同研究センターの設置を実現すべく、検討ならびに運動してゆきたい。（工学部）
- 地方大学の農学は地域農業に密着した課題を研究テーマの一つの柱として持つべきと思うので、その為にも地域との交流は欠かせない。また地域への情報公開は国立大学としても当然のこと。質問票の内容をもっと検討してから調査した方がよかったのでは？（農学部）
- 問１４のDで学外地域代表者の大学運営参加制度については、この地域代表者の権限、大学自治との関係etcの諸条件をセットにして考えないと回答することがとても困難です。問１３の（1）（大学の人材養成）では、AとBに分けて回答することはできないのでないでしょうか。地域での活躍が国内外の普遍的意味をもつ事例や、その逆のパターンの事例を検討する必要のある時代状況になっていると思います。（センター等）
- 大学改革の方向づけにご貢献を。（センター等）
- 地方に所在する「国立」大学と香川県とか四国とかの「地域」との関係のあり方について定見を持つに至っておりません。（経済学部）
- 地域との交流は地域側の要請がそのスタートとなり、本学部でも要請があれば学部としても個人的にも積極的に対応してきています。今後交流センター等が全大学に設置されれば、より交流は深くなると思われます。（農学部）
- 国立大学の公立化、民営化の議論の一環で本アンケートが実施されているように思われますが、地域社会との結びつきが強くなることは悪いことではあり得ませんが、それが大学の公立化の根拠になるとは思われません。（教育学部）
- 大学全体と地域社会との関係については、私自身わからない事が多い。地域社会との関係のありようは、学部の特性によって強く規定されるのではないか。（教育学部）
- 地域社会、特に専門の農学分野では県、農協の委員会に委員として参画している。どちらかというと地域社会とのつながりより、私は国際交流、国際援助で海外とのつながりの方が大きい。（農学部）
- このアンケートでは、個々人の研究テーマによって生じる大きな違いを１回答に反映できないのではないでしょうか。理学系であっても地域性の高い研究もあれば、農学系でも普遍性の高い研究もある。（農学部）
- 地域の枠をどの様に考えるかで現実的判断が異なる。判断の基準が個人的なもので、従って設問によっても異なる傾向がある。1回の調査で結論とすべきでなく、少なくとも2、3回反復して傾向を分析すべきであろう。教育と文化の不可分性を強調する必要がある。また文化祭などのイベントを通じて、その観を強めることができる。（教育学部）
- 地域において学生がインターンとして、短期アルバイトのような形態で働く機会をもつことは重要であると考えます。生活実感が何といっても学ぶうえでの必然性を導く、まず第1です。教育のカリキュラムについ

て、もっと学生をお客として丁寧に扱うべきではないか。確かに授業料に見合うだけのものと考えれば欧米と比べて安いわけで、そこまで世話する必要がないのかも知れないが、学生が他の大学院へも進学できるだけの実力をつけられる教育の水準を確保するのがよいのではないでしょうか。院生を昔のように足軽のように扱う感覚では、大学は何の役割も果たさない。味の実充を。（所属部局不明）

- 本学では学部間に教育・研究の差が大きくあり、「大学では」という質問に回答することは困難を感じます。理系、文系の差もあると思われます。そこで本回答では、「本学部」を置きかえて回答させていただきました。（農学部）

九州大学

- 九大は旧帝大なので少し大きな大学ですし自分は医学ですから直接地域と接していますので、相反する目的のちょうど中間です。（医学部）
- 今一つ設問がピンと来ない部分があり、いきおいにまかせて○をつけた部分が多くある。基本的に地域社会との交流を拒む理由はなく、具体的な機会には対応したいと考えている。ただ自らの研究展開のためにという必要性は、専門領域の関係からほとんど感じていない。もし私でもお役に立てることがあるのでしたら、遠慮なくどうぞといったところでしょうか。（機能物質科学研究所）
- 本調査が役立つことを期待したい。（歯学部）
- 地域交流よりもむしろ国際交流に力を入れており、地域交流についてはあまり考えたことがありません。そのためやや無責任な回答になったかもしれません。（農学部）
- 大学は研究、教育（学生に対する）について地域に捕らわれることなく自由に行うべきである。しかしながらそのように自由に行った研究、教育の成果、内容等が地域の発展に役立つのであれば大いに提供すればよい。サービス等についても同様である。地域に役立つのであれば行う。ただ他の地域に対して地元を優先する必要はない。但し地域からの金銭その他の援助により（ある）研究・教育等の活動を行う契約を成立させた場合、その活動に関しては地域を全国その他の地域より優先させるべきである。多くの優秀な人材に教育の機会をもってもらうためには、低所得者への教育機会提供法の見直しなどを我が国の大学はもっとよく考えてみる必要がある。（医学部）
- 「地域」という言葉は現在の流行のように感じますが、「国」としてどのような人材を養成するのかを考えていかないと、いわゆる「地域エゴ」ばかりが出てきそうな気がします。（工学部）
- 地域社会と大学との共催のシンポジウムを毎月実施する。共同研究の相談窓口を設定し、ここで共同研究の契約や特許の申請手続きを代行する。このようなアンケート調査は、テーマを絞り込んで各学問分野ごとに実施した方が効果的である。アンケート調査の方法はこのような書類ではなく、E-mailで交信して自動的に集計できるようにする方が効率的で精度も高いと思う。（工学部）
- 大学と地域社会の関係よりも大学内あるいは大学間の関係、主として人的交流に問題を感じています。（歯学部）
- 日本には同じような大学が多すぎる。いろいろな特徴を持たせるべきだろう。例えば大学院大学、教育に重点を置いた大学など。また一部民営化も考えるべき。教育に対する評価法を確立しないといけない。大学の先生の講義はひどすぎる。（所属部局不明）
- 大学内の学問分野によっては地域とあるいは社会と密着した方が良いものもあり、また逆にこれらとは全く相関のない分野もある。大学の改革を考えるときに「大学」という一つの枠（分類）によってすべての分野を同じように変えようとするのは不合理である。（理学部）
- 欧米の社会システムと日本のそれにはかなり違いがある。そこで社会システムのあり方をグローバルにとらえた上での議論が必要である。だがしばしば、「欧米の大学では…だから」といった議論で「大学」だけがいかにあるべきかといった問題の捉え方がされがちである。ただし、小生は「欧米の社会システム」や「大学のシステム」が嫌いと言っているわけではなく、どちらかと言えば好きです。（農学研究科）
- 病院の機能について。１案、特定機能病院として一般保健診療を超えた（外枠として）診療医療を行い営利部門は目的としない。２案、完全に独立し、教育機関（臨床医師の養成）として人材の育成を第一の目的とする。この際日本の厚生行政に沿った形での運営はいうまでもない。以上の２つの案のいずれかの方向性を決めるべきである。（医学部）
- 大学教官の諸活動に際し、うるさい書類作りをしなくてもいいやり方で行えるようにしてもらいたい。（総合理工学研究科）
- 地域との交流という時、実利的（すぐに役に立つとか）に偏りすぎている。（理学部）
- 九州大学の移転は、時代に逆行するものであり中止すべきである。１．地域との交流がますます疎かになる。２．国費の無駄遣いである。３．元に掲げた全学を一つのキャンパスという前提がすでに崩れている。過去に東北大、広島大、金沢大など地域社会との交流をさける形で大学の移転が行われた。これは明らかに失敗であった。九州大学が同じ過ちを繰り返さないことが大切である。（理学部）
- 少子化、高齢化の日本において教育機関としての大学が生き残るためには、社会人教育、生涯教育、留学生受け入れしか道はないように思います。従って大学のサバイバルのためには、地域社会との関係は深めざるをえないと思います。九大は入学者の８割以上が山口県以西の高校出身者でありながら、この地域での就職先が少なすぎると思います。（センター等）
- アンケートについて「地域社会」には多面的な要素が含まれており、大学との関連について問われても「地

域社会」の捉え方によって質問に対する答えが全く異なってしまう。問１１～１３は特にその傾向が強い。返答する立場として、イデオロギーあるいは政治に関しては大学は中立であるべきで行政やボランティア等とは一線を引くべきである、および大学にも競争原理を導入する意味から理工学においては市場の評価をある程度受け入れるべきであるとの観点から、地域との関連に関する問に答えている。国立大学について教育、研究、社会サービスの３機能に分け、教育と社会サービス、研究と社会サービスを重点とする２種類の異なった大学、米国のカレッジと研究大学に分け前者は国もしくは地方自治体の大学とし、後者は民営化することがよいと考えている。あるいは研究大学も学部と大学院を切り離し、教育は公的支援を厚く研究は競合的な資金導入（研究者の労務費も含む）で行うような公・私の境のない大学にするのがよいと思われる。これによって各々の大学の使命が個々明確となり地域、国、海外のレベルでの対応、交流が容易になるのではと思う。（工学部）

- 大学には各々機能（役割）があるので、地域社会との関係は一律ではないと考えます。（工学部）
- 国立大学を国のニーズ、地域のニーズに合わせるようにある程度分類する。地域のニーズに合うように（そのように分類された大学も）地元出身者の優先的入学、編入等を考えるべき。（所属部局不明）
- 正直なところ所属大学がどの程度地域とかかわっているのか、全体的には見渡せない。回答もごく自分のまわりを見てのものとなってしまう。具体的な最近の経験からいうと、九大の移転、地下鉄工事ｅｔｃで福岡市の対応は非常に不満のあるものである。またこの間学会や研究会を福岡市で開いたが、そうした学術的な催しに対する市の補助ｅｔｃは他の自治体と比べ、かなり低いと感じざるをえなかった。地域の高校の教師の方や住民の方との交流という意味ではそれなりの関係がもてるのだが、行政との関係はあまりよくないという感想を持っている。（理学部）
- 地域社会と大学との関係や交流についてはする気がある。その余力を与えてほしい。（センター等）
- 大学は地域社会との交流よりも他にやるべきことがたくさんあるように思える。大学は地域社会や企業でえられず、またそこで直接役立たないようなことを学び研究することのできる場であると私は信じている。そういうことを身につけたいのなら大学へは入学せず、社会へ出るべきである。大学に「役に立つこと」を求めすぎているように思える。（歯学部）
- 私の所属する大学でも法、経済学部といった社会とのかかわりの多いところや医、工学部のように企業とも関わる所と文学部は大いに性質を異としています。文学部内部でも美術史や考古学、日本史、福祉社会学等は地域に根ざした積極的交流を行っており純粋に理念的な分野とは様子が違います。一つの大学について一般的なことをいうのは非常に難しく、このアンケートでも私の分野というより印象による判断を書かせていただきました。（文学部）
- 大学の地域社会との連携強化は基本方針の一つとなっている。（大綱等）しかし大学の社会への奉仕は教育・研究の次に来るべきであるという考え方もまだ根強い。せめて大学人の総エネルギーの少なくとも１／１０以上は社会奉仕にむけられるべきだろう。過去約１０年来本学の公開講座委員会副会長としてきた経験から、地域との密接な関係を発展させることが必要と考えている。その意味で「福岡都市圏１５大学連続公開講座」などの実践をやっている（実行委員長として）。社会人の大学院入学も実施しているが時間的負担は楽でないのも事実だ。制度面の整備と個人レベルの意欲とが相俟って成功するであろう。（教育学部）
- 地域との交流を大いに考えたいが、専門分野に関連した産業が地域で十分発展していない。地域側も発展を望んでいるので長、短期的に考えたい。（工学部）
- 調査に当たって「地域とは」を定義されるべきと考えます。２、専門分野においては地域との密着度が異なり、大学として考えたときに他学部、全学としての取り組み状況が私自身把握できていない。そのようなもとで回答していますので実態とは異なっているかもしれません。３、本研究会の成果が文部省等の行政側に大いに反映されますことを期待しています。（工学部）
- 地域との交流は大事ではあるが、学問分野によってはその必要性がうすいものもあり、何でもかんでも交流するということには反対である。これに要する時間をさくのがもったいない気もする。（センター等）
- 交流を深める会社が少ない。したがって学生の就職先も地元に少ない。（システム情報科学研究科）
- 地域の必要な時に気軽に大学にアクセスできるように環境を整えるべき。（システム情報科学研究科）
- 国立大学は大学独自の高邁な教育、研究理念を持ちつつ、地域企業、行政との共同研究、交流を推進すべきである。（薬学部）
- 地域社会で大きな自治体では調査研究センターを設ける都市が増えているが、そのような場合その地域の大学とは無関係な人事、予算配分等が行われている場合をよく見かける。それは非効率的であって、設立時から地域大学との協力連携をはかるべきである。東京一極集中現象の中で地域社会との社会的経済的水準と文化条件は、必ずしもその地域の大学の研究・教育の水準を支える方向には作用していない。地方拠点大学では地域とのギャップが大きく、世界的な研究・教育の展開をはかることによって地方の国際化、地方の社会的水準の向上をはかるべきである。（経済学部）
- 大学は地域社会の下請け的仕事をするところではない。下請的仕事を交流と勘違いしてはいけない。（２）基礎研究は役に立たない研究のための excuse の言葉ではない。良い研究には基礎研究と応用研究の区別はない。研究をものにする気持ちが両者に必要。（３）日本の地域社会は知的財産をタダと考えている人が多い。これでは創造的研究は評価されない。（工学部）
- 九州大学では福岡市西区元岡への移転を計画しており、私は新キャンパス計画推進室に勤務しています。新キャンパス用地の現地調査、計画策定等に関する資料を

委員会に諮りながら、研究・教育も建築学科でやっているという状況です。新キャンパス計画専門委員会では地域との連携が重要な課題であるという認識から、1997年5月に地域連携WGを発足し、学内外からの意見を広く求め、COE構築と豊かなキャンパスライフの創造に向けた提言を九大から発信しようと精力的に取り組んでおられます。こうしたことから、この調査には関心を持っています。（工学部）

- 九州には私が研究している研究を行っているレベルの高い民間、自治、国の研究所がないので地域との交流２～３社しかなく殆ど東京で若干大阪である。（総合理工学研究科）
- 国立大学の民営化あるいはエージェンシー化に対抗する為には自主的な大学改革が不可欠ですが、問題はその改革理念で効率性に代わる理念の樹立が喫緊の課題となっているように思われます。私はそれを「社会的貢献」に求めています。この意味で地域社会との交流というファクターは、ご指摘のように国立大学の存亡に関わる大きなテーマだと存じます。しかし現実はこのことの重要性に気がついていない教官の何と多いことだといわざるを得ません。意識改革の為には地域社会との交流を、教官評価、部局評価、大学評価のチェックポイントの重要な柱の一つとしなければならないのでしょうが。（法学部）
- 問１５（３）Ｉにあるように大学間での役割分担が必要と思われる。地域社会との関係や交流のあり方は大学によって異なると思う。学部数が多い大学の人間と少ない大学の人間に同じ設問は少々無理があるように思える場合がある。（農学部）
- 歯学部であることから保健、医療団体との交流に偏りがちになることがあります。大学での教官の評価は論文数がすべてという所があり地域社会との交流はあまり評価対象になっていないようですが、この点が改善されればさらに交流は深まるのではないでしょうか。（歯学部）
- 国立大学の場合は大学の独自性を尊むべきで、あまり地域社会との関係を重要視すべきでない。研究教育の結果として、地域社会と交流できるような状況になるのが最も良いことだと考えている。（医学部）
- これまでの大学は日本あるいは世界との交流を重視しすぎたきらいがある。しかし大学の存在する地域社会へもっと貢献することも重要であると考える。このためには交流を実現するシステムを大学、地域の両者が一緒になって考え実行することが重要である。（医学部）
- 本音を言わせて頂ければ、あまり交流や教育などに努力せず、研究のみをして一編でも多くの論文を書くことが現在の大学の姿だと思う（良かれ悪しかれ）論文数が少ないといつまでたっても講師のまま他大学への移転もままならぬから。景気は最悪、学生は就職難、教員はポスト不足、その内定員削減ｏｒリストラで失職するかも。一度転職しようかと会社（地域社会そのもの）を訪ねて相談したこともありますが、それは冷たいものでした。（所属部局不明）
- 大学本来の仕事を放って地域との交流を大事に考えているスタッフには困る。大学と地域は相互に利益がなければならない。一方的に行政が利用するのは困る（医学部）
- 「開かれた大学」は大賛成であり開かれなければ大学は死滅するのみである。但し何に対して「開かれる」かを見失った議論が多い。大学が開かれるべき対象は「社会の未来」であり大学が存在する地域社会ではない。社会の未来を正しくみつめるのが大学の役割であり、社会の未来に貢献できる人物を養成するのが大学の人材育成である。現時点でたまたま存在している地域の現状のため大学が存在するものでもなく、そのために開かれるものでもない。「何に向けて開かれるか」がもっとも重要。（生体防御医学研究所）
- 全ての大学が地域社会と交流する必要はない。役割分担で明確にしてよいだろう。このアンケートでは「地域との交流」の定義が不明確。市民、団体、企業のどれとの交流ですか？企業と目的を持った交流（研究）はできても市民とはできません。私は医学部に所属しています。ある意味（臨床）では病院保健所との地域交流は必須です。しかし基礎研究では交流しても無益なことが少なくない。（医学部）
- 大学における教育研究を支える環境が全く整っていない現状の分析から開始すべきだと思います。教育、研究支援システム（事務、秘書機能など）が全く無いに等しい状態では大学の役割を議論すること自体無意味に近い。大学院生の教育の費用が研究ごとで修士、博士を問わず一人当たり年間１５万円以下という現状でどんな教育が出来るのか？こういう根本的な問題に取り組まずに本アンケートのようなことを行うのは、時間と労力の重なる無駄遣いに近いのではないか？（理学部）
- 留学生教育に従事していることでもあり、地域社会との交流は他の部局所属の者に比べると非常に多い。（センター等）
- 理工系と地域社会との研究協力をコーディネートする組織として地域共同センター等が設置されており、不十分ながら重要な役割を果たしている。しかし市民の教育問題、文化的要求、法律的問題、企業の経営問題、自治体の政策形成など人文、社会科学分野での成果は潜在的に強く期待されている。現在では個別に教官が対応しているだけである。政策科学センター、市民交流センターなど市民、行政、企業と大学が研究面で交流を深める為のコーディネイト組織が重要である（経済学部）
- 現在のような教職員の定員削減が続けば、将来の大学を支える人材が育たないと思われる。これを非常に危惧している。（工学部）
- 旧帝大系の大学はあまり地域社会にこだわることなく世界的視野で交流するべきである。（工学部）
- もっともっと積極的に協力すべきである。お互いが門戸を開放すべき。大学の民営化、任期制度は是非導入して地方、国との人物の交流を推進すべきである。そうすればお互い活気づくこと間違いなし。（農学部）

- 知見の社会への還元の一環として大変重要なことと考えています（医学部）
- 国立大学及び大学教員は学生の教育と研究を国民の皆様から依頼され、予算と給与を税金の中からいただいている。従って、この本務が第一で全力を尽くすべきであると思う。そのため地域に貢献することが本務（国民の皆様の要望）ひとつとなれば喜んで協力する。私自身の場合は教育、研究で手一杯であり地域との交流は全く考えていない。しかしこれは他の先生方が交流することを否定するものではなく、余裕のある先生方は大いに進められると良いと思う。（工学部）
- 「地域」の概念があいまいです。とらえ方によって回答が異なるように思います。グローバルに見ればアジアも一地域かもしれません。集計結果、又は調査結果は何らかの形で回答者にもお知らせ頂きたく思います。学会や大学等が会員の地域貢献や活動をどのように評価しているかという視点も重要かもしれません。（農学部）
- 地域社会との密接な交流を通して地域社会の発展に貢献することは大切である。しかし医学部においては教育、研究に更に診療を行うという特殊性のために時間的余裕がないのが現状である（医学部）
- 大学幹部の個々人の責任の明確化が必要と考える。文部省（これもだれが責任あるか不明）も含めて集団無責任体制の様に下からは見える。（医学部）
- 地域社会と大学との間で情報の交換が活発に行われていないため、大学で行いうるサービスが地域社会には不明であるし、地域社会のニーズは大学教官に十分認識されていない。大学は研究・教育情報を積極的に開示していく必要があるし、地域の行政は大学の実施しうるサービスについて市民へ解りやすい形で紹介し、大学と地域との溝を埋める努力をすべきである。現在は一部の限られた教官が研究、教育、社会貢献に多忙な生活を送っているのみで、大学全体としての活動はきわめて限られたものである。国公私立大学を通して研究、教育の役割分担を明らかにし、効率的人材活用を行う必要がある。資源の乏しい我が国にとって人材の活用は最重点項目であるにもかかわらず、教育、研究の効率化と活性化が十分行われていないのが現状である。（農学部）
- 我々は研究所付属病院と研究所という、医療機関と研究機関という両方の形態とかねているという特殊な状態にある。我々は医療機関であり、しかも西日本ではリュウマチ膠原病の一大基幹病院であるので患者の診療を通じては勿論、患者団体と積極的に交流しているが、極めて当然である。但し研究と言う目的からは別に地域との連携が必要かどうかはわからない。研究費を大量に頂けるなら、当然そういうことも考えていくが。財政的な支援も何もないところに教員の良心と犠牲とに頼る地域交流をおし進めると言うことは大いに問題である。（生体防御医学研究所）
- 大学はもっと地域や地域企業との良好な関係を築くべきである。地域（地方自治体）や地域企業ももっと大学をシンクタンクとして活用すべきである。但しカルチャーセンターとしての大学は望ましくないように思う。カルチャーセンターないし、職業人養成学校の機能とは別の形態の機関を考えるべきである。そのようなものも必要なので。大学はあくまで世界に通用する識見の人材養成に力を入れる方が良いと思う。そうでないとシンクタンクはつとまらない。大学の受け入れ学生数は減らすべきである（定員を減らすべき）。職業人としての問題意識を持った人材の受け入れを容易にすべき。大学は現在病んでいるように思う。今後の世界的状況変化、日本の人口動態などをふまえた調査があってもよいように思う。（センター等）
- 長年の学究生活から今、国立大学の教育、研究の将来を憂慮している者の一人です。地域社会との連携も大切ですが、国立大学を活性化（真の意味で）する必須条件は次の三つが主体です。１教育、研究スタッフの増員。２教育、研究予算の増加。３教育、研究スタッフの待遇改善。以上が充足されれば国際的な研究者が育ち将来人類のために貢献できる人材が教育できます。現在１、２、３が欠如しているため教育、研究内容は貧困であり、一人一人の研究教育者は過労状態です。早期改善を強く望みます。地域社会との交流も上記が充足すればスムースに進展すると信じます。（薬学部）
- 地域社会との交流は大学にとって重要な存在意義の一つであると考えられるが、現状ではその受け皿は不十分であり交流に対する評価も低い。今後交流を盛んに行うためには、上記課題を改善する必要があると思われる。（農学部）
- 「地域社会」の地域が何の範囲を指すのか、例えば「市」なのか「県」なのか、はたまた「西日本」なのか？このために回答を決めかねた問が多々ありました。そのために設問毎に番号の選択が不統一に場当たり的になってしまっています。理系分野は文系分野に比べて狭い範囲での地元社会との接点が極めて小さいように思います。（センター等）
- 公開講座や講演会の無料化・資料、美術品、図書などの一般公開・大学病院のサービス向上（数理学研究科）
- 国立大学一般といっても地域性は重要な因子である。関東、関西、中京など、いわゆる中央と地方では国立大学のスタンスは必然的に異なる。その点を十分に配慮しないといけない。例えば、国や企業の研究所（高等）などは中央に集中している。ＣＯＥを行うのはよいが効果的な研究機関の移動をしないと地域社会とは結びつかない。（農学部）
- 自己評価やアンケートなどの雑多な仕事が多すぎて研究、教育のための時間が少なくなりつつある。地域社会との交流は重要であるが、形式的なものになったり大学側の負担のみが大きくなるようなやり方は好ましくない。（工学研究科）
- 地域とはどこからどこまでか・地方国立大・大都市大・旧帝大全部地域の範囲がちがうのでは？（所属部局不明）
- 大学の教育・研究機関は常に国際的にトップレベルであることを目標に行うべきであるが、我が国の全ての大学がこの様な観点に立つことは無理もあろう。ある

程度の役割分担は必要となるであろう。この様な考えから、地域社会と大学の関係にも大学によって違いが出てくることはいたし方ない。私の所属大学は歴史的に国際的トップレベルの研究を目指してきており、この方向は当然重要である。研究機関の密度が高い関東・関西に比較すると、地域との交流といっても啓蒙的なものになりがちであり、国全体の活力の向上という点から政策的にもこの点を正す必要があろう。ただ、現在でも様々なチャンネルでの交流は可能であり、大学における教育・研究の本務に差し支えない限り、努力すべきであろう。（工学部）

- 大学病院・大学の研究などと歯科医師会や開業歯科医師とのリンクをより緊密にし、大学を地域住民に対しより開かれたものとするとともに、大学側よりの積極的な外に対するアプローチが必要。三次医療機関としての役割もあるが、患者を待っているのではだめ。地域の業界全体が地域住民のヘルスプロモーションを高めるべく協力することが必要。そのための大学の位置づけ、役割を再考する必要がある。（歯学部）
- 専門領域の違いにより、交流の仕方が随分と異なるように思われる。（歯学部）
- 国立大学であることのメリットは殆ど感じない（私立大学から転任してきて）。もっと自由にやれるように民営的発想をもっと取り入れた方がよい。（文学部）
- 助手レベルの高年齢化が国立大学では進行していると思われる。任期制の導入も一考と思うが、地域の知識人としての活動を積極的に進めてはどうか。このようなアンケートを助手レベルまで行う必要があると思う。大学内の新陳代謝を真剣に考えないと、２１世紀の高等教育は不安材料に満ちている。（所属部局不明）
- 大学の所属する県以外の地域特性から派生する研究課題について国、県の機関と共同の研究をしています。“地域”の範囲を広域に考えると、これも地域社会との交流になると思います。ただ研究内容は地域との関連が大いにあるのですが、研究の過程では全く無縁に進めていくことになり“交流”の意味合いも濃淡があるのではないでしょうか。（理学部）
- 所属している大学が総合大学なので自分の専門と遠い分野について十分な知識を持っていない。２、大学の方針についても十分な知識を持っていない。３、当然の事ながら選択には困難を感じるところが多く、従って答が矛盾しているように見受けられる所もあろう。（センター等）
- 具体的な研究内容を踏まえた上でこうした調査を行うべきではないか。例えば、最初から理論専攻の人は地域との（研究上の）関わり合いは持たないともいえる。（経済学部）
- 国立大学の地域との交流において、非常に重要な機能の一つは「社会人の再学習」の支援をすることにあると思う。すなわち生涯学習の機会を与えること、また勤労しながらの大学での勉学の機会を与えることが地域に密着した大学のひとつのあり方であると思う。（アンケート）この設問中に「夜間大学」や「通信教育大学の推進」等について具体的な問いかけがなかったのが残念である。（工学部）
- 地方公共団体からの受託研究を行う場合２０％を越える金額があらかじめ引かれるが、公共的な仕事に対し何故このようなことが行われるのか理解できず常に疑問が残っている。このことは地域との交流を進める上で決してプラスとはならないと考えている。質問内容が漠然とし、設問として適切でないものがある。アンケートにおいては質問者、回答者間に齟齬が生じないよう質問内容をもっと具体的かつ明確にすべきである。（工学部）
- 大いに協力すべし（総合理工学研究科）
- 過去に財団法人、企業の依頼で一般向けに講演を行ったことはある。ただし、専門が原子力という全国規模のものであり、かつその地方に特別な原子力との関係がなかったため反応はいまひとつだった。原子力という専門分野から見ると九州地方での学生の就職の場は少ない。大きな企業、機関は関東・関西地区に集中している。（工学部）
- 事件や裁判の報道に関連して新聞記者から問い合わせを受けることが多いが、マスコミ関係者の学識のなさと言うよりも見識の低さに呆れることが多い。地域と大学の交流ということも、低レベルで考えたり推進しても実りは乏しい。急には役に立たないようなことに研究者が一生をかけていることの意味を地域が理解するようになればよいが、それには地方新聞などが高い見地から大学での研究を地域に紹介したりして、応用部門と基礎部門の両方が大切であることを世間一般に理解させるような姿勢に変わらなければ道は遠い。現状では公開講座なども地域で消費されるだけのものでしかないし、大学を利用できるかぎりで利用はするが大学の肝心な部分（基礎研究部門）は利用価値なしとばかりにあしらう。それが現時の地方行政でありマスコミである。どちらかといえば応用部門にいる者として以上のように思う。（法学部）
- 本調査で用いている「地域社会」の範囲が曖昧なので、やや回答にとまどう設問もあります。都道府県というと広すぎるようであり、一方、市町村というと狭すぎます。一応「福岡県＝地域社会」というイメージで回答しました。（法学部）
- 「地方の時代」と呼ばれている中で大都市圏以外に位置する大学は、それぞれの地方の特徴に合わせて独自性を発揮すべきではないかと思う。そのために大学に現状以上の自由度が与えられるべきであると考える。（法学部）
- 開かれた大学については学問の蓄積、情報公開などさまざまな議論がなされているが、原則として開かれた大学を志向しつつも総てを解放することではなく、一定の制限が必要と思われる。とくに現在大学院の重点化による教官や事務官の過重負担が行革による定数削減とともに大きくのしかかっているために必ずしも前提条件とすべきではないのではないか。さらに大学のもつ情報の公開、研究蓄積の公開、社会的活用などについての倫理規定についての検討がなされなければならないと思われます。プライバシーに関すること、高

度な情報科学、DNA関連など、生のままの情報、成果として出せないものも沢山あり、それらをどのように処置して公にしていくのか、個人の研究者倫理だけにまかされるものではない。大学には人材とともにそうした情報集積が集中していることをもっと大切にした上で関係交流の有用性を論議すべきと考える。（教育学部）

- 私の研究の一部は“薬物依存”を取りあげています。これに関連し青少年（高校生・中学生）薬物乱用防止対策会議（県警）のアドバイザーとして全面的に協力しているが、１・大学の教育研究。２・大学での諸会議に費やす時間との兼ね合い。３・公立・私立高校の受け入れ側の問題（私が薬物乱用の講義を高校で又は中学校でする）。４・教育委員会の本課題に関する見解、等の諸問題があり、私が考えるようには進展していない。地域社会と大学との関係や交流はその課題によっては「良い悪いの判断」以外に解決しなければならない諸問題がある事を痛感させられている。ボランティアの精神が揺らぐのはこの時である（大学内の活動だけに留まろうとする事）。（薬学部）
- 学部においては交流の大切なところもあり、一方では理学部のように現時点での応用よりは将来を見通すための基礎研究にその重点が置かれているところもあります。又大学の本来の目的は次世代の教育・研究であって、その原則をくずさない限りの時間で地域社会への貢献を付加すべきであると考えます。（理学部）
- 大学は色々な面で地域社会と交流があり開かれていて、政治・経済・文化・教育・環境など中立的立場や視点で提言があってもよいと思う。この調査も単に調査で終わらないことを望む。（理学部）
- 設問によっては学部間で事情が異なっている。「大学」としてではなく「学部」としての設問であれば解答が異なっている場合もあったし、大学全体のことを知らないため不正確な解答をしてしまった部分もある。（歯学部）
- 自分が持っている知識を地域社会のために役立てることは、大学に籍を置く者として当然の義務だと考えます。しかしながら行政組織や特定の企業とあまりに深く結び付くことは、自覚しようとしないとに拘わらず、自らの学問の基礎を揺るがせてしまう事になります。私は理学部に所属していますので、そのような機会はむしろ少なく幸いなのですが。（理学部）
- 大学が持つ良い面を大いに地域の発展に利用すべきである。開かれた大学となることが重要でしょう。（理学部）
- 文系と理系学部で交流の必要性がかなり異なるのではないか。（理学部）
- 大学の地域社会との交流と言いつつも、今のような教養講座的な一方的な開かれ方では“教えてやっている”ということであり、交流の方法をもっと積極的に模索すべきと考えます。（工学部）
- 現在私の所属している科における外来新患患者の６割は紹介患者で、市内外からの開業医からが５割近くある。地方歯科医師会との交流もあり講演会などにも招かれる。但し地域開業医が大学を訪れて患者の相談・技術手技の相談に来ることは滅多にない。やや敷居の高い存在となっていること、事務的手続きが厳しいことが難点である。（歯学部）
- 歯科医として大学で得た知識を地域活動にいかしたいと考えることもあるが、あまり機会はないようである。そういう面では閉鎖的になっていると思う。もう少し大学も窓口を拡げて地域社会への貢献を考えるべきだと思う。（歯学部）
- 国立大学にも様々なレベルがあってよいと思います。例えば研究中心の大学、教育中心の大学、地域への人材供給を目的とした大学、地域を越えて活躍する人材の養成を目的とする大学など。大学は地域社会と交流することが大切であるが、地域に限らず国全体あるいは世界全体と交流すべきでしょう（工学部）
- 国立大学と言えど、本学などの基幹大学と、いわゆる地方国立大学とは自ずと地域社会との関係・交流において自ずと使命が異なる（現状及び将来展望において）と考えます。（工学部）
- 大学には県立、市立などの形態もあるので運営に関して、あるいは入学者に関して国立大学が地域に特別な配慮をすべきではないと考える。（工学部）
- 大学側から見て地域社会のニーズを把握する手段がない。また大学側もこれに対する努力がなされていないと考える。逆に地域社会も大学側のシーズを知ろうとしていないのではないか？ニーズ・シーズの真の一致はこのままではあり得ない。（工学部）
- 大学への要求は多様化しているが、全ての要求に応えるには分担が必要に思う。分担方法については種々考えられると思うが、例えば問１３のA側に主に応える大学、学部、B側に応える大学、学部とした方が良いように思う。特に大学に古くからある学部、大学院、研究センター、研究所直轄研…等、その使命を再度明確にすべきである。そうしないと一組織、一教官の力では真面目に多様な要求に応えられる筈がない！！（工学部）
- 地域のニーズがあれば、そのニーズに応えるべきである。しかしながらそのニーズの内容はよく吟味しなければならない（工学部）
- 地域社会との交流は大切だと思うが、直接教育、研究につながるテーマが少なすぎる。しかし、地域社会に我々が行っている教育、研究を地域社会に理解してもらえるよう学問を開放することは続けていきたいと思う。それが交流の“はじめの一歩”と考える（工学部）
- 問１１でB・を「そう思う」としているが、「教育・研究で忙しく」というのは本当は適切ではない。正確には「教育・研究以外の雑用で忙しく」である。地域との交流も教育・研究の一環であると考えているので、いくら教育・研究に忙しくても個人的には地域交流を進めて行くつもりである。現在の自分にとって最も障害となっているのは、雑用の多さである。（工学部）
- 大学と地域社会との関係乃至交流に際してはその障害となる制度等は取り除くことが望ましいと考えるが、交流推進をマニュアル化したり過剰評価する必要はな

いと考える。問１５の（２）に関連することとして少子化に伴い２００５年を境に、入学定員に満たない大学が出現することが現実となっているにも拘わらず、この事に対する国立大学側の対応はにぶい。少子化時代に対応した大学における教育・研究体制・規模・人材の再配置等々について検討を急ぐべき時が来ている。このようなアンケートもあってよいように思われる。（農学部）

- 基本的には大学は教育・研究に専念すべきで、その為には均等に資金を国は提供すべきである。近年先端的な研究に科研などの配分が多く、また企業、自治体もその傾向があるが、偏向したこのようなあり方は教育は勿論、研究システムも将来崩壊するであろう。欧米は先端的研究にも資金を出しているが他方では基礎研究にも十分提供している。また、地域や企業などのへの貢献は教育・研究の余力の中でやれる範囲でよい（農学部）
- 大学は基本的に地域社会のものではない。国際的な技術の進展を第一に考えるべき。但し地域社会も企業も国際化の波は大学以上に受けている。この中で大学としてのあり方を考えなければならない。国際的に一流の技術を育てることは大学でも企業でも同じ立場であり、この事が地域社会にも貢献することに連がることを認識して研究を進めるべきと考える。この意味では企業との連携、地域社会との交流も積極的に進めるべきである。（工学部）
- 現在の専門領域の中でも地域社会との交流の可能性のあるテーマと国際的レベルで探求を進めるテーマがあるため、「問１３」の回答では実際を伝えにくかった。（工学部）
- 国際交流拠点としての“地域”は大きな意味を持つが、教育拠点としてはあまり意義を感じない（狭い日本）。しかし同種のものがどこにでもある必要はない。行政も含めて地域分担があっても良い。地域との交流は大学、地域が相互に入り組む教育体制を一部取り込むような形でニーズに応えるような実践的側面の教育を行う機関があっても良い。（工学部）
- 交流は重要であると思うが、時間的余裕がない。（農学部）
- 専門分野に関する識見を通じて交流を深めることが大切。（農学部）
- 大学と地域社会との交流を活発にする必要はある。本務に支障のない範囲で地域企業との共同研究や社会人の再教育等で貢献したい。（農学部）
- 地域社会との交流は大切に違いないが、学生（人材）を育てることを第一としたい。（農学部）
- 九州大学は、国内の狭い地域の交流ではなく、東アジア地域ぐらいを視野に入れた交流を考えたい。（農学部）
- 世界的、全国的、地域的な視野すべてが必要と思われます。（農学部）
- アメリカの大学（農学部）へ行ったとき、地域の農民（農民個人といってもアグリビジネスの会社経営者）が大学に作物栽培技術の相談に来ていた。彼らは研究資金も大学に相当出していた。日本でも各農家は経営規模がアメリカと比較にならないほど小さいので、研究資金の提供は個人レベルで無理としても農協などの団体としては可能であろう。しかし日本では全くこの種の発想が大学にも農民（団体）にもない。したがって、大学も農民もお互いを身近に感じることなく、地域的協力は現状ではできないと思う。大学の側としても地域（農民）の側としても、互いにメリットを感じない以上接触もないと思う。単に理念だけでは現実の交流はできないと思う。大学の側も、日常的に地域住民が訪問できるような雰囲気もない。（農学部）
- 私自身は地域社会との交流が深い方であるが、地域社会と交流しても学内的にはあまり評価されない。むしろマイナスになっているのではないか？学内の評価は論文数であり、地域社会への貢献は評価基準にない。地域社会への貢献と学問的貢献は時間的及び肉体的に見て矛盾しやすいのではないか。本来は両者を統一すべきと思っていますが。（農学部）
- 大学は地域社会に貢献すべきであるが、同時に全国的な視野に立つことも重要である。（医学部）
- 同一大学内でも各学部による差があり、大学全体としての観点から回答することは困難な質問が多い。（医学部）
- 大学での研究成果は社会に還元されるべきであるが、特別に地域社会に限定しているものではない（医学部）
- 地域社会への関与の度合いは大学の設置形態と密接に関係すると考えます。地域社会との深い関係は別の形態を要求すると思われます。（総合理工学研究科）
- 全体的な傾向の調査と並行して、具体事例を細かに調べられることをおすすめします。ここ数年、従来の常識的な交流の枠を越えた事例が増えていると思います。その多くが個人ベースであり、組織的でないので見えにくいものがあると思います。例：学生グループを中心としたベンチャーやボランティア団体、教員の企業や財団法人への参加（兼任）。祭などへの参加（インターネット技術などの提供）。行政や企業活動への協力（非公式な技術提供、ホームページ作成など特に情報通信分野）。小中学校の技術・理科教育への非公式な協力（システム情報科学研究科）
- 本アンケートで用いられている「地域」という言葉の定義がはっきりしないので、質問に適切な回答ができない。「行政」を意味するのか「地域企業」あるいは「地域の一般住民」を意味するのかによって当然回答は異なる。また地域の範囲をどのレベルにとるかも明確ではない。「市町村」「県」「九州地方」「西日本」「日本」「アジア」など様々なレベルが考えられるがあいまいである。（医学部）
- 「地域」に対するサービスとか交流と言うより、大学教員とくに国立大学教官はパブリック・サービスというものをもっと真剣に考えるべきではないかと思う。とくに九大の場合パブリック・サービスの精神がなさすぎるという印象がつよい。また地元の方も東京一極集中ともいうべき傾向で、とくに自治体やマスコミな

どは、東京の先生の方が九州の大学の先生よりも偉いし集客能力があると考えている。これは九大の持つ「パブリック・サービスをするくらいなら、論文を書け」という態度・傾向と裏表の関係にあり、両者の接近を困難にしている。なお国立大学の設置形態をかえるべきだという意見は、こうした地域との交流と言うより大学教官の身分に関する様々な規制、ややこしい会計規則等、研究・教育活動のやりにくさに基づいている。休暇で海外に遊びに行くのに、どうして届出等の規制をつけるのか等、国家公務員の身分などない方がよいと思えることが多い。サラリーの安さもこのまま放置しておくと、大変なことになると予想される。（比較社会文化研究科）

- 大学は優秀な人材の輩出という形で、恒常的に地域に貢献することが責務であると考えています。ある種のパフォーマンスとも見受けられるそういった要素を含んだ、外見で安易に判断できる評価の楽な形での貢献は大学としては不適当な方向であると思います。（数理学研究科）
- 大学内に地域交流を企画・調整する各種機能を持つ、地域交流センター等の設置が必要。夜間あるいは土・日に社会人が学べる（再教育・研究）大学院の増設が必要、またそのための人材（教授・事務員）の確保も必要。地域交流のためには現状のままで活性化はかなり困難で、上述の様な人と機関の設置が最も重要課題。現状では時間を割いて、公開講座や講演等個人的負担にたよるだけで手一杯。定員削減も一因となる。（センター等）
- 「大学が…」という場合と「自分の部局が…」という場合かなり差がある。（センター等）
- 地域社会がどの程度大学の現状を把握した上で交流の必要性を感じているのかが全くわからない。具体的な要請があり、本務である教育・研究に負担がない範囲での協力には応じる気持ちはある。Ｐ４問５に対しては実情を知らないので回答できない。Ｐ９の「国立大学一般」のあり方についても回答しにくかった。全ての国立大学を横並びに議論する必要があるのだろうか。各大学独自の将来に対するビジョンを踏まえてユニークな大学の創造を推進し、かつ全体的にバランスがとれた配置を国の行政がつとめるべきだと考える。（生体防御医学研究所）
- 私個人の意見としては大学は本来研究・教育を第一目的としており、自主・独立の立場を堅持すべきであると考えます。したがって地域社会への貢献はあくまでも各個人の自主性に任せるべきであり、何らそれに拘束されるべきでないと思います。（応用力学研究所）
- アンケート用紙・封筒が立派ですね（センター等）
- 基礎研究の分野であり、あまり深く考えていない内容の事で恥ずかしく思います。地域社会との交流は大事な事項と思います。（センター等）
- 地域社会と大学との関係や交流について未だかって意識したことがありませんので、役立たずの回答とは思いますが一応提出します。（数理学研究科）
- 私が所属するセンターは民間、地方と九州大学との研究協力を推進するために、平成６年に設置されたセンターである。センターに移る前は工学部に所属し、主に研究のみに専念してきた。センターに移ってきて感じることは、１・九大研究者が研究協力制度を十分に理解していないこと。２・民間の中小企業は大学に対して大いに期待しているが、あまりにも現実的問題解決を大学教官に求めるためMatchingが悪いこと。３・大企業はあまり大学との研究協力を求めてないこと。たぶん各学会等での個人的つきあいの中で、研究協力が進められている。いずれにしても大学と民間、地方との協力に関しては問題が多数存在する。（センター等）
- 現在のところ地域社会と大学の間にネットワークが無いので、交流はほとんどないのではないか。最近はインターネットのホームページ等で大学側の研究紹介などが公開されてきたので、交流は進むのではないか。地域社会への貢献は過度に負担とならない限り個人的には行いたいと考えており、また地域社会からの情報、ニーズなどについてはこちらも関心を持っている。（総合理工学研究科）
- 大学は地域の人々からその存在を理解されることが大事であるが、これと同時に日本の基礎研究と高等教育のリーダーとして機能しなければならない。このための両立を図る専門の部門が大学と地域の組織の両方に無ければ、個々の教授助教授に大きく負担がかかる結果となる。（総合理工学研究科）
- これまで東京都文京区、愛知県岡崎市、福岡県福岡市で勤務経験を持った。国立大学が交流を持つ地域社会には適切規模があり、東京は大きすぎ、岡崎は小さすぎ、福岡市が最も適切規模であったように考える。（センター等）
- １、大学と地域社会との交流には双方がその必要性と意義を十分に認識する必要があります。２、文化的風土の強弱により大学が地方から評価される度合いも変わると思います。３、金にならない学問を地域社会をどのように評価するかによって大学側の対応も活発にもなり不活発にもなると思います。４、私共の経験として環境アセスメントなどでは真の専門家としての大学人を入れず、素人衆団で答の出やすく行政に利用しやすい方が好まれるなど不信感を持っています。（センター等）
- 御苦労様です。国立大学も大学によっては地域社会の関係を重視することも必要と存じますが、その一方で地球、世界、国家を考える人材の育成、研究の重要性を大切にしてゆきたいと存じます。（比較社会文化研究科）
- ご苦労様でした。いろいろなケースを紹介していただき、今後の大学と地域社会との交流のヒントを提供して下されば有り難いです。なおいろいろな交流、いろいろな先生がいるのが大学の良さと思います。全く交流をしない先生がいるのも悪くないと思います。ピントがずれている解答も多いと思います。おゆるし下さい。（センター等）
- 地域社会との産・学交流について。双方で望まれてい

ることであるが、スムースな展開のためには問題点が多い。1、地域の企業・産業は低いコストでより高い成果の取得を望みがち。2、大学はこれまで、どちらかというと、curiosity・orientedなbasic research に従事してきたため産・学交流の“シーズ”が乏しい。また大学は人的体制が整っていない。つまり交流を可能とする人が無いか不足している（大学院生には寄与はほとんど望めない、望むのがムリのようである）。出来るところが出来る範囲で少しずつ進めてゆき、展望を開いていってほしいと思います。（応用力学研究所）

- 私は企業や自治体が開催する委員会に幾度も出席し、種々の問題に関して検討したり意見を述べる機会が与えられた。しかしながらその会議の方向、あるいは結論は一般的にすでに決まっており、企業の営利、自治体の予算獲得・消化の方向で結論が出されることが多いことを感じている。現在文部省は産・官・学の共同研究を推進しているが、今こそ大学は営利にとらわれない国民・住民の幸福のみを念頭に入れてアドバイスを行っていくべきである。特に環境問題に対しては一つの正しい結論を提示することは困難であり、委員会の設置目的に応じた結論を引き出し住民・国民をあざむくことは容易である。従って今こそ国立大学は中立の立場から企業・自治体の活動をみつめなければならない。そのためには国立大学の民営化はあってはならないと考える。（所属部局不明）
- アンケートの主題ではないが自由な意見をということなので、大学の設置形態の変更問題について意見を申し上げたい。私は問 15 の(2)には解答しなかった。それは現時点で大学の設置形態に関して議論することは、大学の機能の向上に何ら資することがないと考えるからである。設置形態変更の対象と考えられているのは国立大学である。そして国立大学の対極は私立大学と考えられている。しかしこの対比は間違いである。日本の私立大学は独立した教育法人ではなく、運営資金の相当部分を国の補助金によっている。そしてこれが重要であるが、その代償として国（文部省）が大学の諸問題にことごとく介入することが許されている。考えても見よ。私立大学が自由に学部や学科を設置できるだろうか？つまり、日本では私立大学自体が既に「独立」した法人でもなんでもなく、たとえば改革に対しては事前に文部省の「お許し」を必要とする存在でしかない。国立大学を、このような私立大学と現在の国立大学の中間の性格を持つ存在に改組して何が変わるだろうか。国立大学改組で最重要なのは、国（文部省）が大学の改革に事前に介入せず、結果によってのみ成果を判断することである。同じ事は私立大学においても当てはまる。このような条件下でこそ、斬新な改組が可能である。国立か私立かなど設置形態は問題ではない。（所属部局不明）
- これからの国立大学は、国際社会での活躍を視点に入れた第一級研究者等の人材の育成を目的とする大学院大学、地域社会との交流を重視する国立大学等の役割分担をすべき時期にきているように思える。全ての大学が総合大学、大学院博士課程までもつ大学を目指しているような改革はもうやめたほうがよい。（総合理工学研究科）
- 私は現在「九州大学先端科学技術研究センター長」をしているので、他の教官に較べ地域との接触は非常に多いと思います。産学共同研究に関して言えば、教官は共同研究を単に研究資金かせぎと考えないで、研究を通して地域に貢献することに意義を見出すべきだと思います。また文部省・大学は地域連携の仕事に対して通常の研究・教育上の業績と同等の評価を与えて欲しいと思います。（システム情報科学研究科）
- 大学はその独立性を堅持すべきである。（センター等）
- 所属学部によって個人的な見解が異なると思われる質問が少なからず見受けられる。地域社会との交流に関しては、大学研究者個人的な研究内容よりも、ネームバリューにとらわれすぎの感が多い（地域社会・組織の対応が問題）（所属部局不明）
- 地域社会が大学の協力が得たい場合には協力すべきだと思うが、学問は多くの人にとってそれ程興味があるものとは思えない。それ故、無理に公開講座などを開く必要はないと思う。むしろ自由に講義を聴いたり、図書館を利用したりできる機能が重要だと思う。要するにしたい人には門戸を開けということである。社会人再教育というと聞こえはいいのだろうが、それ程向学心があるわけでもない社員をおつき合いで聴講させ、先生の方もイヤイヤやっている（学長や学部長が引き受けてきたからせざるを得ない）ような話も聞いたことがある。「制度」にしてしまうことはよくないと思う。統計とはそんなものだろうが、私が考えていることと質問がしっくり合わないので矛盾した回答にになることが多い。これでもしないよりましなのでしょうか。（工学部）
- 私自身としては我が大学のある地域に何らかの貢献ができるように研究を進めてゆきたいと念願している。しかし、そのことと学問の内容とはダイレクトにつながるとは考えていない。とても基礎的なレベルでの研究が、将来的に何らかの貢献をなしうるようにということで考えている。いいたいことは、地域の現状に直接すぐ役に立つということではなくても、将来的には何らかの貢献ができればという意味で考えている。（所属部局不明）
- 設問に妥当性が欠ける（情報公開等に対して欠落していると思うのだが）。企業と行政機関を同一レベルで議論することは無理がある。（企業は利潤優先、行政はサービス優先）国立大学はサービス機関も兼ねているので特定の行政機関に利用されるべきではない。行政改革に逆行することになる。（所属部局不明）
- システムをきちんと作れば地域と大学の交流はかなり有益なものとなるのではないか。高校生や中学生、場合によっては小学生を対象とした大学人によるサマースクールが、市または県の運営で行われるとよいと思う。（医学部）
- 米国で４年の在留経験から考えて、２００～５００万人の人口に対して１個の優れた研究大学を置くべきで

あり、九州に九大１個では少なすぎ、各県１個では多すぎる。概念としての「地域社会」ではなく人間活動の力、圧力としての人口に基づいて考えたい。米国で州立大学が健闘しており、それに対抗するために従来評価が高かった私学がリストラを行っているように思います。（正確ではない）（センター等）

- 大学への期待は大きいという認識は考え過ぎではないか。大学は人材を養成し、社会がそれを受け取って使用するという風潮はよくないことである。社会自身が人材を養成することが肝要である。教育機関としての大学はあまり必要でないと思う。例えば、企業連合による教育機関を設置し、自力で必要な人材を教育養成することが重要ではないか。社会全般として「教育を押しつける」傾向が強い。人をつかまえて無理に教育する傾向があるのではないか。研究者も研究を必要とする団体が養成すればよい。中途半端な研究体制をもつ大学は今後衰退して行くであろう。（農学部）
- 大学は象牙の塔、人里離れた学問修業の場というイメージが依然として強い。一部の大学教官は地域との交流にたとえ熱心であったとしても、その活動に対する評価は低く、むしろ評価は下がるのが現状である。特に事務体系から不評をかう場合が多いのではないだろうか。ボランティア養成の自主的講座やボランティア活動の大学への導入について必要性もあって取り組んでいるが、必要性よりも大学のイメージが先行しているためであると思う。大学観の変更は学問・研究・教育の在り方も変更するものであり、パラダイムの転換と言ってもよいと思う。地域社会への貢献の議論がその突破口となるような気がする。又、留学生の受け入れも大きな影響を与えていると思われる。（センター等）
- このような調査の必要性は認めるが、その結果として本調査の趣旨のような事柄のみが、大学の重要な側面として評価される風潮を生むのではないかを恐れる。文系・理系を問わず、基礎学というものは直接、地域、行政、等々にかかわらない側面が大きく、その点を正当に評価し、しかも基礎学を重視するというのが真の成熟した文化国家であると思う。（文学部）
- 大学に冷たい地域に住んでいることを移転とのからみでも実感しています（センター等）
- このような調査が非常に評価できると思う。またより詳しい内容を渉及すればもっと意味がある。（工学部）
- 医学領域における大学の地域に対する貢献というものが診療等に限られるものか、このアンケートではどのようにお考えでしょうか？それによりお答えの仕方もおのずと変わって参ります。同じく問３…２）はいわゆる文化系（非理科系）の先生方の大学に対するイメージが強く感じられ、我々には答えにくい内容です。問４ですが、タコ足キャンパスの当大学では全体的な回答、部分的な回答で変わってきます。（医学部）
- 日本人は戦後５０年自分の生活の向上をめざしてがんばってきたが、今、社会への貢献など新しい精神構造に移行しつつあると考える。寄付制度や定年時の退職金の扱い等、社会通念を変化させなければ人的交流や国際化に対応できないと考える。（システム情報科学研究科）
- （１）定員削減がひどくなり教員の多忙化は激しさを増しています。このような状況の中で、地域社会と交流することにより研究業績が増えるという見込みがない限り、交流は活発にならないでしょう。（２）地域との交流といってもその意味は多種多様です。内容を色々吟味して地域に貢献すればそれなりに評価するというシステムを作れば、地域社会との交流は進むかも知れません。（農学部）
- 教育・研究両面で地域の自治体や企業と密接な関係を築くことは、大学の活性化にもつながるので大変望ましいことである。一方、学部及び大学院への入学者が同じ偏差値同じ地域（地元）出身者で占められる傾向があり、同質化していることに大学の活性化という観点から危惧を感じる（数理学研究科）
- 地域の側に、都合の良い発言をする者を固定的に指名する傾向がある。それが当の研究者を御用学者にスポイルする結果になっている（とくに農水省にその傾向が強い）。本学の人材は豊富であるから、適材適所の地域サービスが実現するような「システム」が必要と思う。大学：社会の要請を組織単位で受け止める工夫。社会：効果の長期性を許容する度量と組織への依頼。負担の分散にもなろう。（農学部）
- 分野によって地域社会との交流の難易、向き不向きがある。地域に企業からの実験装置の借用や測定依頼などがあっても現状では応じきれない。その理由は：（１）実験装置は学内利用が多く、学外にまで開放する余裕がない。（２）学外者に実験装置を使用させるとしても誰かが最初から最後までつき合わなければならず、とてもそのような余裕がない。（３）実験装置を使いこなせる人が学外にいても、その人が大学に来て使うのであれば、装置に余裕さえあれば開放可能である。（４）学外（企業）の研究者と大学との人的交流が進むようにすべきである。学生が企業で実習や研修を行ったり、企業の若手技術者が大学で教育を受けたり、研究をしたりすることがもっとスムーズに出来るようにすべきである（センター等）
- 本来の（基礎）研究・教育業務におわれ、昇進の際の業績としては全く評価されない。地域社会への貢献を行う余裕がない（定員削減で若手教官も減っている）。雑用処理係にはなりたくない。（機能物質科学研究所）
- 地域社会と大学が交流を深めることは重要であると考えます。交流を深めるために、地域社会が大学に何を求めているのか具体的に知りたい。地域社会と大学の双方の希望や条件を調整するコーディネーターが是非必要です（農学部）
- 大学の研究とは社会に最終的に還元されるべきものであると考えます。しかし、社会とは地域社会に限定されず、グローバルな視野に立った国際社会全体を意味していると考えます。地域社会にとらわれすぎると、大学の本来の役割を果たせなくなると危惧しております。（所属部局不明）
- 「地域社会」という概念の内容を明確にしないといけ

ないのでは？Society なのか Community なのか、恐らく後者でしょうが、経済学的に言うと Community は相当広くなりますが…。そうして「異なった地域社会」の利益というものは果たして有るのでしょうか？ご研究そのものが特定の「価値判断」にもとづいて行われているように思うのですが…。（経済学部）

- 地域において、この大学にはこういう専門家がいるということをもっと広く認識していけるようになって頂きたい。多くの地域では地元出身者しか受け入れない体質があると思われる。かなりの大学教員が地域において生かされていないのではないか。手前みそだが、宝の持ち腐れ状態というのが現状であろう。多くの地域は、また大学側では業務が忙しく地域サービスのゆとりがもてない。それを業績として評価することが重要。（センター等）
- 出前講義、講演会等地域の人々、若者との交流の場を確保するために大学と地域が協同してワークショップ形式で直接的に交流できる恒常的なプラザ、機関の設立を企画すること、このような活動に対する評価を高めること。大学独自の企画で行っている公開市民講義形式はひとりよがりになりがちで、外部評価システムによるチェックが必要（機能物質科学研究所）
- 地域と大学の交流は大学を活性化させると思うが、大学の中に色々な人がいてよい。（たとえば研究ひとすじ）分野が違えば地域との交流なくして研究に打ち込む教官もいるだろう。色々な人が自由に研究・活動できる場の保障が必要。アンケートは答えにくい部分も多々ありました。（短期大学部）
- インターネットによる情報提供を、地域社会との間にもっと積極的に行う必要がある。（短期大学部）
- 地域社会と交流したいと思っていますが、時間的余裕がないのが残念です。（短期大学部）
- 今回の調査表に答えながら痛切に感じた感想は、これはどちらかというと実学的学問についての調査という印象です。私の専門が文学という理系の学問と違って直接生活の利便と関わることのない分野であることからくる違和感かも知れません。目に見える形での貢献度によってその価値が決められてしまう方向に流れている現状の中で、文系の学問は不利な立場に置かれています。しかし、かといって文系の学問は人間にとって不可欠の学問でもある筈です。文系の学問を評価する別の判断基準が望まれます。（短期大学部）

佐賀大学

- 理想はいろいろと語れるが現在の国立大学のおかれた厳しい状況（特に教育系）では、地域に対する何らかの関係や交流を新たに始めていく余裕はないのではないか。人口が少なく経済力も弱い地域（地方）では大学の民営化などは絶対不可能であり、地域と大学との関係を大きく変化させることにはデメリットの方が大きいかもしれない。（文化教育学部）
- 双方のためのコーディネート組織が必要だと思いました。（文化教育学部）
- とても重要な調査だと思われます。特に地方国立大学にとって研究・教育が地域にどの位貢献できるかということの問題を提起しているように思えます。（文化教育学部）
- 現在所属している大学の在職年数はまだ１年未満なので、このアンケートには必ずしも十分答えられるだけの意見をまだ持っていない。（文化教育学部）
- 大学の存在理由はまず研究及び教育にあり、これと平行して社会的責任を果たす意味において教育・研究の延長線上に地域社会との交流あるいは地域社会へのサービスがあると考える。従って大学の存在が危機に瀕していると思われる時期にこのような研究をされることの意味は、地域社会との関係に大学の存在意識を求めようとの目的であろうか。その点には疑問を感じる。大学が大学として機能している時、初めて十分に地域社会にとって有用な研究・教育機関で有り得るのではなかろうか。その時こそ地域社会との交流がプラスに働くのではなかろうか。大学の大衆化がここまで進んだ現在、学生の教育にもっと誠実で堅実な取り組みが必要であるように思われる。学生という我々の一義的な教育対象の分析・研究と対処法の研究こそ焦眉の急を要する問題で、知的好奇心の欠落した学生を前に途方に暮れている日々である。（文化教育学部）
- 近くに医大があり医学分野での貢献はあまり求められていない。地域社会への貢献は今後大学が進む方向性として正しいと思います。大学を縮小しなくて良いとするなら、そのような方向しかないようにも思われます。（文化教育学部）
- １．「地域社会」の概念について、例えば商業ではスーパーマーケットなどもはや県・市単位ではなく九州圏域（エリア）という捉え方をしており、そのような範囲で「地域」をとらえるべきであろう。２．学問・研究の目的が真理を追究することなのでそれは普遍性を目指すので「地域」という境界域とは矛盾する。３．大学と社会との関係は、あくまでも大学の研究成果を社会（地域・企業）が活用することが主であるべきである。もちろん地球的ニーズの要請に大学が応えるのは当然であるが一企業、一地方、一国の利己主義に大学が従うと地球的要請と相反することが多く大学はそうであってはならない。（文化教育学部）
- 地域社会との接点を持とうとするとひんしゅくを買うムードあり。・地域に学ぶべき。・地域との交流を評価すべき。御苦労様です。（文化教育学部）
- 選択肢の中から選ぶので必ずしも私自身の考え方が正確に反映されているとはいえないが、一部の調査事項、特に国立大学の設備形態については意義のある質問であると思う。地域と大学との交流は組織的な変革と共に、個人レベルの意識の変革が必要に思われる。地域や社会との交流のない研究や教育が、真の研究や教育であるのかを日常の教育、研究経験にあてはめて考え直されなければならないであろう。地域のシンクタンクとしての役割、地域住民や企業が自由に活躍できる学内環境（特に図書館、無単位制の授業など）についても検討していく必要があろう。（文化教育学部）

- 共通の問題意識さえあれば交流できるだろう。問題は共通の問題意識、議論の主題が設定できるかだ。（経済学部）
- 大学と地域の交流はもっと盛んに行うべきと思うが、大学教官の中には否定的な人もまだ多い。また地域との関係の中で企業との関連が深くなりコンサルタント的なことを依頼されることもあるが、資金が提供される段になると受けることが出来ない状況もある。制度的にきっちり決定されることが必要ではないか。関連が若干ずれるかもしれないが、米国のステートユニバーシティのように兼業（教授と企業の取締役など）が可能となるような設置を明確な型で（法的または通達で）行ってもらいたい。（経済学部）
- 大学の研究成果を地域に還元するという視点も大切だが、その以前に地域を十分に考慮対象として取り上げ、地域から学ぶという基本的姿勢が必要である。特に地方大学においては自らが立地する場所こそ「中央」であるという目を持って、もう一度きちんと見直すこと。「俺の研究は地域とは関係ない」という考え方は今や通用しない。何しろ佐賀大学は全体としても学生の８５％は九州内から来ている。（経済学部）
- 地域社会との交流は何かと酒のおつき合いにつながりになりやすい。酒を飲む機会が増えると勉強が出来ない。そうすると研究者としての価値が低下する。それを胆に銘じて社会との交流が出来ればいいのだが。（経済学部）
- 今回の調査において地域社会とは国・県・市町村・企業・経済団体等を見ているようであるが、農学部から見ると（生産現場・消費現場）が地域社会と考えているので、幾分アンケートの回答に疑問が残っている。（農学部）
- 国立大学の教官は地域社会との交流を今以上に望んでいる人が多いと思う。しかしこの数年大学改革、学部の改組、教養部の廃止等で非常に多忙となり、地域社会と交流する時間も精神的な余裕もないのが現状である。また入試の多様化で大学院も含めると年に７～８回の入学試験が実施されている。昭和４２年は入試は年に１回であった。さらに事務職員の定員減は大学の教育と研究に大きな負の影響を与えている。国の財源が厳しいのは理解できるが、教育と基礎研究に予算をつけない国の将来はないと思う。しかしながら私自身は出来るだけ地域社会との交流をはかっている。（農学部）
- 企業や自治体が大学に多く望むことは、個別的具体的事例の解決に対する相談や研究であるが、人材の育成という面から考えると、より広い視点から中～長期的効果の得られる方策を制度化すべきと思う。例えば、半年～１年間程度のサバティカルを企業や自治体職員がとれるようにし、その期間、研究生として大学に在籍するような制度である。この制度を維持するにはサバティカルを採用した企業・自治体に補助金を出し（大学には指導経費）その財源は国・企業・自治体からの金をあてるなどすると良いだろう。（農学部）
- 私の所属する佐賀大学は地域社会と密接に関連を持ち、貢献する大学として存続すべきと考えます。現在大学の在り方について行政改革がらみでいろいろと議論なされているようですが、今後文部省は多くの規制を取り除き、人材育成に大学独自の考えを受け入れるべきと考えます。次に財政的に見ると、公費では不充分なので大学自身基金を持つ努力をすべきで、今迄のように数億ではなく百億いや千億単位で集め、多くの事業をする必要があります。勿論同窓生の協力は当然ですが、同窓生による評議員会あるいは外部評価による意見を大学は積極的に取り入れていくことが、今後の大学には絶対に必要です。勝手なことを書きましたが、この調査の報告が出来ましたら農学部に一部ご恵送下されば幸甚です。（農学部）
- 現在の大学（国立）のシステムでは、地域に貢献することは無理を強いるものであると考えてます。大学の社会的役割は知識の先見性にあると思っています。先見性のある知識は普遍的な知識を求めるスタンスから生まれてくると思います。先見性を阻害するような多忙の増大は、社会の中での大学の必要性をなくすことに連らなるのではないでしょうか。（農学部）
- 地方大学にとっては地域社会との密な交流が必要と考えるが、大学自身を取り巻く環境が厳しく学内の委員会が非常に多いこと、教養部廃止に伴う教養課程の講義も担当しなくなったことにより、授業科目が確実に増加していることから充分な活動が出来ない。（農学部）
- 「地域に開かれた大学」を目指してある程度規制が除かれつつあるが、地域社会へのサービスを考える場合、大きな制度の壁があるように感じる。例えば大学の立派な図書館を地域に日曜日を含めて開放すればそれだけでも大きな意義があるはずであるが、人的配置・予算・国有財産規程等、困難な面がある。その他にも同様の規制の弊害が目に付く。ある程度緩和して自由裁量に任せれば思い切ったことが可能になると思う。（理工学部）
- 大学と地域社会の交流を現状より深めてゆくべきだとは思うが、具体的にそのための方策はと問われるとなかなか浮かんでこない。（理工学部）
- 現在、地域と大学の交流は主に教官個人の活動により行われているのが実状です。もう少し組織同志（大学と市町村、あるいは大学と県など）のネットワーク的なものを作っても良いのではないか。（理工学部）
- 地域社会に協力できるようなテーマをもった研究者であれば社会にも貢献できると思う。またそうであれば積極的にするべきであると思う。私が現在行っている研究はそうしたものではないために、今回のようなアンケートには答えに窮することが多い。（理工学部）
- 専門分野に関連した産業が地域にないため、育成することが特に大切である。しかし学生の指導に時間をとられすぎ、十分地域産業に貢献出来ていない。学生定員を減らし、基礎能力のある学生の入学を図り、それらの学生の教育に力を注ぐべきである。（現状は自覚のない学生に教官が酷使されている。）（理工学部）
- 地域社会との係わりが強く言われているけれども、研

究成果等、本来不本意なもので広く社会に還元されるべきものである。2．教育についても、将来を担う人材を育てることが重要である。3．研究によって得られた成果や大学人に求められた知識等に外部からのニーズがあれば、協力を惜しむべきではない。ただ、私企業の利益のみに寄与するものであるならば慎むべきであると思う。4．大学での教育・研究をもっと高度な立場から評価できるような社会になってほしい。このようなアンケートをすることは、低次元な方向に日本の社会全体が向いているように思う。多少不安を感じる。5．大学から「ゆとり」がどんどんなくなっている。（理工学部）

- 工学系と異なり理学系はより普遍性を求められる学問分野のため、地域と直接結びつくテーマはなかなか存在しない（地学・生物は別だが）。どちらかというと、どの地域でもそういった学問分野に接する機会があるという事の方が重要と考えている。そういった意味で「役割分担」とか「地域の特色を生かした」といった標語に抵抗を感じる。一般の受けはよいと思うが、それはユニバーシティではなくカレッジの行うべきことと思う。地方大学をすべてカレッジ化しようと言うのならば、反対です。（理工学部）
- 文部省の廃止が必要。国大立はイジ。（理工学部）
- 単純には回答できない。実際には様々な諸条件が存在し、この中で最善と思われる道を選択し実行せざるを得ない。例えば企業との共同研究。本来は一企業との共同研究は避けるべきと考えるが、極めて少ない文部省の研究費では研究活動が続けられない。研究費取得のためにはやむを得ずということもあり、いちがいに答えられない。問1、所属する学部については答えられるが大学全体については分からない。意味不明の表現がいくつかある。（理工学部）
- 街の活性化→1．人的資源の流動、2．“高度”と呼べるなにがし、3．若い世代の活躍、4．先端技術の中心、つまり、大学の活性化＝地域の活性化（理工学部）
- 中規模国立大学から文系を分断する一部の考え方、［大学審議会の近傍］に対案を明確に示し得る判断材料の基礎データとして貴調査が寄与できることを望みます。（理工学部）
- 大学は地域社会の文化的な中核の役割を、もっと積極的に果たすことで地域社会に貢献できる。（理工学部）
- 国立大学が民営化または公立化という飛躍した話もあるが、そもそも例えば米国などは国自体が異なることから、県立大学構想等も意味がないと思われる。米国では元来、州そのものがいわば一国である。言わゆる日本の県そのものとは異なることから、もし類似した発想を取るならば、日本の県制度そのものを根底から見直す必要があるのでは…。また国立大学の役割を将来にわたって考えるときは、常に逆に過去において国立大学が行ってきた役割を振り返って考えることも重要ではないだろうか。事実、私などは金のない家であったが入学金、授業料も安くしかも奨学金も頂いて大学院まで修了した次第である。多分、日本の国立大学が今のままの県体制で消滅することは、国自体の滅亡を意味することになるでしょう。（理工学部）
- 大学と地域の交流は深い方がよいと思うが、研究テーマに強く依存する。従って（画一的に）「大学と地域との結びつき」と言われても困る。例えば本学の場合、「軟弱地盤」（佐賀は昔はほとんど海だったらしい）、農業関係に関連したテーマなら強い結びつきが可能である。工学系の場合、佐賀県は企業の規模は小さくニーズも少ない。このように悲観的意見ではあるが、これを踏まえて今後どのようにしたらハッピーになるか関係者各位にお願いしたい。（理工学部）
- 国立大学としての教育・研究を維持しながら地域社会とも良い関係を持つことは大切であるが、最近の多忙さは異常であると思う。（農学部）
- 国立大学の設置形態について。＜意見＞国立大学の設置形態は現状のままにすべき。但し国立大学は1／3～1／4に数を少なくした方がよい。数を少なくする際には、国立大学間の合併によって進めていくべきである。現在の状態ではあらゆる面でどうにもならない状態にあるように考えられる。このままの状態で改革を続けても効果的結果を得るのは難しいのではないか。地域への貢献は県立大学へ任せたらどうだろうか。国立大学は日本全体国際レベルでの貢献に的を絞った方が税金の有効使用になると思うが。（文化教育学部）
- すべての教官は年間の研究業績をリストアップして提出するように義務づければ、大学のアウトプットが全体として増加するようになると考えられる。（理工学部）
- 地域との交流といっても大学や学部等の組織としてのもの、教員の研究と直接結びついたもの、研究とは直接結びつかないものに分けて考えるべきではないか。基礎科学系のように研究内容が地域性のない分野の場合、地域との交流が専ら個人の奉仕のような形になってしまう。組織として対応できないだろうか。（理工学部）
- 研究費が少ない。2．研究室を充実してほしい。（農学部）
- 大学が関わる地域と言うことでは都道府県単位でなく、東アジア・九州・北九州地域といった、より広い範囲へと拡大していくべきであり、エリアを広げていく対象・住民と関わり交流していくためには、道路・交通の便や大学の敷地、施設の物理的な大きさから再検討する必要性があると考える。現状ではわざわざ佐賀大学を訪れて交流する希望はないと思う。（文化教育学部）
- 私の場合、研究分野の性質上、企業等との交流は考えられない。研究分野を離れた社会的・文化的（?）交流ということならありうると思う。（文化教育学部）
- 佐賀県は農業県ですが、あまりにも経済に振り回されている傾向があります。農業は天候に左右されながら自然の理にかなった安全な農産物を生産し、消費者に安心して食べていただくことを心がけるべきなのに、それを忘れています。大学はその矛盾を明らかにし、本物を志向することが大切と思われます。（センター

等)

- 国立大学が国民の税金で運営されていることの意味、意義を一生懸命考えています。このままの状態では１０年後には国立大学のいくつかがつぶされることになると本気で思っています。自分の大学がそうならないことを願って走り回っていますが、大部分の先生達には全く危機感がありません。地域が、「こんな大学いらない」「税金の無駄遣い」と思うようになったら佐賀大学は一瞬でつぶれるだろうなと思います。１８才人口をあてに出来ないことは自明なことなのに、生涯学習に関する熱意も、地域に対する貢献にも興味のない大学は生き残れません。佐賀大学は「滅び」に向かって進んでいっていると本気で心配しています。（理工学部）
- 研究分野によっては、地域社会をやりやすい分野とそうでない分野（その暇がないことも含めて）があります。また、即効性がある場合もあるし、失敗の可能性が大きい場合もあります。ですからセンター全体として、地域を考えた研究分野と国際的な研究分野があればよいのではないかと思います。私の分野では、すぐに地域に貢献できる研究と普遍性（地域にとらわれない）を持ちうる研究とに分けていますが、そのうちに両者が結合するものと思っています。農業の発展に寄与することは容易ではなく、地域との情報交換は非常に重要です。（センター等）
- 現在は、社会の様々なシステムが変革を迫られていると思います。地域社会も大学もそれに対応してゆくのに精一杯で、他のことをする余力が残っていないのが現状なのではないかと思います。しかし、そのような時代はそう長くは続かないと考えています。次の時代のキーワードは、異なる組織間での協調なのではないかと思います。（理工学部）
- 今回のアンケートに回答するには、地域との交流も含めた大学の全体像を把握しておく必要があります。しかし、自分の専門以外までも幅広く知っている人間は意外と少数ではないでしょうか。その点から考えると、今回の回答の選択肢は選びにくい（判断しにくい）ものが多く、信頼性に影響する可能性があるのではと感じました。（遅くなってすみません）（農学部）
- 大学人の活動（教育・研究）が地域の人々に理解できるよう努めることも必要です。例えば専門の学会を佐賀で開催するとき、その前夜祭に市民向けのフォーラムを開くなど“平易な言葉で語りかける”ことがあってよい。何らかの形で地域社会、市民の大学活動への関心を掘りおこす必要を感じる。（理工学部）
- 地域との交流は必要と考えるが、研究レベルの維持がそれで可能か。各教官がそれで満足できるかが課題となる。また学生も視野が狭くなりやすい。（センター等）